

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikers ~ 神聖なる風 ~

えんヴいい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 神聖なる風

### 【Nコード】

N3088M

### 【作者名】

えんヴいい

### 【あらすじ】

ある世界に人々を護るためにがんばる青年たちがいた。  
ある時一人の青年がある実験に参加する。しかし、実験が失敗してしまい

偶然的にも青年は違う世界に行ってしまった。

その時、青年は何を思ったのか？弟子と呼べる双子の兄弟か？ライバルと呼べる親友か？父と呼べる上司か？その世界でのこれからか？

この小説は作者のオリジナルストーリーで進んでいく予定です。  
若干原作も介入します。ですので温かい目で見守ってください。

## 青年の日常（前書き）

はじめまして！えんぐいいと申します

この作品が自分にとっての初作品ですのでがんばらせていただきます

## 青年の日常

### プロローグ

見る限り廃墟しかない町。

そこにスーツ姿のSPみたいな人が五人と白いロングコートを着た男が二人いた。

そして、

その周りには目に生気がなく、まるで操られているような人間が10人くらいいた。

するとロングコートを着た一人の男が言った

???? 「おおし、みんな【墮人】を囲め。そしてごめんなさい、ゆるしてえ

と言つまでめっちゃめっちゃにしてやれ。」

見た目16歳だろうか、ツンツンした真つ赤な髪の毛である。  
この人物はSっぽいところがあるらしい。

??? 「に、兄さん！それはまずいつて！この人たちは邪神に操られてるだけなんだよ！？」

弟の方は青い髪の毛で肩くらいまで伸びた髪が印象的な子だ  
どうやら弟はしっかり者みたいだ。

??? 「知ってるよ氷臥ヒョウガ ただの冗談だ。」

氷臥 「兄さんが言うつと冗談じゃない気がする…」

氷臥と呼ばれた青年は若干呆れ気味だが、それ以上先は言わないことにした。

??? 「まあんなこといいからとつとと、取り払うか。」

炎の神こと炎鬼エンキ様が貴様らを邪神から解放してやる！！」

炎鬼と名乗つた青年は右手に持った真つ赤な剣を上にかざして呪文を唱えた。

炎鬼 「我が体に宿りし炎の神よ、我に灼熱の力と最強の斬撃をここに授けたまえ……」

すると炎鬼の剣には大きな炎の塊があつた。  
そして、5人墮人に向け炎の塊を向けている。

炎鬼 「おおし！おめえら下がれ！！ いくぜえ！！

くらいやがれ！  
炎陽玉エンヨウギョク！！！！」

炎の塊は命中した。すると5人墮人の体からは黒い何かが出て消えてしまい、

その人たちは気絶してしまった。

炎鬼 「終わったか。おめえら、こいつらを救護班のところに運んで置け！！！」

SP達 「了解しました！！！」

氷臥 「相変わらず無茶苦茶で熱いねえ兄さんは。それじゃあ僕も！！！」

氷臥は左手に握ったマリンプルのような蒼い剣を上上げ呪文を唱えた。

氷臥 「我が体に宿りし氷の神よ、我に永久なる凍土の刃をここに授けたまえ……」

唱え終わると氷臥を囲うようにして氷の剣が5本出てきた。

氷臥 「できるだけ痛くないようにします！行け！  
アイスサーベル 氷長剣！！」

氷の剣は残りの墮人を切り裂くように飛んでいき、同様に黒い何か  
がでて  
気絶してしまった。

氷臥 「はあく終わった。帰ろうか兄さん。」

炎鬼 「ああ、帰るとす」「おい、皆無事か？」「」

炎鬼が言うのをさえぎるように誰かが大声を出しながら  
遠くの方から走ってくる。

その人物は……

氷臥・炎鬼 「「翔護!! (さん)」」

SP達 「兄貴!!」

翔護 「おお、相変わらず元気だなお前ら。特に早坂兄弟は。」

神童組合のエース風切翔護だった。

炎鬼 「どうしてお前がいるんだ？今日はオフの日だろう？」

氷臥 「そうですね、どうしてですか翔護さん？」

二人が疑問をぶつける。

すると、翔護の困惑した顔で

翔護 「え？お前らがヘルプを出したって聞いたから、助けに行け  
って

ボスがいったけど……」

言葉の途中でだんだん気が付いてきた翔護。

氷臥・炎鬼 「「(また、ボスに騙されたんだ……)」」

と心の中で翔護に向けて合掌する兄弟であった。

とある日の神童組合の一日である。

## 青年の日常（後書き）

この話は主人公がいた世界での日常風景です。

次回あたりを目安に主人公を別世界に飛ばしたいと思います。

## キャラ設定

主人公およびキャラ設定

名前 風切 翔護

年齢 22歳

身長 187cm

髪茶

資格 教員免許、隊長指揮権、師団体実力権。

能力 風の神力 守護獣召換 料理

特別能力 次空間転移

装備 風の神器 神の羽衣

## 説明

年齢は22歳で、顔立ちは非常によく、周りの女子からは持てている。

しかし、本人に自覚がないため、男子からは嫉妬と憎悪の目で見られ、

女子にはため息をはかれる。

生まれてすぐに母親が他界して、父親も交通事故無くなり、9歳まで孤児院にいたが、

ひよんなことから、守が引き取り、そこからは守に育ててもらった。風の神の力があり、風を操れる。

また、教員免許を持っており、22歳になるまで、18から教師を特例でやっていた。

その時の生徒からの信頼は厚かった。

料理に関しては、某貝の名前で有名な人の夫が料理を食べたら「びやああああうまい！」と絶賛するほど。

#### 装備

神器・・・神の力を宿して生まれた時に、現れる物。

早坂兄弟は炎の剣と、氷の剣。

翔護の場合は柄の両端に鎌がついた大鎌と、1本の短剣。

鎌はいつも直径2m幅60cmの大きな黒い十字架が描かれた白いアタッシューケース

みたいなものに入っている。

神の羽衣・・・作中では白いロングコートと呼ばれているもの。

これは神の力を持ったものしか着ることができない代物。

一般の銃弾が聞かない防弾性で、また《常に清き者》という力があ

り、  
邪悪な邪神からの攻撃に対抗できる鎧でもある。  
破損したとしても、神力を流せば、再生されていく。

風の短剣・・・翔護の持つ武器の一つで、風の神力を使えば見えな  
い風の刃が最長1.5M  
まで出る。おもに翔護は護身用として、常に身につけている。  
刃の色はエメラルドグリーン

風の大鎌・・・「花鳥風月」と翔護は呼んでいて翔護の武器である。  
おもにアタッシュケースに入っている。  
翔護はそれを、背中に背負って（ギターをしょってる感じ）いつも  
歩いている。  
また、刃の部分は柄の方に折れるようになっていて、そうすること  
によりケースに入る。  
柄の両端に刃が付いている。

守護獣召換・・・神の力を持つもの達が使える術で、  
自分だけの神獣を召換することができる。

次空間転移・・・空間と次元を行き来できる力。  
扉を翔護がこの力を使って開けると、開けた先が違つところにつな  
がる。

例

「よし、今日も学校いくぞ。」家の扉をあける。

ザッパアン！ザザザ

谷の上の廃れた民家の扉から出てくる。

みたいな感じですよ。

名前 早坂炎鬼

年齢 13歳

身長 176cm

髪 真っ赤でツンツンしている。

能力 炎の神力 守護獣召喚

装備 炎の神器 神の羽衣

説明

炎の神力を持つ少年で、炎を操れる。

組織の中で若手にもかかわらず、双子の弟と一緒に第一線で戦っている。

お祭り騒ぎや楽しいことが非常に大好きな子。

はしゃぎすぎるところをいつも弟によりストッパーをかけてもらっ

ている。

#### 装備

炎の神器で、赤いルビーのような色の剣が特徴的。

名前がフランベルジュ

フランベルジュ・・・炎鬼の神器で、ルビーのような色をした剣。  
炎鬼の力により剣の威力があがる。

名前 早坂氷臥

年齢 13歳

身長 175cm

髪 青い色で、肩まである。

能力 氷の神力 守護獣召換

装備 氷の神器 神の羽衣

#### 説明

氷の神力を持つ少年で、氷を作り操れる。  
組織の中では人懐っこい性格で、優しい心の持ち主。

はしゃぎすぎる双子の兄の炎鬼のストッパーを務めるしっかり者。  
また、状況の判断がすごく良く、若くしてエリート地位までいける実力を持つ。

#### 装備

氷の神器で蒼いマリンブルーのような色の剣。  
名前はヴォーパルソード

ヴォーパルソード・・・氷臥が持つ氷の神器。  
氷臥の力で威力があがり、作りだす氷の強度も変わる。

名前 神童 守

年齢 50歳

身長 185cm

髪 黒に白髪かった髪

能力 護りの神力 守護獣召喚

装備 護りの神器 神の羽衣

## 説明

神童組合の長で、翔護、早坂兄弟の直属の上司に当たる人。人をからかったりするのが好きで、自分勝手。でも、ここぞという時は頭の回転が速く、頼りになるリーダーでそういうところを知っているから、周りからの絶大な信頼がある。翔護達と違いただ一人攻撃する神力が無い特殊な能力。代わりに護る力があり、どんな攻撃も寄せ付けない。翔護に与えた次空間転移も、もともとは護るべき人たちを安全な場所に移すためのもの。翔護を9歳の時に引き取った張本人。

## 装備

護りの神器と言い、少し特殊な神器。護るために在るもの。  
名をアイアス

アイアス・・・守の神器で、表面があらゆる光を反射するほど美しい盾の神器。これに攻撃をしようものなら逆に壊される。世界最高強度の盾といってもおかしくない。

また、この盾の力により、さまざまな力を守は使える。たとえば次空間転移、そして、完全反射である。完全反射はあらゆるものをその盾で反射する力。(一方通行と同じ) また、聖なる領域サンクチュアリと呼ばれる境界を作り、その中を完全安全領域にすることもできる。

名前 風切 梓

年齢 享年26歳

身長 156cm

髪 茶色で腰まで伸びたロングヘア

説明

翔護の亡くなった母親で、守の親友。  
笑顔が美しく良く持っていて周りからは絶世の美女と呼ばれていた。  
出産の後に病気にかかってしまいそのまま他界してしまった。

名前 邪神

年齢 不明

身長 不明

髪 不明

説明

神童組合が追っている存在。

人間の負の感情や、欲望に付け込んで人間を操る力を持っている。過去に何度か追いつめたがそのたびに逃げられている。

世界を支配して、神界へと帰って神界を支配しようとしている。

しかし、神々は邪神が来ると、神界が滅ぶと知っているので、人間界に神の力を放った。それが神童組合。

### 【墮人】

邪神によって負の感情に支配されてしまった人間。

こうなってしまうた人は神の力でなければ助からない。

神の加護を受けた人間なら、弱い者などは倒せる。

人々を無差別に攻撃するなど理性が奪われる。

## 第1話 始まりの日(前書き)

やっと主人公を少ししゃべらせることができた！

## 第1話 始まりの日

それは、一人の不思議な力を持った  
やさしき青年の話。

ここは、日本の零法町レイホウチョウと呼ばれるところ。

そして、一つの組織がある町。

組織の名は 神童組合

そこから始まる一つの物語。

side

バタバタバタ

ドタドタドタドタ

ゴロゴロゴロ

コン！コン！

バン！

うるさい音と共に勢いよく扉は開いた。

「????」ボス！只今戻りました！！」

元気よく部屋の扉を開けて中年の少し白髪かかった男性に22歳の茶髪の青年は元気よくあいさつをした。

「????」おお翔護か、どうだった今回の仕事は？ 楽しかったか？」

中年の男性は笑いながらたちあがり青年に尋ねた。

翔護「いや、なかなか満足できる任務でしたよ。」

翔護は嬉しそうに男性に話している。

この翔護という青年は

名前は カザキリショウゴ 風切翔護 22歳。

性格は明るくて、優しく誰とでも仲良く話せる。

身長は187cmと日本の平均身長だと高いほうである。

髪は茶色で顔立ちは整っていて見た目は18歳くらいの優しいお兄さんタイプの人。だからか、教師時代には生徒たちからは信頼されていた。

余談だが周りの女性たちからは大人気である。

本人自覚ありません!!

そして、ボスと呼ばれている男性

名前は、シンドウマモル神童守56歳

白髪頭で少し髭をはやしている。

翔護の属する組織の長。

性格は大雑把で自分勝手だが、いざというときは頼りになる人。  
またいきなり翔護を引き取った張本人。

そこで翔護が男性に

翔護 「ボス、次の仕事はなんですか？」

と自分の次の仕事内容について聞いた。すると守は

守 「次の任務は、うちで実験中の、空間転移実験に参加  
してもらおうかもしれん。」

と、不敵な笑みで答えた。翔護はこの守の笑みで体中から嫌な予感  
反応が出るのを実感した。

翔護 「ええ〜！？、あれはまだ開発途中のはずじゃあ？」

翔護が驚きながら答える。それもそのはずなんて言っただってその参加する

実験は翔護もよく知っているから。

すると守は心底つれしそうに笑いながら楽しんでいる。

守 「喜べ！お前が被験者第一号だ！！」

翔護 「いや、普通喜べないよ!？」

守 「はい、もうこれ決定事項、変更なし明後日決行。まあなんだ、成功したら飯おごってやる。」

翔護 「失敗前程!？、はあ〜学校の先生続けてればよかった・・・  
・  
てか、ボスの力使えばどこでもいけるじゃないですか。」

守 「あれはただの人間には使えないだろ？お前たちみたいなのじゃなきゃな。」

翔護 「だからって俺がやらなくても・・・はあ、憂鬱だ。」

守 「俺らがそれで良くて、この組織には一般職員もいるだろうが。」

あいつ等は移動手段が自分の足だからな。少しは楽させてやらんと。」

二人でわあわあ言い合っていると守がいきなりまじめな顔で言ってきた。

これが守の悪いところである。さっきまでのオチャラケた雰囲気はもうなかった。

守 「翔護、当日になったら俺の部屋に來い。」

いきなりの変わりように少しびっくりしたが、

翔護は守が真剣に言っているので黙って頷いて了承した。

守 side

守 「早いもんだな・・・あいつが大きくなるのは。」

自分でもわかるくらい俺は疲れた感じで部屋にいた。

守 「我らの力が呼び起こした運命か、はたまた因果か  
どちらにしるあの子には少しつらい未来かな。」

シュボツ

煙草に火をつけて、あいつが映る写真をみる。

「お前の忘れ形見・・・しかと送り届けるぞ、梓。」

そうつぶやくと部屋の明かりは消え、守は部屋を出た。

守 side out

風の青年は知らない。

この実験が終わるころには自分はまだ、

元の世界には戻れないことを・・・

**第1話 始まりの日(後書き)**

駄文ばかりですみません！

これからをもっと努力します！

## 第2話 運命の日そして、別れの朝（前書き）

少し遅くなってしまいましたたがなんとか書いてみました。

今回は4年前の事件ですね。

一応この小説は作者のオリジナル進行で行きますので、

セリフが違つう？なんてことがしょっちゅうあることをお忘れなく。

## 第2話 運命の日そして、別れの朝

（翔護 side）

ジリリリリ！！！！

朝から俺の耳元で何かが騒いでいる。

一つ言えることは非常にうるさいということだ。

翔護 「うゝゝゝうるせええええええええええ！！！！」

バキッ！ドカア！

その時何かが破壊された音がした。

そう、これが俺の朝の始まりだ。

翔護 「なんだ、もう…朝か…」

俺は昨日の夜から眠れないでいた。なぜかというところ、今日が実験当

日だかだ。

ボスには今日来いと言われたからなあ、自分の中の物事に整理がつかずにこの日を迎えてしまい

すこしショックだが、まあボスなら大丈夫だろ。

翔護 「はあ、考えても仕方ない。支度してボスのところに行くか。

「

なんか、すっごい嫌な予感しかしないけど、行くしかないよな

とりあえず着替えることにした。

side

身支度を終えた翔護は守の部屋に来ていた。

翔護 「んで、ボス話って何ですか？」

部屋に来て守に翔護はこの前のことを尋ねた。

守 「翔護、これからお前に俺の力の一部を与える。」

翔護 「……ヘッ？ いやいやいや、いきなりどつどつこと？  
？なんでこんな実験に  
ボスの力をもらわなきゃいけないんだ？」

翔護は最初は意味がわからなかったがすぐに理解して

よくわからないといった感じになった。

守 「なあに、簡単だよ。唯の気まぐれだww」

翔護 「気まぐれで自分の力を与えるとか…ボス器が広いというか、  
なんというか

無茶苦茶です。」

守 「な〜に全部やるわけじゃねえ、あくまで一部だ。おおし、ん  
じゃいくぞ〜」

そう言って守は翔護の胸に手を置き、何か呟きだした。

守 「神の力を持ちし者に、我が力を与えたまえ……」

すると、守の手が光り、そのあと静かに収まった。

翔護 「終わったみたいですね。それで、なんの力ですか？

ボスは確か俺たちみたいないな戦闘型ではないから、補助系ですか？」

翔護が不思議そうに尋ねてきた。守は少し疲れた顔で答えた。

守 「今お前に与えたのは、次空間移動の力だ。その力さえあれば、イギリスでも、イタリアでも、どこでもいけるぞ。ああ、あと限定条件で、扉がないと使えないから。」

まあ簡単な話、そこらへんの扉を開ければ普通は外につながるけど、お前の場合は違つところに繋がるってわけだ。でも、繋がる先も扉だから、鍵がかかっていると繋がらないぞ。まあ扉から扉に移るとでも考えておけ。」

どこのネコ型ロボットが出すなんとかドアとほぼ同じ能力である。

翔護 「でもいいんですか？ボスこの力無くしちゃったでしょ？俺に渡したせいで。」

翔護は申し訳なさそうに言った。しかし、守は何でもなさそうに

守 「いや、俺はコピーしてお前に渡しただけだから、オリジナルは俺のままだ。

だから、俺は何も失ってないぞ。」

と、意外とすごいことを言った。

早い話が守は何も失っていないということだ。

翔護 「相変わらずいろいろするんですね…さすが、戦闘はできないけど

他が特化されただけはある。」

守 「それと、これも持っていけ。もしも時はこれ売って食ってけ。

少なくとも、どこで売っても3億はする代物だから。」

そういつて、守は金庫からたくさん金と宝石の入ったアタッシュケースを渡した。

翔護 「ええ！？これはもらえませんか…！、、、いや、これを渡すという事は、

失敗の可能性高いってこと！？」

まさかすることに驚きそして悲しんでいる翔護をしりめに守はニシシと笑っている。

守 「さすが、うちのエリートだけはある。そうだ、この実験は失敗の確率がひじょおおおに高い！

よって、これは上司である俺からの些細なお詫びだ。」

守は悪びれもせずに翔護に言った。

翔護は今にも怒りそうだが、ああ自分たちの上司はこんなひとだったなあ……

ともう諦めモードであった。

翔護 「風切翔護只今をもって、不本意ではありますが、その任に就きさせていただきます。」

翔護は敬礼を守る。

守 「御苦労。健闘を祈る。」

そして、お互いかたい握手をして、翔護は部屋を出て行った。

この部屋には様々な機材が置いてある。

中でも、部屋の真ん中には大きな装置があった。

すると、一人の作業員が準備が整ったようので翔護を呼んだ。

作業員 「翔護さん、準備が整いましたので、これより開始いたします。」

と、視線の先にいる神器の入ったアタツシユケースを背負った翔護を呼んだ。

翔護 「はあい。わかりました。それじゃ行ってくるよ。皆、しばらくの間俺がいなくてもしっかりやるんだぞ。」

翔護は自分を囲むようにいる人物たちに最後のあいさつのように言った。

炎鬼 「おう、ここの事は任せておけ。お前はゆっくりして来い。」

氷臥 「翔護さん、しばらくの間会えないのは寂しいですけど、頑張ってきてくださいー!!」

部下達 「兄貴！いつてらっしゃい！！！」

守 「元気だな。帰ってきたらうまい店教えてやる。」

皆各々伝えたいことを伝え、翔護をみている。

翔護も皆の顔をみて、決心がついたようで。

笑顔で別れを告げた。

翔護 「それじゃあ、みんな頑張ってね！いつてきます！」

翔護は装置の中に入って行った。

翔護が入った後、装置の扉が閉まり、目をつぶりたくなるような光が部屋を照らした。

しかし、ここで、謎のアクシデントが発生した。

作業員 「ふう、なんとか無事に成功……！？何だこれは！？ボス！装置から異常なほどの数値が、翔護さんの行先は確か別次元に設定した

はずなのに……たっ大変です！座標が勝手に変わって場所がわかりません！！！」

作業員は慌てていて、守もあせっている。  
周りの者たちもあせっていた。

守 「どういうことだ、これは別次元に行く実験のはずだ！  
まずい、このままだと翔護の体がもたない。すぐに実験を中止しろ  
！！」

しかし、時すでに遅く装置の中に翔護の姿が無い。  
翔護はどこか違う場所に転移してしまった。

一同 「「「「「あれ!?!」「」「」

皆に嫌な汗が流れる。

守 「まさか。。。本当にやっちゃった?・・・」

その日翔護は上司達のうつかりにより違う世界に行ってしまった。

side out

スバルside

こわい。怖くてたまらない。

私は今日お父さんに会いにここに来たのに、突如発生した火災の混乱に  
より、ギン姉とはぐれてしまった。  
周りは目で包まれている。かろうじて残っている道を私は進んでい  
る。

スバル 「ギン姉えどこ?? 怖いよお誰か助けてえ!!!」

いつも一緒にいてくれたギン姉と逸れてしまった私は恐怖と寂しさ  
で打ちひしがれそうだった。

ギン姉にもしものことがあったときどうしよう・・・  
私は考えるだけで不安になり、泣きたい気持ちになった。

と、そこに私のいるすぐそばにある銅像が、私の方に倒れてきた。  
ああ、最後の最後で私はすぐくドジなんだな・・・

スバル 「きゃあ! 誰か助けて!!!」

叫んだはいいが誰もいないと思っていた。自分はここで下敷きにな  
り死ぬのだと。  
怖くて目をつぶっていた。

でも、あの重量感のある銅像は一向に落ちてこなかった。  
そして、私の顔に近くから声がした。

翔護 「大丈夫かい？怪我はなかった？」

その人はとても大きなケースを背負った神様みたいな人でした。

＼スバルside out＼

（翔護 side）

う、うん？

ここはどこだ？なんか、やけに暑いな。

気が付いたらここにいるし……

翔護 「はあ、なんか、どう考えても失敗な気がするな。」

確か俺は実験で別次元に行くはずだったが、ここは明らかに違う気がする。

．  
．  
だつて装置止めるとかボス言つてた気がするし、実験中止だとか．

そして、

今いるここはなぜ、なぜ、ここはこんなにも……

翔護 「ここは炎に包まれてるんだああああ！……！！……！！」

そう、今俺の周りは炎に包まれている。  
これは遠まわしに炎鬼のいやがらせか？

翔護 「とりあえずここどこだ？ 見た感じ……空港みただけ  
ど。」

俺はとりあえずこの絶賛大火災の空港から出ることにした。  
道らしき道には瓦礫の山がある。

とりあえずそれを蹴散らして進んだ。  
そして、しばらく歩いていると、人の気配がした。

翔護 「ん？誰かいるのか？あれは……子供だなあ。」

俺の視線の先にはまだ幼い女の子がいた。  
しかし、女の子は逃げようとはしていなかった。

女の子 「ギン姉えどこ??怖いよお誰か助けてえ!!!」

どうやら誰かを探しているみたいだな。とりあえずここは危ない。保護するか。

俺がそう思って近づいた時、突如女の子の近くの銅像が倒れてきた。

女の子 「きゃあ!誰か助けて!!!」

俺は気がついた時には体が動いて行た。

翔護 「ッ!?クソッ!我が体に宿りし風の神よ我が足に疾風の!」  
加護を!!!」

俺は神力を足に集中して速度を上げ  
とっさに女の子を抱きかかえて銅像から回避した。

翔護 「大丈夫かい?怪我はなかった?」

さっきまで女の子がいたところには銅像がいた。  
まさに危機一髪だな。

俺は女の子の目線に合わせて優しく言う。

女の子 「うん！お兄ちゃんありがとう！」

女の子はそう言っが、少しやけどの跡があったり、擦り傷がある。

翔護 「だめだぞ、女の子だから傷は治さないと綺麗になれないぞ。」

俺はそう言って女の子の手を握って呪文を唱えた。

翔護 「癒しの風よ、大いなるその優しき力で我らを包みたまえ。ファーストエイド！！」

俺は癒しの力で女の子を治療した。

女の子 「わあ！体がかかるい！お兄ちゃんありがとう！」

どうやら治ってくれたらしい。  
治した側もこれなら安心だ。

翔護 「どういたしまして。名前なんて言っのかな？」

とりあえずずっと女の子というわけにもいかないし、名前を聞いておくか。

スバル 「スバルです。あの！、お姉ちゃんとはぐれちゃったの！お姉ちゃんを探して！！」

なるほど、スバルがここから逃げなかったのはお姉さんを探していたのか。

まだ、こんなに幼いのにしっかりした子だ。

だからこそ、こんな危ないところにはいさせたくないな。

翔護 「それじゃあスバル、俺が探すから、君は逃げなさい。あと、お姉ちゃんのお名前教えてくれるかな？」

早くここから逃げてほしいな。

俺はそう思っただけでスバルに聞いた。

スバル 「お姉ちゃんはギンガって言うの！！お願いギン姉を助けて！」

良く見ると、涙で顔がぐしゃぐしゃだ。

一人でさびしかったのに……本当にこの子は強い子だ。

翔護 「わかったこの約束神の名に誓って護ろう。」 「ドゴオン  
!！」

女の子にそう言い終わった時いきなり天井が爆発したような気がした。

翔護 「よかったなスバル、ちようどお迎えだ。」 「ふえ？」

???? 「時空管理局です！誰かいますか!？」

スバルが惚けていると、そこから白い悪魔が下りてきた。

翔護 「ああ、ここに一人いる。早く来てくれ！」

俺はとりあえずスバルを逃がすことにした。

???? 「大丈夫ですか？私は高町なのはっています。  
さあ、私につかまってくださいこっからひとつ飛びです!。」

翔護 「いや、俺じゃない。この子を頼む。」

俺はそう言っただけでスバルを抱っこしてなのはに渡した。

なのは 「え？ああはい！わかりました。けど、あなたは大丈夫なんでしょうか？

この子が終わったらすぐに来ます！それまで安全な場所にいてください！。」

まあ、なんと正義感が強いというか。

どちみち俺はギンガを探さなくてはいけないから動くけど。

翔護 「ああそうさせてもらう。」

俺は嘘を言っただけでとりあえずこの場を収めることにした。

スバル 「お兄ちゃんありがとう！また会えるよね？」

スバルが心配そうに俺をみてる。

こんな小さい子に心配されるとは、俺もまだまだだな。

翔護 「ああ会えるぞ。それまでにはもう泣き虫にはなるなよ。」

別れ際に少しからかってみた。

あらら顔を少し紅くして怒ったみたいだ。

翔護 「それじゃ、この子をよろしくお願いします。」

俺はそこから離れる

スバルはまだ心配そうだが、笑って見送る。

なのは 「もう大丈夫だからね。こっから一直線だよ。

レイジングハート!!」 『All right Master』

そしてスバルとなのは達は飛んで行った。

〈翔護 side out〉



### 第3話 どんこいびっくり大移動

（ギンガ side）

はやく！はやくあの子を見つけて避難しなきゃ！

私は今焦っていた。

妹と一緒にお父さんの所に遊びに来たというのに、  
空港で火災が発生し、よりもよってその妹と離れ離れになってしまった。

スバルはまだ幼いのに

あの時私がしっかりしていれば……

ギンガ 「スバル！どこ！？いたら返事して！」

あの子はかけがえのない大事な家族。

なんとしても助けなきゃ！

でも、このとき気がついていなかった。

私が今いる階段が今にも崩れそうだということに。

私は思考の海に深く潜っていて気付いた時にはもう、足場はなかった。

ギンガ 「きゃああ！！」

正直もう駄目だと思った。

なんせこっから下までは暗くて見えないくらいある。  
この高さから落ちたら正直助かる見込みもない。

私は来るであろう衝撃に備えて体を硬直させた。

しかし、いつまでたっても衝撃は来なかった。

そして、怖くなって瞑っていた目を開くとそこには

翔護 「なんとか間に合ったな。大丈夫かい？」

と優しく微笑んだ一人の男の人が  
私を抱きかかえていた。

＼ギンガside out＼

＼翔護side＼

俺は今、スバルとの約束を護るためにギンガを探していた。

翔護 「おお〜い、だれかいるか!！」

声を出したけどなんの返事もない。  
もしかして非難したのかな？

とりあえず風の短剣で壁を切り崩して進んでいくと  
それらしき女の子が高い通路のところに行った。  
どうやら向こうも向こうでスバルを探しているみたいだ。

翔護 「あの子かな？もう煙もだいぶ充滿してるし行ってみるか。」

と、歩みを進めたとき、ギンガの居たところが崩れ落ちた。

翔護 「なっ!」  
「まったく姉妹そろって危なっかしいな。  
我が体に宿りし風の神よ、我が足に疾風のごとき轟風を纏わせたまえ。」

そして、俺は足に風を纏わせて飛んだ。  
飛んだとは文字通り今俺は飛んでいる。  
足の裏に強力な風を纏わせそれをブースターのようにして飛んでい  
る。

なんとか間一髪のところまでギンガを抱きとめることができた。

翔護 「なんとか間に合ったな。大丈夫かい？」

俺は地面に着地しギンガを降ろして尋ねた。

ギンガ 「っえ！っあ！は、はい！大丈夫です／＼／＼」

若干顔が赤い気がするが本人が大丈夫と言っているし大丈夫だろう。でも少し心配になって顔を見たがちょっとした切り傷だけで心配はなさそうだ。

翔護 「スバルに聞いたけど、君がギンガちゃんの間違いないかな？」

一応確認のために聞いてみた。  
まあこの子以外にもうひとはいないけど。

ギンガ 「スバルを知ってるんですか！？あの子は大丈夫なんですか！？」

どうやら相当心配だったみたいだ。  
無理もない妹がこんなときに迷子だもんな。

翔護 「ああ大丈夫だ。さっき保護してもらって先に避難したよ。」

俺はギンガに事の詳細を簡単に説明した。

ギンガ 「そうですか。妹を助けてくださってありがとうございます！  
すー！」

ギンガは深々とお辞儀をしてきた。

別段気にすることでもないのに。

というか、神童組合のときの方が厳しかったなあ。

翔護 「いって。当然のことをしたただけだから。さて、  
善は急げって言うしとっところから避難しようか。」

そして俺は歩こうとしたとき不意に後ろから、

フェイト 「時空管理局のフェイト・T・ハラオウンです！大丈夫  
ですか!？」

さっきとは違う人が来た。

あちやくあの場所にはいないのばれちゃったかな

フェイト 「なのはの報告通り二人救助者確認。さあ避難しますよ！」

そう言っつて俺達に寄っってくる。

けど思う。こんな女の子に二人も一緒に連れだせるのかと。とりあえずここはギンガに先に行ってもらうか。

翔護 「あの、すいませんとりあえずこの子だけでも先にお願いできませんか？」

フェイト 「かまいませんが、貴方はどうするんですか？」

フェイトが尋ねてくるが、

ここから抜け出すことなんて朝飯前だ。

翔護 「俺は自力で抜け出せるから大丈夫だ。」

フェイト 「魔導士の方なんですか？」

魔導士？なんだそれは。

ここではそんな呼び方なのか俺たちは。

翔護 「まあ一応そんなもんだ。だから、先に行ってくれここもそろそろ危ないからな。」

俺はそう言っつてフェイト達を急がせた。

フェイト 「わかりました。では外で待っています。」

そう言っつてフェイトはギンガといっしょに出ていた。

翔護 「さあて、俺もここからでるか。」

俺は目の前にある扉のドアノブを握った。

俺の予想が正しければここは限りなく外に近い。  
この扉の向こうはたぶん空港の外だろう。

俺はそう思い扉を開けて外にでたと思った。

そう、出たと思ったのである。しかし自信を持って開けた扉の向こうは

翔護 「さあて、さっきの人をさがす……か……つて、えええええ!!!!!!」

外だと思って開けた扉の先は、さっきまでの炎とは違い、東京の大都市以上に発達したような街並みだった。そして俺は知らない雑貨屋の扉から出てきた。

翔護 「え！なんでこんなことに、……あ！思いだした、ボスから確か次元転移の力をもらったっけ。」

何というか、初めて使ったから自分でも制御ができなかった。どうしようか、あの空港にいる管理局の人を待たせてしまっているが、

翔護 「仕方ないか。これも不可抗力だ。」

とりあえず今日の宿を探すことにした。

＼  
J  
H  
Y  
T  
s  
i  
d  
e  
／

＼  
翔  
護  
s  
i  
d  
e  
o  
u  
t  
／

さっき私はなのはに言われて空港の中の救出作業の手伝いをしていました。

たしかなのはの報告だとさっき男の人に会って、中にまだいるはずだから救助して  
て言われたっけ。

あと、さっき救助された女の子のお姉ちゃんか。

確かに空港の中を調べると二人の人の反応があった。  
それも、ここの突き当りを右に曲がったところだ。

フエイト 「急がないと!!!」

私は急いで現場に向かった。

フエイト 「時空管理局のフエイト・T・ハラオウンです!大丈夫  
ですか!?!」

私の目の前には身長が大きくて背中に白いアタッシューケースにシン  
ブルな黒い十字架  
の様な黒い線が描かれたものを背負っている白いロングコートの男  
性と

要救助者の中にあつた女の子がいた。

フエイト 「なのはの報告通り二人救助者確認。さあ避難しますよ！」

そう言っただけで私は近寄ったけど、いけない私は一人だけど向こうは二人いるって、勝手に助けたのが少し難しい。私が悩んでいると、男の人が

翔護 「あの、すいませんとりあえずこの子だけでも先にお願いできませんか？」

と聞いてきた。

とても丁寧をお願いしてくる彼に私は少しドキッとした。

そして正直ありがたい。私は頷いたがやはりこの人も心配だ。

フエイト 「かまいませんが、貴方はどうするんですか？」

心配になって尋ねてしまった。なんとも自分が情けない。

翔護 「俺は自力で抜け出せるから大丈夫です。」

自力でいける？ってことは魔導士かな？  
私は疑問に思っただけ聞いてみた。

フェイト 「魔導士の方なんですか？」

翔護 「まあ一応そんなものです。だから、先に行ってください。  
こちらも  
危ないですから。」

一応？私は疑問をぶつけようと思ったけど、  
彼の言った通りこれも危ない。  
私は女の子を連れて出る準備をした。

フェイト 「わかりました。では外で待ってます。」

私は女の子と一緒に外に出た。

（30分後）

遅い！！いくら待ってもあの人は出てこない。

フェイト 「なにしてるんだろ・・・まさか！まだ中にいるとか！？」

気になって中を調べてもらったが、生体反応がない。  
そして、さっき転移反応があったらしい。

フェイト 「まさか。。転移して消えたのかな？」

そうとしか思えない。

転移先を調べようとしたが、なぜか調べることができない。  
何でも、反応が無いとか。

そんな高度な転移が使えるなんてあの何者・・・

私の中でまた新たな疑問ができた。

＼フェイトside out＼

くおまけく

ギンガ 「それにしても、あの人がっこよかつたな／＼」

自分を助けてくれた恩人にちょっとした淡い気持ちを抱く少女。

フェイト 「あの人、結構良かったかも／＼」

空港で別れた男性を思い出し少し頬を染める執務官

はたしてこの勝負の行方は？

第3話 どころいびつくり大移動(後書き)

今回はできるだけ長く描いてみました。

うまくできてるかな？

**第4話 自分を証明するもの(前書き)**

更新遅れました。

バイトとレポートきつい……………

## 第4話 自分を証明するもの

〔翔護 side〕

翔護 「まいったなあ……」

俺は今猛烈に困っていた。

それはなぜかと言っと……

翔護 「戸籍が無いんじゃこの億相当の宝石も売れやしないじゃないか。」

そう、俺は今自分を証明する戸籍が無いのだ。

なので、ボスからもらった宝石も売りさばけない。

それに

翔護 「おまけにここ日本じゃないし。どこだあ？」

まず図書館に行つて調べたがどうやらミッドチルダという場所のクラナガンに俺はいるらしい。

科学技術が非常に発達しているところだ。

翔護 「仕方ない、どこの世界でも裏側の奴らはあるだろう。とりあえずそいつら見つけて偽造証明作るか。」

まあ迷つていても仕方が無いので、俺は適当に裏側に潜入した。

（6時間後）

翔護 「よし、これで宝石に関しては売りさばけるな。」

俺はまず明らかに怪しそうな裏側の集団に行き

てきとーにぼっこ凹にしたら、

「たのむ！あんたのほしいものをやるから許してくれ！..」

と泣きつかれたので偽造証明を作ってもらった。

これがまた決行出来がよくて、正式なものを作りに行くまではこれを代用することにした。

翔護 「さて、これで金の心配はないようなもんだし、次は家だな。

」

うーん、と言ってもクラナガンにいい場所あるかな？

。周りは結構いいかんじの家ばっかがあるし、土地もあるかどうか。。。

とりあえず俺は近くにあった物件屋に相談してみた。

翔護 「ここらへんで買い手がなくて、土地も広い場所ってありますか？」

職員 「そうですね、お客様の要望の場所はたぶんないと……あ、一件だけありますが、これはあまりお勧めできませんが、どうなされますか？」

あまりお勧めできないとは？疑問に思いながらもとりあえず

職員が勧めてきた物件に案内してもらおうことにしよう。

翔護 「それをお願いします。」

なにぶん、住むところは早めに見つけたい。

職員 「それではご案内いたします。」

と言って、俺と職員は一緒にあるきだした。

（10分後）

職員 「こちらになりますね。」

そういつて、見えたのがもう廃墟と言っても過言ではない廃れた二階建ての洋館風の家だった。

翔護 「…………好きな人は好きな家ですね…………」

正直言葉が出たことに驚きだ。

確かに俺の言った通り、家は広い。中を少し見たが部屋数はざっとリビングを合わせて

8部屋はあったし、車庫もありおまけに庭は芝生だ。

けれども、屋根がところどころ吹き飛んでおり、壁は崩れていて、柱が丸見えだ。まあそれでも柱が腐っていなかったのはすごい。

職員 「で？どうなされますか…………？」

半分こりやえらぶわけないだろうといった様な視線で俺を見てくる職員。

だけれども、俺はその回答にたどりついた。

翔護 「ええ、もちろん買わせていただきます。現金でいいですか？」

そういつて俺はここに来るまでに宝石を売りさばいて置いた金を見せた。

ボスは何億にかはなると言っていたが、正確には十億にまで言った。

正直ボスが怖くなった。

職員 「っえ！??? 本当ですか！？買ってくれるんですか！！ぁりがとうございます！！！」

職員はずっと売れなかったこの物件を買ってくれた俺を勇者を見るかの様な視線でみてきた。

なんだ？俺ってそんなすごいことをしたのか？

翔護 「そのかわり、今すぐにリフォーム業者を呼びたいのですが、良い人を知ってますか？」

この家は今すぐにもリフォームしないと住めない。  
なんとか住めるが世間さまからの目が痛い。

職員 「はあい！その点に関してはわが社が最も信頼する方たちにお任せいたします！」

お客様は私たちからしてみれば救世主様ですから！！！」

翔護 「そんなに買い手が現れなかったんですか……？」

職員 「それはもう！ここ30年はいませんでした！」

いや、そんな元気いっぱいに答えられても……  
そして、その日から俺は一週間近くのホテルに泊まった。

一週間後

俺は物件屋から連絡があり、工事が終わったとのことだった。  
そして、新たな我が家に向けていま歩いている。

翔護 「さて、そろそろ見えてくるかな？」

そして歩みを進めていくとそこには、綺麗にリフォームされ、  
屋根が付いており、壁が綺麗に治されていて、見事な2階建ての洋  
館があった。

翔護 「わあ〜！すごい綺麗だ・・・」

俺はしばらくの間我が家に見惚れていた。

外に出てみたら、芝生が綺麗になっていて寝ころんでみたりもした。

芝の良い匂いだ。森にいたい。

庭の広さも広いから、まさに理想的。

翔護 「よし、ひとまず中の方を確認するか。」

俺は中に入って部屋を見て回った。

新築のような匂いがする。

自分の家っていいなあ〜と浸っているとあることに気づく。

翔護 「なんか部屋が心なしか増えている気が・・・この家は全部で8部屋のはず」

おかしい勘が働いて、俺は即座に洋館に似合わぬ一室だけある和風の部屋の掛け軸の裏をめくった。

そしてそこにはいつの間にか地下に続く階段があり

階段を下りたところに9部屋目が？そしてなぜその部屋が

翔護 「なんで道場になってるんだ?????」

はてさて、どうしてだ？

道場の中には畳やら、剣道場まであり設備がなぜか知らないが充実している。

頭の中が混乱してきた時にふと

壁に張り紙があることに気がついた。はてはてなんと？

「（この家を買ってくれたあんちゃん、感謝するぜ！こいつは結構長い間愛された

家なんだが買い手がつかなくて廃れちゃってよ、大工の間じゃ誰にも相手にされなかったんだよ。

俺も正直この家は薄気味悪くて修理が嫌だった。

でもな、社長にたのまれて、この家を治しているうちにこの家を支えている柱の

凄さを知ったのさ。

だから、あんちゃん、これは俺達大工からのささやかなプレゼントだ。

男なら鍛えろ！………by大工の若頭」

翔護 「……………」

なにも、道場じゃなくても・・・  
まあ体の鍛錬ができるからいいか。

翔護 「はあ、それにしても眠いな。少し早いけど寝るかな。」

そして俺はその日、初めて我が家で寝た。

）翔護 side out（

くなのはside

なのは 「うん、あの人は一体なんだっただろう?」

私はこの前の火災の時に現れた十字架の人(背中のケースから)のことを考えていました。

なのは 「無事だといんだけど・・・」

あの人が確かに助かったといった連絡が今のところ来ていないので

私は不安でした。

あの時に転移の反応があっただけで、確証がないのです。

なのは 「大丈夫かな・・・ううん、きっと大丈夫だよ、だってあの人の

良く分からないけど、強そうだったし。」

私はなんとなくですがあの時の十字架の人が助かっている気がしました。

本当に自分でもよくわからないくらい。

なのは 「できればもう一度会いたいな・・・。」

あの人のおかげで少女は無事に救出できたから、ぜひお礼が言いたい。

そんなことを思う私なのでした。

く  
翔護  
side  
く

く  
なのは  
side  
out  
く

翔護 「あゝ良く寝た！」

気が付いたらもう夜の9時であった。

これからご飯を作って眠るには良い時間かもしれない。

翔護 「ご飯を作るかな？と、その前に、この世界であいつらは召喚できるかな？」

そう、俺達神の力を使うものには守護獣という召喚獣がいる。前の世界では出てきたが、この世界で姿を現すか心配だ。俺はまず、長年連れ添った相棒を呼ぶことにした。

翔護 「我が身を護りし神聖なる者たちよ、契約者の名のもとにここに姿を現したまえ。  
出でよ、フェンリル！！！」

瞬間、部屋が光に満ちた。

そして、そこには一匹の全身真っ黒くて目が蒼いちっちゃな子犬がいた。

フェンリル 「わん！わおくん！」

フェンリルは嬉しそうに俺の頭の上に乗った。  
ここがあいつの指定席みたいなものだ。

翔護 「久しぶりだなフェンリル」

俺はフェンリルの頭のなでた。  
とても気持ちよさそうだ。

翔護 「召喚については問題なさそうだな。」

フェンリル 「わん！」

そして、俺はフェンリルと一緒にリビングに向かった。

翔護 「それにしても、本当に何も無いな。」

まあ新築の家に家具があるわけでもない。  
明日買いに行かなければ。

翔護 「そうだ！この際だし口座でも作ってしまつか。」

今俺の部屋には大量の札束がある。

正直言つて緊張してしまふような量だ。四六時中あるのも嫌なので銀行に預けよう。

翔護 「よし、フェンリル明日はお出かけするぞ。家具やらなんやら買わないとな。」

聞いた途端頭の上でフェンリルが喜んでいる。

守護獣だけあつて知能が高いから人間の言葉も理解できる。

フェンリル 「わん！わん！」

翔護 「そうと決まればご飯を作つて寝るか。」

俺は簡単なものを作つてその日は眠つた。

寝るときにフェンリルが布団に入ってきたので、わしゃわしゃ撫でてから寝た。

（  
翔  
護  
S  
i  
d  
e  
O  
u  
t  
）

**第4話 自分を証明するもの（後書き）**

感想まっています

## 第5話 いろんな人の日常

くクロノ side

あの空港火災から2カ月が過ぎた。

被害が大きかったが、幸い死者が出ることはなかった。

僕もあの時は仕事に追われていて役に立てなかったが、本当に誰も死ななくて良かった  
と思っっている。

クロノ 「母さん、エイミィ行こう。」

僕は今、ほんつつつとうに久々の休暇でミッドにいる。

ああなんて素晴らしいんだ。普段はオーバーワークが毎日だから  
気分がいい。

リンディ 「わかったわ。行きましょエイミィ」

エイミィ 「はい、次は何買おうかな」

クロノ 「まだ買うのか・・・お金がないぞ。少し銀行に行って引き出してくるか。」

僕たちは久々のショッピングを楽しんでいた。

でも、お金を引き出すために銀行に行った時から違った。

〓 銀行 〓

そして、銀行についた僕はお金をおろそうとした。  
その時

A 「おおら！手え上げろてめえら！この手にあるものがわかるか！？」

いきなり扉が開きそこから3人の男がはいつてきた。  
手に持っているものは・・・まさか！

クロノ 「質量兵器！」

B 「へへ！兄ちゃん察しがいいなあ！だったら分かってんだろ？  
これには非殺傷設定  
なんてもんはついてねえぜ！大人しく金をよこせ！」

C 「大人しくしてればなんもしねえよ！」

クソツ！なんてこった！よりもよって今日はデバイスを持ち合わせ  
せていなかった。

成すすべなく僕は大人しくエイミー達のところに行った。

A 「さあて、ここは銀行だしやっぱ金だよな？ぎゃはははは！」

胸のところガムカムカする。こんな奴らは今すぐに捕まえない。

僕一人だったらやっているが、ここにはエイミーや母さん、それに  
一般人もいる。

下手なことをすれば犯人がなにかするかもしれない。

考えていると、外が騒がしくなった。窓ガラスから見ると管理局員  
がここを包囲して  
いた。

クロノ 「管理局か！お前達、無駄な抵抗はやめろ！今ならまだ弁護の機会があるぞ。」

犯人たちもあせりだした。

それもそうだった。3人でここから逃げれるわけがない。

僕はそう思って勝った気でいた。

けれどもそれがいけなかった。

A 「このやろう！俺達がこんなんで諦めると思ったか！？おい、人質だあ！」

僕は後悔した。この手の行動は基本じゃないか！

自分の浅はかさに舌打ちした。

B 「おい！その女こっち来い！」

なんと、エイミーがつれて行かれようとしている。

クロノ 「彼女をはなせ！！僕を人質にすればいいだろ！」

僕は必死になって掴みかかる。が、

C 「うるせえんだよ！すっこんでろ！」

後ろから背中に体当たりを喰らいその場から押し倒される。

エイミー 「クロノ！！！」

エイミーが心配そうに見てくる。クソ、なんでこんな事に……

悔しさで歯を食いしばっていると突如扉が開いた。

管理局か？と思ったが、違った。

翔護 「んんん 今日はず 預金をしましょう 余ったお  
金は」

預金しましょう」

といった変な鼻歌をうたった男がはいつてきた。

そして、そのまま預金をして、去っていかうとする。

てか、よく強盗団はだまって預金させたな・・・

A 「まちな、お前どうやって入ってきた？入口には監視がいたはずだが？」

ここで犯人がもつともな質問をした。

翔護 「監視？そんなものいなかったけどな。それより、お前らなんで”チャカ”なんて物騒なもの持ってんだ？確か管理世界は質量兵器なるものを禁止してるはずだぞ」

チャカ？確か97管理外世界の確か怖い人たちの言葉じゃなかったっけか？

B 「はあ〜？」　「チャカ」？何言ってるんだこいつ？」

翔護 「それはお前たちのような、ど三流が持っていていいものじゃないぞ。

どうせカチコミをやったことねえんだろ！？」

あからさまに男が3人を挑発する。  
つてかカチコミって……

C 「てめえ、調子に乗ってんじゃねえぞ！　バアン！」

一人の男が発砲するが侵入してきた男はこれを綺麗に避ける。

翔護 「だから言ったる三流だって。そして、音がうるさいんだよ！  
サイレンサーでもつけて来いタコ！」

ドカア！

そう言つて襲いかかつてきた男を蹴りで気絶させた。

B 「！！！！、この野郎！その頭に風穴でも開けてろ！」

二人めが頭めがけて発砲しようとするが、それをする前に

翔護 「っふ！うるせえって言つてんだろ！寝てる！」

と言つて男の腹めがけて強烈な拳を叩きこんだ。  
犯人は泡を吹いて気絶した。

A 「そこまでだ！この女がどうなつてもいいのか！？」

最後の一人がエイミィを盾にしていた。  
そして、頭に銃を突きつけられている。

翔護 「はあく本当に三流いや、五流くらいか。そんなことでゴビ

つてちや

俺とつくの昔に死んでるから。まあでも用心に越したことはないか。

「

そういうと男は服の胸ポケットらしきところから、綺麗なエメラルドグリーンの刀身の短剣を出した。  
そして、犯人に向かって歩いて行く。

一歩、二歩

A 「なんだあ！？歯向かおうつてののか！？それ以上近づいてみる！この女の頭が吹っ飛ぶぞ！」

そう言って引き金に力を込める。  
そして三歩、そこで止まった。

翔護 「これ以上近づかねえよ。よし、ちょうど1・5mだな。そんなじゃまあいくか！

【風牙一閃！！】

男が短剣を横に払うと、男の銃が真つ二つに切れた。ありえなかつた。短剣の刃は絶対に届いていなかったのに銃が切れたのだ。

翔護 「悪いなそこは俺の間合いだ。さあて、女の人に手を出したんだ。

骨の1本や2本くれるよなあ？」

彼はそういつて、犯人を蹴ったり殴ったりしてタコ殴りしている。

〈5分後〉

もう犯人の顔などは原型が危ないくらいだ。

A 「も、おゆるじてくだあざああい」

犯人はその言葉を最後に床にへたり込んだ。

翔護 「久々の運動！気分爽快！！」

犯人を痛めつけた彼はとても良い笑顔をしている。  
そして彼はそのまま、扉から出て行ってしまった。

リンディ 「クロノ！彼を追いかけて！」

たしかに、犯人をここまでやってしまったんだ、事情聴取をしないと！

僕も彼が出た後すぐに扉から出たが、そこに彼はいなかった。

クロノ 「なんでだ！いくらなんでも早すぎるぞ！」

僕は銀行に引き返しエイミと一緒にいったん管理局に行った。

彼には感謝しなければ。エイミーと今一緒に居られるのは彼のおかげかもしれない。

くクロノside outく

（翔護 side）

翔護 「今帰ったぞ〜フェンリル」

俺は今では使いこなせるようになった次空間転移で銀行から帰ってきた。

いや〜それにしてもお金を預けに行ったら珍しいものが見れたな。

質量兵器御法度のここにまさか銃が出てくるとは組合でたまあに麻薬組織

潰すけどその時以来だな

フェンリル 「わんわん！」

相変わらず頭に乗るフェンリルを乗せたままリビングに行った。

今の俺の家はあれから、家具やらテレビやらを買ったので

今は落ち着いたゆっくりできる癒しの空間になっている。

俺はひとまず買ったばかりのふかふかのソファーに座った。

翔護 「はあく落ち着く。もう必要なものも揃ったし後は働き口だな。

「様教員免許は取ってみたけど、なんの先生をやるうか……」

前は一樣小中高とやったことがあるので考えてみる。

こういう時は地球に行つてあの翠屋という喫茶店で相談してみるか。

ん？なんで翠屋を知ってるかつて？それはまだ次空間転移が制御できないうちに

行つてしまったからだよ。まあこの話は後で……んっは！俺は誰に説明していたんだ？

「ピンポーン」

変な考えごとをしていたら、誰か来たみたいだ。

はて？回覧板か？ご近所さんとは仲良くしてるし料理談義もしてるから、

苦情ではないはず。と思い扉をあける。

翔護 「はいはいどちらさまですか？」

と開けた扉の先には、

リンディ 「時空管理局です。少しお話をさせてもらってもいいかしら？」

と女の子が銀行に居た男と一緒に居た。

く翔護 side outく

くリンディ side く

私はいま、あの銀行の時に私たちを助けてくれた人の家に居る。

え？どうやって家を探したって？ちょっと個人情報保護法に引っかかることを  
しただけよ。

クロノ 「母さん、こんな方法間違っている気が・・・」

横でなんか行ってくるクロノ

リンディ 「あら、クロノ貴方は彼にお礼が言いたいんじゃないの？  
なら、早い方がいいじゃない。」

クロノ 「はあ、もう任せます・・・」

ふふ、どうやら諦めてくれたみたい。  
そして、私はインターホンを鳴らした。

「ピンポン」

中から人が近づいてくる音がする。

翔護 「はいはいどちらさまですか？」

一人の男性が出てきた。この人で間違いないわね。でもなんで子犬が頭に乗っかってるのかしら？

リンディ 「時空管理局です。少しお話をさせてもらってもいいかしら？」

翔護 「正直なんで話があるか分からないですけどねども、立ち話もなんなのでどうぞ」

リンディ 「失礼させていただきます。」  
クロノ 「失礼する。」

中に入るように勧められて入ったけど、なんとというか、落ちつく。

太陽の光も入ってきて暖かい。

と、そこに紅茶を人数分もって彼が出てきた。

翔護 「どうぞお掛けください。」

リンディ 「ありがとう。」

クロノ 「すまない。」

彼からは優しい感じがする。たぶん悪い人ではないわね。

翔護 「それで話とはなんでしょう？こころあたりが無いのですが・・・」

リンディ 「その前に自己紹介をさせてください。私はリンディ・ハラオウンです。」

クロノ 「僕はクロノ・ハラオウンだよろしく。」

そう、まずは彼の名前を聞かなければ。

翔護 「風切 翔護です。歳は22歳です。こちらこそよろしくお願ひします。」

と笑顔で言ってきた。

ちょっと待って、この笑顔少し反則だね。 これはフェイトにいいかも……

と私が考えていると、

クロノ 「実は、今日の話はお礼を言いに来たんだ。この前の銀行強盗事件、

風切さんのおかげでエイミィが怪我をせずに助かった。ありがとう」

あら、クロノにしては珍しいわねこんなに素直に感謝するなんて。よっぽどうれしかったのかしら。

翔護 「翔護がかまわないですよ。お互い歳も近そうだし俺もクロノと呼ばせてもらうから。」

クロノ 「む？そうか。翔護ありがとう。」

そう言って再度お礼をするクロノ

翔護 「と言っても俺もあの時はただお金を預けにいったただけだしなあ。

あの犯人たちも雑魚だったから楽だったわけだし。」

良く言うわねあの状況であんな態度がとれるのは場馴れしている人だけよ。

たぶんこの翔護君そうとう場数踏んでるわね。

リンディ 「私からもありがとうございます。貴方のおかげで大切な家族が

失われずに済みました。」

さて、ここらで一つ聞いておかなければならない事がある。

リンディ 「あの、砂糖とできればミルクないかしら？ちょっとス

トレートは苦手だね。」

横のクロノがなんか青ざめているけど気にしない。

翔護 「そうですか。すぐに持ってきます。」

そして、翔護君が持ってきた砂糖とミルクを紅茶に入れる。

最初のうちは翔護君も笑っていたけど、だんだん顔がクロノ見たく青ざめて行った。

リンディ 「どうしたのかしら？おいしいわよ？よかったら翔護君も飲む？」

私が勧めると全力で

翔護 「いいです。無理です。耐えられません。遠慮します。」

となんかすごい勢いで断られた。  
なんか話がずれたけど聞かなくては。

リンデイ 「それで、翔護君失礼ながら貴方について調べさせてもらったの。

貴方何者？どこから来たの？」

場の空気が変わった。

それはもうすごく重苦しいほどに。

フェンリル 「うづうづう！わん！わん！」

頭の上に居る子犬が威嚇してくる。これは完璧に警戒されているわね。

翔護 「フェンリルやめるんだ。……わかりました質問にお答えしましょう。

その代わりこのお話は他言無用でお願いできますか？。」

リンディ 「それは何か理由でもあるのかしら？」

彼は無言のままだがそれは肯定を意味する

リンディ 「分かったわ。このことはこの場にいる者だけの事とします。」

翔護 「ありがとうございます。・・・それではお話いたします。まず、率直に言いますと

このミッドチルダという世界の出身ではありません。」

やはりそうか。予想していた通り次元漂流者らしいわね。名前に地球の日本かしら？

リンディ 「あなたの出身はもしかして地球の日本かしら？」

私は聞いてみた。

しかし、答えは予想のはるか右上を通過した。

翔護 「ええ、確かに地球の日本ですよ。ですが、貴方がたの言っている日本では

ありません。並行世界つと言えればいいでしょうか？無限に存在する

IFの世界から  
私は来ました。」

え？彼は今何と言った？IFの世界？

クロノ 「並行世界！？君はそこから来たと言うのか？馬鹿にするな！そんなもの存在するはずがないだろ！！」

クロノが吠える。

確かに私も思う。そんなことがあるのかと、でも目の前の青年は嘘をついている様には見えない。

リンディ 「クロノやめなさい、彼はたぶん嘘は言っていない。そうでしょ？」

翔護 「信じていただけありがとうございます。それでも僕自身も結構シヨックがありましたね。

調べていて自分の居た町がこの日本には存在しない。自分の所属する場所が

ない。みんなで遊んだ公園がない。知った時は悲しかった。

その人達に会えないとなると結構つらかったんですよ……」

彼はなんて悲しいことだろう。

確かに自分を知っている人がいないし、帰るべきところもないのだと絶望の二文字ね。クロノも気付いたみたいで

クロノ 「！！！！つすまない！君のことも考えずに軽はずみな発言を・・・」

どうぞやら反省しているみたい。

翔護 「気にするなクロノ。みんなそんな反応するだろうし。それに自分の中ではもう割り切っている。」

なんだか彼すごいわね。

今の彼を見ると本当にもう割り切れているみたい。

彼を心配して子犬・・・確かフェンリル？だったかしらが彼の頬をなめている。

翔護 「心配してくれてありがとな。」

フェンリルを撫でている姿は癒される。

この子を狙う子はたくさんいる気がするわ・・・

リンディ 「辛い事を聞いてごめんなさいね。貴方の事はわかりました。

それで、ものはいいようなんだけど、翔護君、貴方管理局に入らない？」

横でクロノが惚けているがきにしない。

私は彼を管理局に招待した。

～リンディ side out～

## 第6話 神がやってきた。

（翔護 side）

俺の家にはいまリンディさんと、クロノがいる。

リンディ 「辛いことを聞いてごめんなさいね。貴方の事はわかりました。

・・・それで、ものはいいようなんだけど、翔護君、貴方管理局にはいない？」

あれ？なんでこんな感じになったんだ？  
リンディさんの横でクロノも惚けてるし。

翔護 「失礼ですが正気ですか？俺をなぜに誘うんですか、他にもいっぱいいるでしょう」

なんで俺なんだ？第一に俺は魔力がない。それどころかリンカーコアすらないのに。

リンデイ 「あら、それは貴方が強いからよ。それにこの意見には三提督も了承済みよ。」

むしろ翔護君には三提督直属の部下になってほしいの。」

三提督？ああこの世界を調べているときに聞いたことがあるな。管理局でのほぼ最高権力だっけ？確か伝説とも言われているしでもなんでそんなお偉いさんが俺なんかを・・・

翔護 「はつきり言います。俺にはリンカーコアがありません。故に魔法は使えませんよ？」

これは忠告だ。ここまで言って誘うとなると何か向こうは知っていることになる。

クロノ 「なんだと?!じゃあ、あの時の銃を切ったのはどういうトリックだ?」

あ、やばい忘れてた。思いきりあの時は神力使ってたな。

これじゃ自分から違う力はあると言ったようなものだ。

まあでもこの人たち一応信用できそうだし言っても平気かな?

翔護 「あの時の技は神力を使った技だよ。そうだ俺についても一度改めて伝えておくよ。」

そして俺はリンディさんとクロノに自身を紹介した。

翔護 「改めまして風切 翔護です。年齢は22歳、前の世界では神童組合という組織に所属。

それ以前は学校の先生をやってました。一応人間だけど人間ではありません。

人間に一番近い神とでも言っておきましょうか。

一応風の神なる者をやらせていただいております。」

リンディさんとクロノがぼかんとしている。

リンディ 「そつ、それじゃ、貴方は神様だと？」

翔護 「風の神ですけどね。」

まあ当然の質問だろ。いきなり目の前に自称神様が現れたのだから。

クロノ 「神だと?!翔護、君はふざけているのか!?そんなものい「ならば力を見せてやる」

・・・何だと!?!」

クロノが食ってかかってきたので、力を見せてやることにした。

翔護 「俺は神様でも風使いでな。いまこの密閉された空間に手の平サイズの竜巻が起きたら、どうする？」

クロノがあやしそうに

クロノ 「できるのか？そんなことが？」

翔護 「俺は神様だよ？できるんだよ。ツふ！」

俺は手を握って力を込めてから開いた。すると、掌の上で綺麗に渦を巻いた竜巻ができた。

翔護 「これでどうかな？信じてもらえた？」

二人に聞くと、

リンディ 「すごいわね・・・確かに貴方からは魔力が感じられな

いし

まさか生きて神様に会えるとは……」

と感想を述べられたり、

クロノ 「認めざるをえないな……そういえば一つ質問させてくれ。」

と質問が来た。

翔護 「なんだ？まさか、この力を他の人が使えるかどうか？」

クロノ 「それもあるが、銀行の時どうやって犯人の銃を切ったんだ？」

翔護 「ああ、あれか。あれは俺の神器に風を纏わせて見えない刃を作ったんだ。」

むしろあれは風の短剣じゃなけりや使えない。

ちなみにこの風の刃はキレ味が非常によくてそこらへんの鉄ならスパツ！と行けちゃう

クロノ 「そんなこともできるのか!？」

翔護 「ああ。あと、この力は俺以外には使えない。無理に奪おうとするのなら、

その時は容赦なく潰すから覚悟しろ。」

と俺は少し眼を細めて殺気を放って言った。  
上でフェンリルも威嚇している。

クロノ 「ああ分かった。そんなことはしない。」  
リンディ 「ええ、安心して。」

二人がすこし強張っているが信用しよう。

翔護 「良かった。貴方達は信用できそうだ。」

ここで、俺とフェンリルは警戒を解いた。

リンディ 「ふう、冷や汗が出たわ。」

見るとリンディさんが額の汗を拭いている。

クロノ 「それで翔護もう一つ質問なんだが、神器とはなんだ？」

と新たな質問が来た。

内心クロノ質問好きだな〜とちよっと思ってしまう。

翔護 「神器は神にしか扱えない武具だよ。俺の場合はこの短剣とお前の後ろに置いてあるケースの中の大鎌だ。」

と短剣をテーブルに置いて、花鳥風月を指さす。

リンディ 「その短剣すごく綺麗ね・・・宝石みたい。」

リンディさんが宝石を見るみたいに短剣を見ている。

クロノ 「翔護、すまないがそれは質量兵器としての扱いになるが・・・」

クロノが見てくるが、俺にはそれに引っかからない秘策がある。

翔護 「管理局がそういうと思ってな、実はこれを俺はデバイスとして登録しているから問題ないんだよ」

そう、俺は神器をいろいろなコネを使ってデバイスとして正式に登録している。

どんなコネかって？それは企業秘密

リンディ 「いったいどうしたらそんなことできるのかしら・・・」

若干リンディさんに引かれたが気にしない。

翔護 「俺の説明はこれでいいですか？僕もさっきの話に答えたいのですが。」

さて、本題に戻らねば。まあ俺の中ではもう答えは出ているけど。

リンディ 「ええ。話を逸れらしてしまってごめんなさい。」

翔護 「先ほどの事についてお答えします。いいでしょう。その申し出受け入れて

管理局に入りましょう。」

実際なにをやるのか悩んでいたからちょうどいい勧誘だったな。ちょうど目の前に良い就職口があるのだからそれを捨てるはずもないし。

リンディ・クロノ 「本当に(か)!!!」

二人とも良い意味で驚いている。  
まあそうか。なんて言っただって神様が組織に入るんだから。

翔護 「ええ、神に誓って約束しましょう。」

リンディ 「ありがとう。それでは風切 翔護くん、貴方には三提督直属の局員になっていただきます。なお、階級については後日伝えます。」

クロノ 「正直あつてまだ短いが君とは仲良くやれそうだよ。」

翔護 「お互いこれからよろしくお願いします。」

この日から俺は管理局に入った。

〱一週間後〱

管理局入局の手続きが終わり俺は三提督直属兼リンディさんの部下になった。

そして、階級がなんと

翔護 「俺が小将ですか!？」

そう。俺は入局していきなり小将になったのだ。

なんでも理由は、神様をそんな低い階級にいさせられないとか、

あと、低すぎるとなぜそんな奴が三提督の部下なのかと怪しまれるからだそうだ。

俺的には最初からこの階級のほづが怪しまれると思っけど・・・  
そんな事を考え込んでいると、

リンディ 「翔護君、今から三提督に会いに行くわよ」

なんともお気楽なリンディさんに呼ばれ俺は三提督のもとへ向かった。

＝会議室＝

リンディ 「失礼します、リンディ・ハラオウンです！」

翔護 「風切 翔護です！」

俺とリンディさんは敬礼してあいさつした。

ラルゴ 「待っていたよ。君が翔護君かい？」

まさか元帥自ら挨拶してくれるとは・・・なんか畏れ多いな。

翔護 「はい、今日からよろしくお願いします！」

ミゼット 「まあそんな固くならないで、これから一緒に頑張っていくんだから。」

レオーネ 「私たちの部下といっても殆どリンディの部下と変わらんからね。」

三人ともとても優しそうだな。この人たちとなら俺も頑張っていける気がする。

翔護 「はい。これからもどうぞよろしくお願いします！！」

ラ・ミ・レ 「」「」「ちーんそよろしく！」「」「」

俺は3人と固い握手をした。  
俺の新しい場所。よし・・・これからがんばるぞ！

リンデイ 「翔護君、この方たちにはもう貴方の事は話してあるし、決して周りには  
言わないように約束してあるから大丈夫よ。」

ラルゴ 「はっはっは！まさか神様が実在するとは思わなかったわ  
！」

後ろで二人も頷いている。

本当に根回しがいいこの人は。

リンデイ 「それじゃ、翔護君早速だけど、三提督たちも言ったよ  
うに殆ど私の部下扱い  
だから、仕事手伝ってね。」

翔護 「はあ・・・わかりました。がんばりましょ！」

そして、俺の管理局での仕事が始まった。

）  
翔  
護  
S  
i  
d  
e  
O  
u  
t  
）

第7話 始まった部隊（前書き）

連続更新はさすがに堪えるぜ・・・

## 第7話 始まった部隊

あの空港火災からはや4年の月日が流れた。

今、あの時火災現場で救助活動をしていた少女たちはたくましい女性になり、

幼かった女の子は強く明るい少女になった。

そして、今3人の女性により新たな物語が始まる。

くはやてsideく

やっと、やっとの思いでついに作ることができた。

今までの管理局ではできない事をする

私たちの部隊。

はやて 「いや〜長かったわ〜、これが、うちの夢の部隊・・・機動六課や！」

なのは 「すごいよはやてちゃん！私と同じ年なのに部隊をつくるなんて！」

フエイト 「そうだよはやて、なんか年上の人みたいだよ」

二人がうれしそうに褒めてくれる。

ああ〜今まで頑張ってきてよかったわ〜

リン 「はやてちゃんすごいです！さすがです〜！」

リン見てるとほんとう和むわ〜ああ癒される。

さて、私も思い引き締めて！

はやて 「それじゃ、機動六課での仕事を始めますか！」

な・フエ 「うん！」

リン 「はいです！」

あれ、氣い締めたのはええけど、なんか忘れてる気が……

今日だれか来るような……

まあええか。後で思い出すやろ。

くはやてside outく

（翔護 side）

今から二時間前。

管理局地上本部リンディの部屋にて。

翔護 「はあい？俺に辞令ですか？」

俺は今朝リンディさんに呼び出されていた。  
話があるというので来てみればいきなりの辞令。どういふことなの・

・・・

リンディ 「そう！この前翔護君にも後見人になってもらった部隊があったでしょ？」

そこに行ってもらおうの。」

確かにこの前リンディさんが少しでも後見人は多いほうが良いと言ったので、

俺はたしか機動六課？の後見人の一人になった。

なんでもたまたま地上に研修に来るはやてが作った新設部隊だったっけか。

翔護 「はあ。でも、俺ってリンディさんの部下でもあって三提督の部下ですから周りにから変な感じで見られるのでは？」

・・・

リンディ 「あれ？言ってなかったかしら？翔護君表向きは私の部下で、極秘で三提督

の部下なのよ？」

この人は・・・なんでそんな重要な事をいままで言わなかったんだ？

最初は確か三提督の部下が本来の理由みたいな事言ってたのに・・・  
・  
4年も知らなかった俺っていったい・・・

翔護 「言っていないです！リンディさんはいつも必要な事言わないんですよ！」

若干キレ気味で言う。

さすがのリンディさんも少し申し訳なさそうだ。

リンディ 「ごめんなさいね。それでなんだけど、辞令どつする？」

つく！この人はうまく話をそらして・・・抜け目のない人だ。

翔護 「・・・はあ。良いでしょう。行きますよ。風切 翔護  
少将その任を受けま  
しょう。」

まあリンディさん達には恩もあることだし、ちよつどいいか。

リンディ 「それでなんだけど・・・出向時間が2時間後って言うたら怒るかな・・・

・・・???

ふえ？・・・二時間？そんな少ない時間で仕事引き継ぎをしろと？

あきまへん。あきまへんよそんなの。

いかんいかん変な関西弁が出てしまった。

普通に無理だと思っんですけど・・・

翔護 「あの、リンディさん？後二時間で仕事を引き継いだり片付けると？」

俺は若干苦笑いで聞いた。今思えば聞かなければよかった。

リンディ 「いめんさいねー そういつことになりそう」

ああこの人はきつと心のどこかで楽しんでいるに違いない。

神様がこんな扱いを受けていいのでしょうか？

「あなた一様人間でしょ」っていう正論な突っ込みは要りません。

リンディ 「それじゃ頑張ってねー」

お気楽に部屋をリンディさんは出て行った。

翔護 「……………う……………う……………うぎゃあああああああ  
ああああ……………」

こ、この人はなんて人だ！！

部下を何だと思っていんだ！ まるで便所のネズミのように扱って！

と考えていたら、俺のポケットで寝ていたもう一人の相棒が目をさ

ました。

アギト 「う……ん……うん？兄貴どうしたんだ？」

この赤い小さな女の子はアギト。管理局の不正研究所で実験体だったところを

俺が連れ出してきた。もちろん研究所は粉々にぶっ潰してきた。

魔力がない俺の魔法サポートをもらっている。

翔護 「ごめんねアギト起しちゃって。それと、起きてさっそくだけど

後2時間したらお引っ越しだよ。」

アギト 「引っ越し？どこにいくんだ？」

翔護 「機動六課って所だよ。なんでも管理局の最強部隊なんだって。」

アギト 「へえ、まああたしは兄貴のためならどこだって行くけどね！なんてったって  
兄貴はあたしのロードなんだから！」

アギトは魔力を持たない俺でもロードと言ってくれる。

こんな役立たずな俺でもロードか・・・

俺は幸せ者だな。

翔護 「ありがとなアギト」

俺はアギトの頭をなでた。

アギト 「ん・・・ふう／＼／／／」

気持ち良さそうに目を細めている。  
なんか若干顔が紅い気がするけど、大丈夫か？

翔護 「よし！さてまずはこの書類の山を片付けるか！」

そして、俺は書類を片付けた。

ちなみにすべての準備が終わったのは1時間50分後・・・

〈翔護 side out〉

side

リン 「ふふん ン？ なんですかこれ？」

リンはデータを整理している時に見つけた物を見ていた。  
日付が書いてあり、どうやら今日誰かくるらしい。

リン 「はやてちゃん、今日誰か来るですか？」

リンは自分の主である八神はやてに聞いた。すると、はやては何かを思い出したように、声をあげた。

はやて 「ああ！そうやった！今日からこの六課に新しい人が来るんや！」

リイン 「誰ですかその人？」

はやて 「この六課の後見人になってくれた人や！大丈夫ですよ。ごく優しい人や。うちが地上に研修行ったときとか実の兄のように接してくれた人でおまけにイケメンやで」

リイン 「ええ！そんな人が来るんですか！？楽しみですよ」

はやて達がたのしみに待っている。

リインは特にうれしそうだ。期待で胸がいっぱいのような様子だ。

辞令には午後4時から来ると書いてあり、今は3時55分だ。

リイン 「後もうすこしですよ」

そして、約束の時間ぎりぎりに

ボタン！

翔護 「っはあはあ！遅れました！すいません！」

と行って、翔護が入ってきた。

はやて 「まだ、約束の時間になってないんで大丈夫です。」

リイン 「この人がはやてちゃんのいった人ですか？」

リインは自分の気になっている人を見れてうれしそうだ。

翔護 「そう言ってくれと助かります。」

翔護は急いで来たせいか、汗をハンカチで拭いている。

背中にはあの時の様に大きな白いアタッシュケースを背負っている。

はやて 「翔護さん、年上で階級も上なんですから敬語はいりませ  
んよ。」

はやてが微笑みながら言う。  
実際この六課で敬語を使うとかえって馬鹿にされているような気がするからだ。

翔護 「そうか？それはありがたい。さて、本日付でこの機動六課に配属になった

風切 翔護少将だ。短い間だがよろしく。あと久しぶりだなはやて」

と言って右手を差し出す翔護。

そして、それを握り返すはやて。

はやて 「よくぞ来てくださいました風切少将これからもその力をお貸しください。久しぶり  
翔護さん！」

リン 「よろしくです！」

一通りの挨拶を終えたところで

翔護 「ところで、俺はどこに配属になるんだ？」

と翔護が今後の事について相談してきた。

はやても考えている様子で

はやて 「翔護さんて確か小隊指揮権もってませんでしたか？」

翔護 「あああるぞ。いろいろと便利そうだから取った。」

はやて 「そうですね。でしたら、翔護さんには新しい隊の隊長になってもらいましょ。」

翔護 「新しい隊ってことは新設かあ。了解した。それで名前はど  
うする？」

翔護の質問にははやては頭をひねって考えた。

「(ライトニングやスターズはなのはちゃん達やし……どないしよ???)

風切……風……そうや!」

どうやら決まったらしい。

はやて 「翔護さんが受け持つ隊は”ウィング”隊です!頑張ってください!」

翔護 「ウィングか……俺らしいな。わかった全力で協力させてもらう。」

翔護は自分が使う力の名前が入った部隊に親近感がわいていた。どんな感じにしていこうかと考えていると、ポケットからアギトが出てきた。

アギト 「ん?なんだ兄貴ついたのか?」

眠そうにアギトが翔護にたずねている。

その姿を見てリインは驚いていた。

リイン 「ええ！翔護さんユニゾンデバイス持ってたんですか？！」

自身と同じユニゾンデバイスを持っている翔護を見て驚き興奮している。

そこで翔護もアギトを紹介する。

翔護 「ああ仕事先で偶然見つけて以来のパートナーだ。アギト自己紹介をして。」

アギト 「あたしは烈火の剣精アギトだ！よろしく！」

リインも嬉しそうに自己紹介をした。

リイン 「リインはリインフォース・ツヴァイ空曹長です！よろしくですアギトちゃん」

二人のやり取りを翔護とはやては実に「微笑ましいな・・・」と眺めていた。

暖かい目で二人が見ていると、部隊長室の扉が開いた。

なのは 「失礼します、はやてちゃん？話すことって何？」

フェイト 「はやて、連絡ってどういうこと？」

機動六課が誇る管理局の悪魔と死神が現れた。

翔護 「ん？お客さ・・・ん・・・か？」

翔護は珍しい物を見るよな目で二人を見た。

フェイト・なのは 「「あ、あなたは！？」」

フェイトとなのはは忘れもしない空港の時に行方不明になった人がここにいることに

驚きを隠せないでいる。そして、思わず大声を出してしまった。

はやて 「なんや、知り合いやったんか。二人に紹介しとくわ、この度この機動六課の後見人になって下さった風切 翔護少将や。ちなみに部隊はウィング隊や。」

翔護 「あの時はどうも。そして、これからは同じ六課の仲間としてよろしくね」

と言って翔護は微笑んだ。

すると、いままで面識がこれと言ってなかった二人は顔を紅らめた。

なのは 「あう／＼／よ、よろしくお願いしまふ／＼」

フェイト 「よろしくお願いします／＼」

二人とも照れてしまい緊張している。  
なのはに至っては嚙んでしまっている。

翔護 「ん？二人とも顔が紅いけど大丈夫か？」

と心配そうに二人を屈んで見つめる翔護

はやて 「（うわぁ・・・翔護さん自覚ないんやろか？自分のせいだって・・・）」

というはやての心の中でのツッコミをいただいた翔護

フェイト・なのは 「大丈夫です！」

とは言ってもまだ紅い

しかし、緊張はほぐれたようだ。

落ち着いたフェイトが空港の時の事を聞いてきた。

フェイト 「そういえば、風切さん」翔護で良いよ・・・では翔護さん、あの時どうやっ

てあの場所から避難したんですか？」

なのは 「そうそう！私も気になってました。」

翔護 「あの時か？あれは己の体で突き進んで外に出た。」

と、冗談めいた嘘を言ってみたりしている。

フェイト 「あの厚い壁を？無茶ですよそんなの！」

なのは 「無理ですよ、私たちだって飛んで避難したのに」

まあ当然のごとく嘘だとわかってしまった。管理局でもトップクラスが苦戦したところを

自分の体一つで、ましてや魔法なしで脱出したというのだから。

扉から転移したと言ったら怪しまれそうだしどうするか。

しかし、予想外のところから助け船が来て、眼で翔護にはやてが伝えられた。

はやて 「いや、あながちうそでもあらへんのや。なんてったって

翔護さん

陸戦がSS+ランクなんやから・・・

(翔護さんの力はリンディさんから聞いてます。うまく誤魔化しときますから安心してください。)

そう、翔護は管理局に入り検査をしたところ陸戦ランクがSS+という驚異の

戦績をたたき出した。さらにリンカーコアがない＝魔法が使えないという事を知った者たちからは英雄と呼ばれたりしていて、地上本部での信頼が厚かった。

翔護は眼ではやてに礼を言う。

翔護 「そういうことだから、ちょっとばかりは陸戦できるよ。なにわともあれ  
これからもよろしくね？」

再び翔護が二人に挨拶をした。

これで駄目なら六課に居づらくなるからだ。

フェイト 「こちらこそよろしく願いします!」

なのは 「よろしくお願いしますね翔護さん」

どつちらはやてのおかげでそこまで不審には思われていなようだ。

ここではやてが何かを思い出したように言った。

はやて 「せやった！ これ言うの忘れとったわ！  
改めまして風切少将、私たちは貴方を歓迎します。」

こうして、翔護の六課での生活が始まった……

## 第7話 始まった部隊（後書き）

感想や指摘などお便りお待ちしております！

主人公及びキャラ設定？

今回は少しネタバレあり（前書き）

ちよつとだけ今後出てくるキャラのネタバレがあります。

まあ別に大丈夫でしょう

主人公及びキャラ設定？

今回は少しネタバレあり

主人公設定およびキャラ設定

名前 風切 翔護

年齢 26歳 見た目は歳より若く見える。

階級 時空管理局少将

資格 教員免許、小隊指揮権、師団体隊長権、隊長指揮権、師団隊  
実力権

陸戦 S S +

空戦 A A A + (風の神力で飛ぶことができる)

魔力 無し というかリンカーコア無し。

神力 風の神

説明

四年前から時空管理局に在籍していて、表向きはリンディの部下だ

が、  
実は伝説の三提督の極秘の隠し玉である。  
少将という階級は、時空管理局では不自由が無いようにという意味で渡された。  
また、前の世界と同じであいかわらずの鈍感で、周りからのバレン  
タインチヨコモ  
義理でいただけありがたいと思っっているほど。。。。  
一応三提督の切り札と裏では言われている。  
また、一人で師団隊と変わらずの強さで、《死に風》という二つ名もある。

名前 アギト

能力 ユニゾンデバイス、炎の魔力変換資質

#### 説明

管理局による不正研究の実験体として扱われていたときに翔護の破壊活動によって  
救い出されたユニゾンデバイス。救出当初は翔護のそばを離れようとはしなかった  
ので、その時のいきさつで今は翔護のロードとなっている。  
管理局は嫌いだが、翔護や気を許した者とは協力する。

ちなみにリンカーコアのない翔護とはユニゾンできない。  
守護獣のフェンリルとは中が良く、翔護の頭の上にフェンリルその上にアギトという  
連係プレーもたまにある。しかし、普段はフェンリルに頭を譲って、アギトはいつも翔護の胸ポケットにいる。

## 守護獣

名前 フェンリル

姿 全身まっくろで目は蒼

戦闘方法 噛み砕く、高速移動、切り裂く。

## 説明

翔護が召喚できる守護獣で、普段は小さな子犬である。自分がものすごく懐いた人間にしか頭に乗らない。いつもは翔護に甘えているかわいらしい子犬  
しかし、戦いとなれば前の姿とは想像できないほどかわり、ヴォルケンでもまともに太刀打ちできないくらい強くなる。

そして、翔護の長年の相棒である。

名前 トルム

年齢 見た目27歳くらい。 実年齢不明

姿 普段は2mくらいの身長の高身長金髪の男性。  
本当の姿は体が2倍の大きさになり、鱗や角が現れた人型の龍になる。  
(RAVEのレット)

戦闘方法 徒手空拳 神龍拳という技を使う。

#### 説明

翔護の召喚できる守護獣で、言葉遣いや礼儀正しさがある。  
普段の生活では人間の姿をしていて、おもに翔護の自宅で家事の手伝い、  
組み手の相手などの事をしている。  
また、神龍拳という流派で戦う。  
守護獣のなかでは打撃戦のトップクラスである。  
翔護の料理の師匠であるくせにトルムが作るとまずくなる。  
理由は自分なりにあれこれオリジナルのアレンジをしているせい。

名前 雅 ミヤビ

年齢 目ため17歳くらい

姿 普段は薄い茶色のロングヘアの髪型の女性。  
本当の姿は背中に白い翼をはやした天使。

戦闘方法 暴風や風の結界などの唯一守護獣のなかで近接型でない。  
おもに、翔護のフローダが、遠距離だと、守護獣最強。

#### 説明

非常に明るく活発な性格の守護獣で、人に近い。  
守護獣の中で、唯一近接戦闘がからつきできないが、それを補うために、  
補助系や遠距離からの戦闘などが優れている。また、相手に距離を縮めることができない戦闘を行う。  
また、本来の姿が天使であるのにそれにならない理由は、羽が邪魔くさいなどと言う  
なんとも残念な理由。

番外編 〽突撃リアル！隣ではないけど翠屋〽（前書き）

翔護がミッドに飛んでからの最初の方の生活です。

番外編 へ突撃リアル！隣ではないけど翠屋へ

へ士郎 sideへ

僕はいつものように桃子と翠屋の準備をしていた。  
グラスを磨いたり、品出しの準備をしたり。  
なにげない毎日の動作をしていた。

だが、今日は違った。なんて言っただって僕が久々にあそこまで  
わくわくしたのだから。

へ翠屋開店へ

桃子 「いらっしやいます」

翠屋は連日のように大盛況だった。人が出れば人が入るといふ繰り返し。

お昼時にピークを迎え僕たちは一休みしていた。

するとそこで、

バタン！

扉が勢いよく開く音がした

どうやら誰か入ってきたらしい。

士郎 「すみません、今休憩中です……て」

僕はその先から言葉が出なかった。

目の前に居る青年からは圧倒的な殺気とはちがう、

どちらかというとなりの感情が圧力のように出ていたから。

僕は裏の者かと思ひ警戒し、龍の者という可能性を考えたら。

すると、青年がなにか話始めた。

翔護 「また、・・・また勝手に・・・転移した。」

転移？なんのことだろうか？

娘のなのはが前に行っていた気がするが・・・

士郎 「失礼だけど・・・君は何ものだい？」

僕は少し殺気を叩きつけた。相手の様子を覗うために。

見れば彼の背中にはおそらく武器が入っているであろう大きな白いアタッシューケースがあった。

まずい、こちらには手元に獲物が無い。

翔護 「あ、すみません変な事を聞きますけど、ここって何処ですか？」

まず彼は質問には答えてくれなかった。

それどころか質問を質問で返してきた

士郎 「聞いているのはこちらだよ？まずはこっちの質問に答えてくれるかな」

翔護 「ああ、これは失礼しました！なにぶん俺も少しばかり混乱していました……  
ではまず自己紹介させていただきます。名前は風切 翔護です。  
です。」

それから彼は自分の年齢や背中の中のケースの事を教えてくれた。

話を聞いていてわかったことで彼は悪人ではないようだ。

とここで、話しているのに気付いた桃子が出てきた。

桃子 「あら、士郎さんその人はどちら様？」

士郎 「ああ、彼はどうやら間違えて入ってきてしまったらしくてね。」

僕が説明していると彼が事の経緯を説明してくれることになった。

彼の世界のことや、なぜここに来てしまったのか、そして特別な力の事も。

翔護 「というわけでここに気が付いたら居たわけです・・・」

なんて理不尽なんだろうか。

地下の道場に鍛錬しに行こうと扉を開けたら知らない喫茶店・・・

そりゃ混乱するか。

桃子 「そう、大変だったわね。こんな所だけどゆっくりして行って。」

士郎 「君もいろいろ大変だねえ。」

翔護 「もう、慣れました……」

それにしても彼体つきがいいな。まさに理想の戦闘者だ。これは少なくとも恭也よりは強いな。

久々に血が騒いできた。

士郎 「それより翔護君、鍛錬するために道場に行こうとしてたんだっけ？  
なら僕の家で稽古しないか？」

正直これほどの相手に戦いを挑まずにはいられない。  
体中の血が騒ぐ。

翔護 「え？でもここお店ですよ？どこかほかの場所に行くんですか？」

士郎 「ああ。実は家に道場があつてね。そこでどうだい？僕と模擬戦をしないかい？」

翔護 「模擬戦ですか……正直士郎さん強そうなのであまりやりたくは無いのが  
本音ですね……」

彼はどうかやら自分を過小評価しているようだが、

彼は強い。僕でも正直勝てるかどうかだ。いや訂正しよう。

勝てない可能性のが断然多い。

それほどまでに彼と言う存在は異様なのだ。

士郎 「鍛錬も相手がいた方がいいんじゃないかい？」

翔護 「まあそれもそうですね。ではどうかお手柔らかに・・・」

さて、今日は久々に全力が出せる。

店はまだ1戦くらいはやる時間はあるしとりあえずは閉めておこう。

こうして僕たちは翠屋から出て我が家の道場に向かった。

〈士郎 side out〉

（翔護 side）

翔護 「さてと、道場で鍛錬しますかな。ええと、神器は……  
あつた！  
よいしょっと！」

俺はいつものように神器を背負って地下に続く扉に手をかけた。  
そして押した。

結果

目の前が全然違うところに到着。

翔護 「また、・・・また勝手に・・・転移した。」

この時の俺はまだ、次元転移がうまく使いこなせていなくて、自分の意志ではなく

ランダムで勝手に違うところに転移してしまっていた。

ある時は常夏の誰もいない綺麗な海が広がった無人世界、

またある時は氷点下 - 50度の極寒世界、またある時は・・・

というように色々な事があった。

自分的にも最近ではコントロールしていたのだけれどもまさか

まだこんなことになるとは。知らぬ間に怒りが込み上げてきた。

そしてふと気がつくとな誰かに見られている気がする。

視線をたどるとそこには20〜30前半くらいの男性がいた。

士郎 「失礼だけど・・・君は何ものだい？」

それよりもまずここどこだ？もうミッドでない事は確かだし、  
どっかの喫茶店か？

翔護 「あ、すみません変な事を聞きますけど、ここって何処です  
か？」

ここで気付いた。先に質問してきたのは向こうだった。  
まずい、変な空気になってしまった。

しかしなんとか状況を打破することができて、お互いの自己紹介の  
のちに  
変な成り行きで模擬戦をする事になってしまった。

今俺の目の前には2本の木刀を構えた土郎さんがいる。

やはり思った通りそこらへんの奴らとは違う。この人は間違いなく”本物”だ。

土郎 「僕は二刀だけれども君は何を使うのかな？その背中の物かい？」

翔護 「こいつは実戦用なんで使うと人がたぶん永眠します。なので、俺にも木刀1本貸していただけますか？」

俺は一樣、一刀式、二刀式、槍術、鎌技などを心得ている。

これでも炎鬼と氷臥の師匠でもあるし。

まあ全部聖拳流を俺が独自に武器用にアレンジしたものだけなど。いわばオリジナルかな。

こうして土郎さんに木刀を貸してもらい、久々の一刀で戦うことに。何気に一刀には結構自身があったりする。

そして、桃子さんの合図で試合が始まった。

桃子 「それではよい………始め!!!」

〜翔護side out〜

〜土郎side〜

とうとう試合が始まった。

そして思う。彼のスタイルに疑問がよぎった。

僕からして見れば隙だらけだ。片腕を胸のところに持っていき

祈るようになっている。

けれども自分の中の何かがあれに攻撃してはいけないと危険信号を鳴らしている。

士郎 「驚いた・・・隙だらけに見せて実は何か隠しているね？」

そう、彼は何か隠している。普通の人ならまず間違いなく突撃しているだろうけど、

その瞬間やられると思う。

翔護 「さあ、なんの事だか？俺はいつでも良いんで来てください」

これは挑発かな？なるほど。そっちがその気ならこっちも行かせてもらおうかな。

士郎 「では……行かせてもらうよ！」

僕は神速を使って一瞬で彼の間に飛び込み小太刀をふるった。  
絶対に反応できないはず！

確実なる自信のあった一撃は入ったと思った。

ヒュン！

しかし、彼はそれを体を逸らすことで難なく避けた。

翔護 「びつくりしましたよ。いきなり間合いに入られて、正直危ないと思いました。」

それでも彼は平然としていた。まるでなにも無かったかの様に

そして今度は彼が祈りのポーズを解いて前傾姿勢になり構えている。

翔護 「では今度はこちらから……聖拳流一刀式……弧月  
閃！！」

彼の繰り出した剣が半円を描くように僕の懐めがけて入って来た。

言うならば三日月である。

僕はそれを自分の小太刀を使いなんとかその範囲から逃れた。

翔護 「なかなかやりますね・・・こっちも腕がなりますよ。」

士郎 「ははは！それはこっちもだよ！」

楽しい。実に楽しい。

普段は教える側だから久方ぶりにこんなに充実した戦いができる。自然と僕は笑っていた。

士郎 「君と戦っていると昔を思い出せるよ！」

翔護 「俺も修行に熱心だったころを思い出しますよ！」

こうして僕たちは時間が許すまで剣で語り合った。

士郎 「いや〜結局引き分けか〜」

あの後結局お互いに白熱した戦いをしたが決着はつかなかった。

途中ものすごい速さに一撃に思わず負けるかと思った時もあったが・  
・  
・  
僕も油断していたわけではないが、あの攻撃は見えなかった。

士郎 「それにしても翔護君、君は変わった流派だねえ。何流だい？」

僕は最初から気になっていた事を聞いた。

翔護 「あれは聖拳流といって、元は無手で戦うために編み出されたものを俺が独自に改良して武器でも扱えるようにしたものです。」

聖拳流か・・・聞いたことのない流派だけれども、御神流といい勝負のできる感じだ。  
しかも驚くことに元が無手とは・・・

士郎 「ということは君は無手でもいけるのかい？」

翔護 「まあ無手のが得意でもありますね。」

なんとも面白いな。そんな多種多様な流派があったとは。僕もまだまだということかな？

士郎 「今日はありがとう。君のおかげで久々に楽しむことができ  
たよ。」

翔護 「いえいえ、こちらこそおいしいケーキありがとうございま  
した。士郎さんも強かったですし、  
桃子さんの入れてくれた紅茶もおいしかったです。」

どうやらこの青年となら仲良くやっていけそうだ。

それに先ほどの模擬戦も実に楽しそうにやっていた。

気が合いそうだな。恭也の奴はどんな顔をするだろうか？

翔護 「それでは今日はこの辺で帰ります」

と言って持ってきていたケースを背負うと扉に向かう。

少し名残惜しいがまた会えるだろう。僕にはそう確信があった。

士郎 「ああ、翔護君も暇になったらいつでもおいで。楽しみに待っているから。」

桃子 「今度はもっとおいしいものを食べさせてあげるからね！」

翔護 「はい！楽しみにしてます。・・・では今日はありがとう！」「  
ざいました！」

そう言っつて彼は扉を開けて出て行った。

僕と桃子はそれを最後まで見ていた。

今日は本当にいい日だ。

そして、一つ思ったこともある。

彼ならなのは夫でもいいかな・・・

番外編 〽突撃リアル！隣ではないけど翠屋〽（後書き）

初めての番外編で、土郎さんたちを出してみました。

10,000PV達成!!!!!! (前書き)

皆様のおかげでとうとう1万いけました！

ありがとうございます！

あと今回の話は神聖なる風とはまったく関係ありません。

10,000PV達成!!!!!!

~~~~10000PVたっせい記念オリジナルストーリー~~~~

時は神話の時代にまでさかのぼる！

一人の男が生み出した伝説の暗殺拳、それを受け継ぐ一族が存在した！

だが、一族は世界の力により歴史から抹消された。

時は過ぎ現在

世界から抹消された一族は全滅したかに見えた。

だが！、彼らは死滅してはいなかった！

ごく少数の人数が生き残り、そして今現在も秘伝の暗殺拳を伝授していたのである！

その武術の名は……極殺印度拳！！！！

そしてそれを受け継ぎし者は現在とある国で大統領を務めている。

その名は……

カレーライス大統領！！

彼の繰り出す拳はなんと初代のそれをも凌駕するといわれる逸材なる天才である！

齢まだ5歳でそのすべてを受け継いだ強さはもはや神の域。

故に人々は彼をこう呼ぶ。

”ゴッドカレー” っと。

しかし、長年の隠蔽もついに世界にはばれてしまっ。

そして世界はある刺客を送った。

カレー 「！！！！っな！、お、おまえは……！！！！！！」

はたして彼は刺客に勝てるのか？そしてこの先の未来を変えることができるのか？！

この戦いを見逃すな！！

10,000PV達成!!!!!! (後書き)

すいません、頭の中にふと”カレライス大統領”というフレーズが思いついたので書いちゃいました。

反省はしてません。

お便り待ってます。

第8話 これが俺流簡単料理だ！（前書き）

物語ちゃんと進んでるかな？

## 第8話 これが俺流簡単料理だ！

（翔護 side）

六課での初日がやっと終わった。

俺は仕事がおわり、直帰で自宅にいる。

まあ六課の扉から転移して帰っただけだけど。

翔護 「はあくそれにしてもお腹がすいたな。そろそろ晩御飯にするかな」

時間は午後7時30分を迎えていた。

アギト 「賛成！あたしもお腹すいたよ」

フェン 「クウ〜ン」

どうやら皆腹ペコみたいだ。

確かに、今日は軽めの食事しか取ってないから普通か。

逆にこの時間まで良く持ったというくらいか。

翔護 「よし！じゃあ今日は張り切っておいしいものを食べさせてあげるよ」

すると、一人と一匹はうれしそうに笑顔になり、頭の上ではしゃいでいる。

アギト 「兄貴の料理はどれもおいしいから楽しみだ！」

フェン 「ワン！ワン！」

これだけ楽しみにしてるんだ。失敗するわけにはいかないぞ！

ちなみに、俺自身料理の腕には少し自信がある。

昔、ボスの知り合いの人に俺の料理を食べてもらった時は

びやああああうまい”！と大変喜んでくれたから、不味くはないはず。

さて和洋中、今日はどれにしようか……

冷蔵庫にはキャベツやレタス、ベーコンや卵他にもさまざまある。

翔護 「今日は洋食だな。よし！早速準備に取り掛かるか。」

俺はまず頭の上のフェンリルを降ろして、台所に向かった。

ちなみにこの台所も機能がよく、火力も中華料理店くらいの火力が出る。

すごく使い勝手がいい。

翔護 「まずはスープでも作るか。」

冷蔵庫にあつた鳥ガラを鍋に放り込んでだしをとる。そこにレタスと肉団子を入れて火が通ったところでとき卵を入れて火を止める。

意外と簡単にできておいしいスープだ。

翔護 「次は・・・パスタだな。」

違う鍋を取り出してその中にお湯を入れる。沸騰したら、塩を摘み程度いれ、そこに人数分のパスタを入れて茹でる。茹でている間にフライパンでソース作りをする。

翔護 「アギトはチーズとか食べれる？」

今までアギトがチーズを食べたかどうか知らない俺は

質問してみた。万が一食べれないならまだ違うソースが作れるので今のうちに聞いてみる。

アギト 「食べた事はないけど兄貴の作るものならたぶんいける！」

食べたことないのか。当然かあのマッド共に研究材料にされてたんだから。

でも、うれしい言葉を言ってくれる。

俺は嬉しくてつついアギトの頭をなでた。

顔を赤ためていたがうれしそうだ。

翔護 「うん！良い感じにソースができたな。後はパスタとからめてっと。」

そして俺は二品目のカルボナーラを完成させて、皿にもりつけた。

アギト 「わぁーおいしそう 兄貴シェフになれるよー！」

アギトから褒めていただいた。やっぱり作って褒められるってうれしいな。

翔護 「さて、さつきサラダも作った事だし、メインディッシュでも作るか。」

俺は最後に冷蔵庫からベーコンとキャベツ、トマトを取り出した。まず、まな板にベーコンをのせて、厚さ2cm位に切ってフライパンで焼く。

両面がこんがり焼けたら、お皿にうつして、そのフライパンにキャベツを入れて

炒める。ベーコンの油とオリーブオイルで焼けたところに鷹の爪と少量のガーリックを入れ

さらに炒めるそしてそこにあらかじめ潰しておいたトマトを入れて煮込む。

最後に各お皿にこの特別ソースをかければ完成。

翔護 「さて完成だぞ。アギト、アウトフレームになって運んでくれ。」

ポケットに居たアギトが出てきて、光に包まれた。

そのあと小学校低学年くらいの大きさになったアギトがいた。

アギト 「わかった！フェンリルごはんだぞ」

と言ってテーブルに食事を並べていく。

そして、テーブルには4人分並んでいる。

さて、ここで俺の料理の師匠ともいえる奴を呼ぶか。

翔護 「我が身を護りし神聖なる者たちよ、契約の名のもとにここに姿を現したまえ。

出でよ！トルム！！」

アギトに続いて部屋が光で満ちた。そしてそこには金髪で身長が2m位の黒いスーツに身を包んだ男がいた。

トルム 「翔護殿、どうかしたのか？」

翔護 「ああ、料理の師であるお前にこの料理を評価してもらいた

くてな。」

トルム 「なるほど・・・確かに今回もまたおいしそうだ。食欲を  
そそられる。」

そして、トルムと俺たちは席に座った。

翔護 「それじゃ、皆」

全 「「「「いただきます！（わわん！）」「」「」

皆が一斉に食べ始める。

フェンリルは床でがっついてる。

アギトも幸せそうに食べてくれている。

トルム 「翔護殿・・・また腕を上げましたな。このスープも良い  
出汁が出てます。」

アギト 「あたしはこのパスタが好きだ！すっごく美味しいよ！」

翔護 「ありがとう二人とも。」

とりあえずアギトはチーズが行ける事がわかった。  
でも、トルムが何か言いたそうにしている。

トルム 「翔護殿この料理は確かにレベルが高いですが・・・私な  
ら後10秒は早くパスタを  
ゆで上げましたよ。」

っげ・・・確かに、パスタを茹でている時少し油断してて茹で上  
げるのが10秒遅かった。

さすがは師匠と言ったところか、こついう細かいところまでわかっ  
てしまうとは・・・

翔護 「ありがたいお言葉ありがとうございます。トルム。勉強になったよ。」

トルムはやはりすごいな。

でも、この後こんな事が無ければ俺の料理に勝てるのに……

トルム 「……こほん！ま、まあ私ならあとコブラの血やクワガタのすりこ」さてアギトご飯食べ  
ちやおうか」とかいろいろいれますけれど……」

そう、トルムは咳をする前までは良いアドバイスなのが、咳をしたあとの意見はおかしくなる。

昔、トルムに料理を作ってもらったら、自分のオリジナルアレンジという知らない事を

してくれたせいで人間が食べれるものではないものを作ってくれた。それ以来アドバイスに回すようにした。

そして20分後

全 「「「「ごちそうさまでした！（ワオオオン！」」

皆出した料理を綺麗に

翔護 「アギト、食器は片付けておくからお風呂入ってきちゃいなさい。」

アギト 「わかった！ありがと兄貴！」

さて、アギトがお風呂に行った事だし久々にやりますか。

翔護 「トルム、地下の道場に来てくれ。久々に組み手をしようじゃないか。

たまには俺も無手でやりたいし。」

そう、俺はトルムを呼んだときには毎回道場で組み手をしている。俺の使う流派トルムの流派は違うから学ぶことが多いのだ。

トルム 「わかりました。では地下に行きましょう。」

く地下く

翔護 「勝負のルールはいつもと同じで時間制限が20分の気絶またはギブアップで終了と言うことで。」

トルム 「御意」

そしてお互いに構えに入った。

俺の構えは右手を胸の前で握って祈るようになっている。目をつぶる。

これが俺達神のお力を持った奴らが編み出した聖拳流である。

まあ体得しているのは俺とボスと雷神の雷人<sup>ライト</sup>、後は悪友のアッシュくらいだけだ。

そして、トルムの構えは、右足を前に出して左足で体を支え  
右手を腹の前、左手を相手に重なるようにしている。

翔護 「いざ尋常に・・・」

トルム 「勝負!!」

瞬間トルムが走った。

まず鋭い拳を翔護の腹めがけて一発

しかし、翔護はそれを最低限の動作で回避した。

その逃げた先にトルムの鞭のようになつた足が向かっていた。

すると今まで祈るようになっていた翔護が目を開いた。

翔護 「聖拳流・・・絶影<sup>ぜっえい</sup>」

今までその場にいた翔護が消えた。いや、消えたように見えた。翔護は体の力を抜いて、倒れるようにして前のめりになりトルムの一撃を避けた。

体の脱力+重力が重なりその速度は尋常ではない。到底眼で追うことなどわ出来ない。そしてそのままトルムの腹に拳を捻じめるようにして一撃

翔護 「聖拳流・・・螺旋らせん！」

その一撃を受けたトルムは一瞬動かなくなったがすぐに距離を取りまた構えた。

トルム 「相変わらず聖拳流は危ないですな。さすがは合気道のさらには上に行くカウンターの極意だけはある・・・しかも、翔護殿オリジナルも入っているだけに厄介だ。」

翔護 「まあオリジナルが無ければ俺も危ないからね。けれど、お前の神龍拳も危ないよ。一撃一撃が必殺の技だからね。当たったら俺も結構やばい。」

トルム 「つぶ、それもそうです・・・な！」

そしてトルムが今度は反復横とびの要領で走りながら近づいてきた。右、左、右、左両サイドからの攻撃の嵐が来る。

トルム 「神龍拳一ノ型、古龍演舞こりゅうえんぶ！！」

トルムの技が俺に襲いかかってきた。トルムの技の中でも厄介な古龍演舞。

踊るようにして前、後ろ、右、左、上、下からの攻撃。

正直これを避けるには聖拳流しかないと思っっている。

なんとか避けきったと思いい少し警戒を解いた。

でも、それが行けなかった。

トルム 「引つかかりましたな！神龍拳二ノ型、龍弾撃りゅうだんげき！」

そして、俺はとっさに両腕でクロスして体を守ったが、警戒が少なかつたせいであまり力が

入らず、ガードの上から鋭いトルムの両腕の突きが襲った。

翔護 「つつつ！つつつは！！・・・やっ・・・ぱり・・・つよい・・・じゃん！」

互いに一撃つつ居れあい残り時間が後一分と言ったところだ。

トルム 「次の一撃が最後の技でしょう……」

翔護 「そうみたいだ。お互い全力の一撃を……」

翔護・トルム 「決める!!」

トルム 「はあああああああああああ!!」

翔護 「うおおおおおおおおお!!」

俺はトルムの攻撃を見きるべくさらに祈るようにして集中した。  
対するトルムはそんな時間を与えないと言わんばかりに迫ってきた。

0・1秒、俺まであと5mのところトルム

0・5秒 俺まであと1mのところトルム

1・0秒 俺の集中が終わり、トルムの全力の一撃を受け流してトルムの顎に掌底を入れる。

トルムがあおむけに倒れた。

翔護 「っはあはあ、俺の勝ちだな。」

俺はトルムを引つ張って道場から出てリビングに戻った。  
そして、冷凍庫から氷を出してトルムの頭を冷やした。

〈5分後〉

トルム 「……んは！ここは?!」

トルムが起きて周りを見る。

トルム 「そうか……また私は負けたのだな……だが悔いはない全力を出して勝てない。

そしてそれが自分の主か。いやはや絶対についてか越えて見せますよ  
翔護殿!」

最初は悔しそうにしていたが後半からはやる気がわいてきているみたいだ。

翔護 「ああ、俺も競う相手が居ると楽しいよ。これからもよろし

くな。」

二人で固い握手を結んだあと、トルムが光に包まれた。

トルム 「では、今日はこの辺で。次回はもっと強くなってますから覚悟しておいてください！」

トルムは光に包まれて自分の世界に帰って行った。  
ちようどそこに風呂上がりのアギトが来た。

アギト 「あれ？トルムもう帰っちゃったのか。」

翔護 「うん、たった今ね。あ、アギト風邪ひくから早く着替て。」

まったくいくらデバイスだからって風呂上がりにタオル一枚は危ない。

アギト 「了解」

アギトは自分の部屋に向かって歩いて行った。

翔護 「ああ疲れた。俺もお風呂に入るかな。」

俺は風呂に入るためにタオルを持って浴室を目指す。

翔護 「トルムとの一戦で汗も出たし、久々に長風呂でもするかな。」

そして俺は風呂に向かった。少し自慢だが俺の家の風呂はかなり大きい。

大人が8人入っても余裕の大きさでおまけに檜をわざわざ取り寄せた高級作り。

ちなみに風呂には2時間くらい入った。

（翔護 side out）

**第8話 これが俺流簡単料理だ！（後書き）**

誤字や脱字などがありましたらお伝えください。

感想待っています。

それと遅くなりましたが、ソラト様感想ありがとうございました！

## 第9話 皆に自己紹介（前書き）

今回ははやての翔護に対する気持ちですこしばかり書いてみました。

あと、FWには少しばかり能力を教えました。

## 第9話 皆に自己紹介

くはやてsideく

うちの部隊に新しい仲間が来た。

その人はここの後見人の一人である翔護さん。

うちがまだ地上で目をつけられていたときに色々お世話になった人  
や・・・

ゲンヤさんの部隊に行くまでに闇の書事件からあまり私を快く思っ  
ていない  
人たちから守ってくれた兄ちゃんみたい人。

私たちの使う魔法とは違った力を持つ不思議な人。

それでも優しく、一緒にいると楽しい人。

だから私はうれしく思う。

ああまたこの人と仕事ができるんや・・・と。

はやて 「ほな！FW陣を呼んで翔護さんを紹介せな！」

思えば翔護さんをまだ皆には紹介していなかった。

リンディさんからは本人のタイミングで能力については言わせろい

うてたし、

今の私にできることは皆に翔護さんを馴染ませる事くらいやるか？

なのは 「そうだね、早いうちに知らせておこつよ。」

フェイト 「翔護さんもそれでいいですか？」

なのはちゃんとフェイトちゃんはどつやら翔護さんを知ってたみたいで

説明が省けたから楽やけど、まさか4年前の奴は翔護さんやったとは私もビックリやで！！

あない捜査しても見つからなかったからもう見つからないと思ってたら

見事にリンディさんの部下やったし・・・

翔護 「ああ俺はそれで構わない。俺も早く皆に覚えてもらいたかったかな。」

どつやら翔護さんも皆に覚えてもらいたいらしい。  
ほんなら早いとこやつとした方がええやろ。

（10分後）

部隊長室にFW陣が集まった。

はやて 「では皆に紹介するで！この六課に新しく来てくれた人や  
！」

翔護 「みなさんこんにちは、俺は地上本部から来た風切 翔護つ  
ています。

ウィング隊を受け持つ事になりましたので短い間ですがよろしくね」

翔護さんが自己紹介を終えるとなんやスバルが驚いとる。  
どうかしたんやるか？

スバル 「ああ！も、もしかして、4年前助けてくれた人ですか！  
？」

ああそうやった、こんな元気いっぱいのスバルからは想像できへん  
けど4年前

空港火災で救助されとったなあ。

たしかなのはちゃんが救助したはずだったけど、

その前に誰かに助けられたって言っとならたぶん翔護さんの事か。

翔護 「というと……君はスバルかな？また会えてうれしいよ！」

スバル 「はい！あの時はありがとうございました！御かげでギン姉も助かりました！」

翔護 「礼には及ばないよ。それより本当に無事でよかったよ。」

二人は感動の再開で喜んでいるが正直他のメンバーがついてけとらん。

ここは悪いけど切らせてもらわな

はやて 「あの〜御二人さん悪いんやけど、他のメンバー紹介してもええかな？」

翔護 「ああ、すまない忘れてた。」

スバル 「す、すみません！」

はやて 「ほな！改めて紹介よろしく！」

そしてフォワード陣が自分の事を紹介し始めた。

スバル 「スバル・ナカジマ二等陸士です！」

ティアナ 「ティアナ・ランスター二等陸士です！」

エリオ 「エリオ・モンドイル三等陸士です！」

キャロ 「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です！この子は竜のフリードです！」

フリード 「キュクルルル〜！」

全 「「「「よろしくお願いします！（キュルルル！）」「」「」

翔護 「こちらよろしく申し上げます。俺も訓練の時とかはなるべくアドバイス

をするのでこれからもがんばっていきます。」

こうして翔護さんと、FWメンバーの紹介が終わった。  
皆覚えてくれるとええんやけど……

くはやてside outs

＼フイトside＼

私は今翔護さんについて考えていた。

はやてはあの空港火災の時はなんの力も使わないで翔護さんは脱出したと

言っていたけれども、私は違うと思う。

結局皆に紹介する時も何も言ってくれなかった。

これは私の思いこみでしかないけど、翔護さんにはなにか特別な力がある。

たまに彼からは魔力とは違う何かがあるような気がしてならない。

そう言えば私昨日からずっと翔護さんの事考えている気がするな．．

．．

どうしてだろ？

翔護 「フェイトどうした？何か考えごとか？」

フェイト 「うわっ？！しょ、翔護さん！ビックリさせないでくださいー！」

ああ、本当にびっくりした。いきなり現れるんだもん。  
まあ考えごとをしていた私も悪いけれども。。。

翔護 「おおっとそれはすまない。けれどもフェイト考えごとなら俺でも相談相手に  
なるから、いつでも相談してくれていいんだぞ？」

急に心配そうにこちらを見てくる翔護さん。  
というか、顔が近い！！

フェイト 「っは、はい！分かりましたノノノノ」

もう！絶対顔紅くなってるよ！自分でもわかるくらい頬が熱いもん！  
翔護さんこれわざとやってるのかな？

翔護 「ならいいよ。じゃあね！」

そういつて彼は歩いて行ってしまった。  
ふと思う。翔護さんの格好について。

なぜ白いロングコートを着ているのか、なぜ背中にあんなにも大きなアタッシューケースを  
背負っているのか？

そういえばあの時も同じ恰好だったっけ？

また私の疑問が増えていくのでした。

＼フエイトside out＼

（フォワード陣side）

今六課のFW陣は時間も時間なので食堂で食事をとりながら  
翔護に質問している。

世はまさに大質問時代!!!。

エリオ 「翔護さんってどんな戦い方をするんですか？」

質問をしたエリオ。ちなみに翔護さんと呼ぶのは階級付で呼ばれる  
のが

翔護は嫌がるからである。

翔護 「俺の戦い方は主に武器を使って敵を切るっていうことかな。」

スバル 「じゃあ！近接ですか？」

スバルが興味津々と言った感じに質問してきた。

翔護 「まあ近接攻撃で敵をねじ伏せるね。後は、今はポケットで寝てるけど」

このアギトが炎で援護してくれたりするね。」

翔護の回答に続いてティアナが自分の番と言わんばかりに質問してきた。

ティアナ 「それじゃ射撃とかってできますか？」

翔護 「できるよ。一様人並みにはね。まあ本業の人には劣っちゃうけど。」

ティアナは少しうれしかった。今まで自分の周りには射撃型の人が

いなかったから

この人なら指示してくれそうだからである。

ティアナ 「じゃあ今度教えてもらっても良いですか?!」

ティアナは少し嬉しそうに聞いた。

翔護 「ああいいよ。まあ期待に答えられるか分からないけれどね。

」

スバル 「ああ！ティアナばかりずるい！翔護さん私にも接近戦教えてください！」

スバルも負けじと翔護に教えを請う。

翔護 「スバルの場合は・・・俺じゃなくてうってつけの奴を教えてあげるよ。」

スバル 「その人誰ですか？強いんですか？」

翔護 「ああ、間違いなくあいつは強い。ただし、料理だけが駄目なやつだけ・・・」

最後の方は呟いていてよく聞こえなかったがそれでもスバルからしたら強い人が教えてくれるだけで嬉しかったみたいだ。

スバル 「ありがとうございます！」

そして最後にキャラロが質問してきた。

キャラロ 「翔護さんって何処に住んでるんですか？」

意外とプライベートな質問に少し拍子抜けしたが、  
一応答えておく

翔護 「ああ、今から言う事は部隊長や隊長達には内緒だぞ？」

キャラロ・エリオ 「どうしてですか？」

翔護 「それはお前たちの部隊長のあの性格から考えてごらん・・・  
部隊発足の時にあんなお祭り騒ぎをした奴が知らない人の家を知っ  
てみる、

平穩が消えてなくなるだろ？」

皆思い当たる節があるようで苦笑いである

ティアナ 「確かに・・・部隊長なら騒ぎそうですね・・・」

翔護 「わかってくれたかな？それなら良いんだけど。」

スバル 「で、実際何処に住んでるんですか？」

スバルがキャラコの代弁で先ほどの質問をしてくる。

翔護 「家はそうだな・・・ミッドのクラナガンあたりかな？」

キャラコ 「ええ！ミッドに住んでるんですか？」

翔護 「ああ、だから寮にも住んでないよ。」

エリオ 「じゃあ、今度遊びに行つて良いですか？」

翔護 「今度と言わずに今行くか？見るだけならそんなに時間もか

からないだろ？」

ティアナ 「翔護さん、こっからクラナガンまで行ったら食事の時間終わっちゃってますよ？」

ティアナは皆の意見を代表して言った。

しかしこの時はやて以外のメンバーは翔護の力を知らないからその反応は当然である。

翔護 「ああ、そうか、皆俺の力を知らないんだっけ？んじゃリンデイさんも俺のタイミンゲ  
で言えって言ってたからFW陣だけにでも言っとくか。」

エリオ 「あの、何がですか？」

翔護 「実は俺単独で次空間転移が可能なんだよ。まあ一種のレアスキル？みたいなもんかな。」

FW陣もこんな突飛な説明でもなんとか理解したみたいで納得した。

ティアナ 「なんとも便利なレアスキルですね。」

翔護 「まあこの力も昔ある人にもらった大切な力だからね……  
・  
なんか辛気臭くなったな。まあとりあえず、ごっしょうた〜い！」

翔護はそういうと、食堂の近くの扉を勢いよく開けた。  
するとその先は風切家のリビングが広がっていた。

翔護 「ささ、入って入って！」

翔護の言葉に皆家の中に入っていく  
最初は皆も突然の事態に驚いていたが、ああこれがその力か……  
・  
と、次第に納得していた。

ティアナ 「大きい……」

エリオ 「わあ、外は芝生だ！」

キャロ 「このソファやわらか〜い！」

スバル 「日光が気持ちいい！」

など各々感想を述べた。

この風切邸立地条件が非常に良いことが奥様方にも有名である。

翔護を除く全員が見惚れているとある生き物の鳴き声が聞こえた。

フェンリル 「わん！わん！」

うれしそうに鳴きながら一つの黒い弾丸が翔護の頭に勢いよく乗った。

キャロ・スバル 「「かわいい〜！」」

キャロとスバルは初めて見たフェンリルに胸がキュンとなっているようだ。

ティアナは突然飛んできたものに少し驚いている。  
エリオはただただ見るばかりである。

翔護 「紹介しよう、俺の相棒であるフェンリルだ。こっつ見えても結構強いから  
注意しとくんだぞ。」

フェンリル 「わわん！わん！」

その後エリオとキャロとフリードはフェンリルと外の芝生で遊んでいたり、

スバルは家の探索でティアナは俺と話していた。

ティアナ 「すごいですねこんな立派な家に住んでるなんて」

翔護 「いやいや、ここもリフォームする前はすごくやばかったぞ？  
見た目が幽霊屋敷だったから。まあ敷地が多いから業者に頼んで改築したってわけ。」

ティアナ 「改築でここまで綺麗になるなんて……腕のいい業者ですね。」

翔護 「まあ物件屋も一流を教えるって言うてたし。俺にとっては嬉しいばかりだよ。」

おおつと、少し長く居すぎたみたいだな。お〜い、皆帰るぞ〜」

エリオ・キャロ 「〜は〜い」

翔護 「あれ、スバル何処だ？」

ティアナ 「本当だ。こら馬鹿スバル！どこ？」

スバルが戻ってこないのを皆で探していると、  
地下の扉からスバルが戻ってきた。

スバル 「ごめんごめん、地下に道場があったからつついっつい自主練  
しちゃった。／＼／」

と、少し恥ずかしそうに頭をかいている。

翔護 「よし、それでは帰りますか！、フェンリル留守番頼んだ。」

エリオ・キャロ・フリード 「」「またねフェンリル（キュクルル  
！）」「」

スバル 「翔護さん楽しかったですよ！」

ティアナ 「私も色々良いものが見れました。」

翔護 「どういたしまして。それじゃ行くか。」

こつして皆はまた扉を開けて六課に戻って行った。

くフワード陣side outく

## 第9話 皆に自己紹介（後書き）

なんかうまく書けないな。。。

指摘などがありましたらなるべく改善いたしますのでご報告ください。

第10話 模擬戦（前書き）

さあさあバトルマニアで有名なシグナム様の登場デイ!!!

第10話 模擬戦

）side）

シグナム 「私と模擬戦をしてくれ！」

翔護 「……………え？」

事の発端はどこかの部隊長の一言から始まった。

）部隊長室にて）

はやて 「そういえば翔護さん六課に来てもう一週間以上たつけど翔護さんが戦ってる姿って見たことあらへんなあ。」

はやてが思った事を口にしてしまった。

確かに、翔護は六課に来てからは書類仕事ばかりをしていたのでとても

FW陣の模擬戦に参加して訓練するなんて時間が無かった。

しかし、このはやての発言により六課のバトルマニア事シグナムに火がついた。

シグナム 「風切、お前は確か陸戦がSS+らしいな。」

翔護 「まあそうだな。俺も色々訓練しているうちにこんな感じになつたよ。」

なんでもなさそうに話す翔護にシグナムの魂が揺れ動いた。

シグナム 「私と模擬戦をしてくれ！」

翔護 「……………え？」

部隊長室では隊長陣が（またシグナムの悪い癖が…………）と  
思って  
かわいそうな眼で翔護を見ていた。

シグナム 「丁度主はやてもお前の实力を見たいと言っているから  
良い機会だろう。」  
私が相手をしてやる！」

シグナムからは「もう早く戦いたい!!」という無邪気な子供の様なオーラがあふれ出していた。

翔護 「うん、確かにそうだな。よし！俺もその勝負受けて立つ！」

シグナム 「そうか！では20分後に訓練室に来い！」

そう言ってシグナムは急いで部隊長室から出て行った。  
その後ろ姿はもうスキップすらしかねないほどの荒れっぷりだった。

ヴィータ 「なんかお前も大変なことになったな・・・」

翔護 「ん？別にそうでもないさ。確かにシグナムの言つとおり丁度いい機会だからな。」

ヴィータ 「まあお前がそういふならいいんだけど……」

そう言つてヴィータは部屋から出て行った。

はやて 「翔護さん成り行きでこつなつてしまつたけれどもまじつちやつて戦うんですか？」

翔護 「あれ、皆知らないんだっけ？」

アギト 「兄貴、確か兄貴の戦闘記録は自分で送らないでって言うてなかったっけか？」

アギトがポケットから顔を出して翔護に言った。

そう、翔護は自分の力が外部に漏れないために戦闘映像などはすべて記録してもらって

ないのである。なので、六課の部隊長であるはやてのところにもそのデータが送られていない。

翔護 「本当に丁度いいな。それじゃ、今回は皆を集めて俺とシグナムの戦闘風景を見学してくれ。」

はやて「最初からそのつもりです。そういえば翔護さん、今回はその背中の  
でかいケースを使わへんの？」

はやての意見はもつともだった。

翔護は六課に来てから出勤する時には毎回背中に大きなアタッシュケースを背負っている。

しかし、本人はいつも背負っているだけで使おうとはしないし、中身も分からない。

六課メンバーは皆気になって仕方なかったのである。

特になのはとフェイトは4年前からずっと気になっていた。

翔護「ああこれか？そうだな、久々に使ってみるのも良いかもしれないな。」

フエイト 「それじゃいつも使っている短剣では無いという事ですね？」

フエイトはケースの中には風の短剣がたくさんあると思っていたらしい。  
それはそれで恐ろしいが。

翔護 「まあそうかな？詳しい事は見てのお楽しみってことで。俺もそろそろ準備するかな。  
アギトは皆と見学しててくれ。」

アギト 「なんでだよ！？あたしも一緒に戦うぜ！」

翔護 「いやだめだ。向こうは本物の騎士だ。たぶん一対一を望んでいるだろう。  
ならこっちもその期待に答えて一対一で挑まなきゃいけないだろ？」

翔護はやさしく論するようにアギトに言い聞かせた。  
アギトも聞き分けた様子でしぶしぶ頷いた。

翔護 「では、行ってくる。」

そして翔護も部隊長室から去って行った。

（訓練室）

そこにはもうすでに廃墟となした町が広がっていた。

そしてその中心には騎士甲冑を身にまとったシグナムが佇んでいた。

シグナム 「……………来たか……………」

翔護 「遅れてすまない。俺も少し緊張していて遅くなった。」

シグナム 「っふ、かまわんさ」

翔護 「ではそろそろ始めるとするか……ゴトーン！」

そう言って翔護は背中ケースを地面に下ろした。

シグナム 「ほう、今回はその隠し玉を使うということか……」

翔護 「ああ、久々にこれを使った戦いをしたくてね。何よりこいつ自身も暴れたそうだからな」

そう言って翔護はケースをバンバン叩いた。

そしてお互いに最終準備が整ったようである。

リン 「《それじゃ良いみたいですね？ よーいはじめですー！》」

シグナム 「いくぞ！風切！」      ツザ！

最初に飛び出したのはシグナムだ。レヴァンティンを片手に持ちすごい速さで翔護の懐めがけて切つて来た。

だが、翔護はそれに反応してケースを盾にしてでガードした。

シグナム 「つく！なんて固いケースだ。」

翔護 「伊達に俺もこいつと修羅場くぐり抜けてないからな。・・・

・俺も

行かせてもらうかな。オープン！花鳥風月！」

翔護がそう言うと、ケースが開いて、中から刃が純白の白で峰が綺麗な黄緑の両柄に刃がついた

大鎌が出てきた。それを翔護は軽々と持ち上げシグナムに向かって言った。

翔護 「今のうちに言うておく。これは加減が難しいからもしかしたら怪我するかもしれない！」

そう、翔護のこの花鳥風月は一応質量兵器に当たるもので、

普通に攻撃をするとスパツ！と行ってしまふのである。

しかし翔護はそれを抑えるために風の短剣の応用で刃の部分に風のクッションを纏わせている。

なので攻撃を喰らっても打撲程度で済む。

シグナム 「なるほどそれがお前の本来の武器であるものか。大鎌とは珍しいな。」

シグナムと見ている六課メンバーたちは翔護の持つ大鎌を見ていた。シグナムはその美しさに、六課メンバーはその神々しさに見とれていた。

翔護 「そうだ。名は花鳥風月俺の最強の武器だ。こいつでたくさんの場面から生きて帰って来た。」

そして、翔護は聖拳流の構えをとった。今回は槍術の構えなので、大鎌を片手に持ち

後ろで構え、もう片方の手を胸の前に置き祈るようになっている。

一見すると隙だらけである。

その様子を見ていたエリオが隊長達に尋ねた。

エリオ 「あれ、どうしてシグナム副隊長は翔護さんを攻めないん

ですか？  
あんなに隙だらけなのに。」

するとそこを訂正するかの様にヴィータが言う

ヴィータ 「違うな、ありゃわざと隙を作ってやがるんだ。あいつ相当できるぜ。」

その言葉を聞いたメンバーは唾を飲み込みまた訓練に注目する。

シグナム 「（なんだこの構えは?! 一見すると隙だらけだが何か  
が攻めてはいけない  
と反応している!）」

シグナムは翔護の奇妙な構えに手を出せずにした。  
自分から手を出したら一瞬で終わる、そう思ったからだ。

翔護 「ふふ、シグナムなかなかやるな。この構えを見抜くとは・・・  
・・・だけど、  
見抜いただけじゃ終わらないぞ！」 「ザァン！」

翔護は縮地を使い地面を蹴りシグナムに一気に接近した。

そのあまりの速さに見ていた一同が驚いていた。

翔護 「どうしたシグナム？」

シグナム 「つく！速い！！」      キーン！

シグナムは多少遅れたがなんとか反応することができ、間一髪のところ  
で交わした。

だが、

翔護 「その回避コースはもう分かっているよ！」

避けた先には翔護の鋭い蹴りが迫っていた。

シグナムはこれをもろに腹に受けてしまい近くの壁に叩きつけられた。

辺りから煙がもくもくと上がっている。

翔護 「ふう、久々にがんばった。さてと様子でもみにいき」「誰が寝ていると言った？」

「……だよな。」

そこには腹を押さえながらもレヴァンティンを支えにこちらに向かってくる

シグナムが見えた。

シグナム 「次はこちらからだ！レヴァンティンカートリッジロード！」

『カートリッジロード』

レヴァンティンから葉莢が飛び出した。

そしてシグナムがレヴァンティンで鋭い一撃を放つ

シグナム 「喰らえ！紫電一閃！！」

翔護に向かって巨大な斬激が飛び込んできた。

さすがの翔護もこれには驚き花鳥風月でガードする。

それを見て思わず頬がつりあがるシグナム

シグナム 「かかったな！それは困だ！」

その一部始終を見ていたスターズメンバーは

ティアナ 「副隊長すごい！あの一撃を囷に使うなんて」

スバル 「翔護さん危ない！」

と各々上司の身の安否やすごさを気遣っていた。

花鳥風月で翔護がガードをするのを予想していたシグナムが既にすぐそこまで来ていた。

レヴァンティンを上段構えで切りかかっている、

これから一撃に対応するために大鎌を戻していると間に合わない。

確実に取った！！　っとシグナムが確信しきっていた。

しかし、それでも翔護は予想外の行動を起こした。

ありえない事にレヴァンティンは何かに防がれていた。確実に大鎌のスピードなら間に合わない

そう大鎌ならば

翔護 「そこまでの読みは良いよシグナム。けれど、相手の武器の特徴をまだ見切ってはいなかったみたいだね？」

翔護の手にはいつの間にか柄の真中から半分に折れそこから鎖が出た大鎌があり、  
両手に一本ずつ鎌を持っていた。

それを使いシグナムの紫電一閃を防いだ後、さらにシグナムの攻撃も防いだようだ。

シグナム 「何！？そんな力があつたとは・・・感心するのも良いけど防御もね？」！！」

シグナムが事を整理していると翔護が絶影を使い一気にシグナムの背後に  
まわり込み鎖で縛りつけ二つの鎌で叩きつけた。

一瞬意識が飛んだシグナムはなんとか気力で踏ん張り距離を取るために走った。

シグナム 「うぐ！・・・はあはあ、っ！これほどだとは・・・」

シグナムは今体の痛みに耐えながら歓喜していた。  
これほどまでに気持ちが高ぶったのはフェイト以来かもしれないからだ。

シグナム 「ふふふ！いいぞ風切！、これを受けてみる！」

シグナムの持つレヴァンティンが姿を変えて連結刃に変わった。  
そしてその刃には魔力が籠っていく。間違いなくシグナムは今日一  
番のドでかいのを  
翔護にぶつける気だ。

シグナム 「カートリッジロード！！行け！飛龍一閃！！」

シグナムの放った一撃にさすがの翔護も防御ができないと判断して  
いそいでケースを盾にした。

翔護 「ツぐぐ！な、なんてパワーだよ！！」 ズバァン！

今度は翔護の周りに土煙が舞った。

それを見ているシグナムは既に満身創痕に近い状態であった。

シグナム 「はあ、はあこれ以上は……無理だぞ……」

シグナムは土煙にどうか倒れていてくれと願うような眼差しを向けた。

だが、その願いは煙が晴れることにより打ち砕かれた。

翔護 「さすがにやばかったよ……まさかあんな攻撃があるなんてね。」

そこにはコートが少し汚れているだけで後はこれといった怪我が見受けられない姿の翔護がいた。どうやらあの一撃をケースだけで防いだようだ。

シグナム 「お前は本当に人間か？少なくとも私のあの一撃でそんな軽傷の者は見たことがないぞ」

翔護 「うんある意味その質問は的を射てるかな？」

確かに、目の前にいる翔護は人間で有り人間ではない。

しかしそんな事をしらないシグナムはただただ茫然とするだけである。

翔護 「これで終わり・・・聖拳流オリジナル、絶影+螺旋！！！」

そして翔護は脱力+重力の力で倒れこむ力を利用してシグナムの背後に回り込み、  
拳でレヴァンティンを弾き飛ばし、首元に花鳥風月を突きつけた。

翔護 「オーダーは？」

シグナム 「っふ、私の負けだ。」

そしてシグナムはデバイスをリリースモードにし、翔護は花鳥風月をケースに戻して

お互いの勝負は終幕を迎えた・・・

side out

見学組み side

そのころ

シグナムと翔護の戦いを見ていたメンバー達は……

エリオ 「翔護さん強いです!!」

スバル 「だよねえ！特に最後の方なんか見えなかったよ！」

とその強さに憧れを抱いたり、

ティアナ 「あれが陸戦SS+……」

キャロ 「はわ〜） 驚きと尊敬（」

冷静に分析して翔護の実力を感じたりしていた。

なのは 「あれがケースの中身なんだ……」

フェイト 「翔護さん私よりも全然強い……」

この二人も初めて翔護の戦闘を見たので驚いている。

特にフェイトに関しては自分よりももしかしたら速さが上の可能性があるので少し落ち込んでいた。

なのは 「うう、これじゃ教導官として示しがつかないの……それに翔護さん  
まだ本気じゃなさそうだし。」

ヴィータ 「あたしもそれは思ったな。あいつまだ何か隠してやがる」

なのはとヴィータは翔護が手加減をしていることを見抜いていた。

そこに、自分の主の話が行われているので興味がわいたアギトが出てきた。

アギト 「へっへん 兄貴は強いだろ？まあ、お前らが言つて  
おり

まだまだ本気じゃないぜ兄貴は！」

F W 陣 「（シグナム副隊長相手に本気じゃないって………  
）」

アギトの驚愕の真実に一同は意気消沈した。



第10話 模擬戦（後書き）

うん、戦闘シーンはうまく書けなくて苦手だな……

今日もし時間があればもう一度更新します。

そして花鳥風月のいうならば2ndモードの鎖鎌タイプです。

第11話 模擬戦終了後（前書き）

すみません、遅くなりました。

第11話 模擬戦終了後

〔翔護 side〕

俺は今シグナムと並んで歩いて見字組みのもとに向かっている。

ボタン！

翔護 「今戻った・・・ぞ？」

扉を開けた先には良い笑顔をした悪魔と死神がいた。（背後から黒いオーラ出てます!!）  
後ろでは夜天の主がこちらに向けて申し訳なさそうに頭を下げてい  
る。

なのは 「ふふふ・・・翔護さん、この結果どういうことかな？」

フェイト 「SS+ランクにしては少し強すぎないかな？」

ああ、はやてが謝っている意味がわかったぞ。  
あいつ口を滑らして俺がこの数年ランク試験を受けていない事をば  
らしたな。。。

翔護 「そ、そんなことないぞ?!まぐれだまぐれ!!」

シグナム 「ほう、ならばお前はまぐれで私に勝ったと・・・

「？」

あれ？なんか隣からもどす黒いオーラが出てるんですが……  
もう、エリオとキャロなんか気絶寸前だし、  
ティアナやスバルは歯をガチガチ震わせてるぞ！！

翔護 「はあ、もう正直に言います。 皆さまがご察しの通り俺は  
ここ数年試験

を受けていません！なので、もうここらへんで許してはくれないで  
しょうか！！??？」

はやて 「そ、そうやで！翔護さんだって好きで受けなかったわけ  
やないで！仕事が多忙で  
できなかつただけや！」

俺の味方ははやてだけだよ……

ありがとうございます。

フェイト 「まあ、それなら仕方無いよね。」

なのは 「うーんなんか納得がいかないけど良しとするの・・・」

二人の方はなんとか許してくれたけれども、お隣さんからはまだ殺気が。。  
なんでもするから許して！！！！

シグナム 「風切・・・今度は私が良しと言うまで模擬戦をするぞ・・・」

っ！？ここまで来ればもうバトル馬鹿の領域じゃないか？  
普通はそんな事はしないんだけれどなあ。

まあ、やらないと本当にやばそうだし。

翔護 「仕方ない。それで機嫌を直してくれるならば良いよ。」

シグナム 「うむ、ならば許そう。」

おおっとシグナム達と話していたらFW達が蚊帳の外だったな。

俺の戦いの感想でも聞いてみるかな。

翔護 「そういえば皆、俺達の模擬戦でなにか気になる事とかあった？」

エリキャラ口はなんとか復活して、スバルとティアナも大丈夫そうだな。

エリオ 「あ、じゃあ翔護さんが戦っている時に思ったんですけど、途中ものすごい速さでシグナム副隊長の背後とかに回ってませんでした?」

おお、この歳にして良く見てるな。たぶん絶影のことか?

翔護 「良く見てたな。あれは武術の一つで魔法なしでもできるものだよ。」

まあそれなりに練習をしなきゃけどね。」

スバル 「じゃあじゃあ!私にもできますか?!」

スバルは・・・そうか近接タイプだからな。けれども、なんかスバルって落ち着かなそう  
だな。それだと俺の流派は向いてないし、

翔護 「スバル一つだけ質問するけど、君はいかなる時も冷静沈着に考え物事  
を見ることができるか？」

スバル 「あう・・・できないです・・・。」

やっぱり。聖拳流は祈りのポーズがあるように落ち着く性格の人には向いている  
けれども、  
スバルみたいな活発な子にはトルムみたいな神龍拳が向いているんだよな。

そうトルムみたいな・・・・・・・・・・あつ！

翔護 「そう落ち込むなスバル。確かにお前には俺の技は向いてないけど、

一人知り合いがいてそいつの技ならお前はたぶんできると思うぞ？」

今思えばあいつ最近 「あゝ弟子がほしいいゝ」とか言ってた気がするような。。。

まあ俺の妄想でそうしておこう。

そして俺の話聞いてスバルの死んだ魚の様な眼が一気に  
宝石のように輝いた。

スバル 「本当ですか！？じゃ、じゃあ今度ぜひ紹介してください  
！！」

翔護 「あ、ああ分かったから。少し離れて、近いから！！。」

スバルよ。喜ぶのは良いけど、さすがに体がひつつくくらいは近寄りすぎだぞ。  
うきうきしながらスバルが離れた後はティアナが質問してきた。

ティア 「そういえば翔護さんが使っていたデバイスってなんかすごい形してませんでした？」

後ろでキャロも頷いているあたり一人とも同じ質問だったのだろう。

翔護 「あああれか。まあ俺自身もなんであんな鎌になったのか不思議で

仕方ないけれども今となってはもう体の一部に近いようなものかな。

「

花鳥風月や風の短剣は俺が神としての力に自覚した時に眼の前に現れた神器だ。

最初見たときはなんでこんな大鎌なんだろうかと毎日悩み、いやいや扱っていた、

ひどい時は早坂兄弟はいいなあ〜なんて思っていた時もあった。

けれども、ボスから「いいかげん現実見ろ」といわれてその日から花鳥風月で鍛錬を真剣に

始めてからまるで体に馴染むかのように扱えるようになった。

ボス曰く「同調したな」っと言ってたから、たぶんもう切っても切れない関係になったのだと思う

翔護 「まあティアナ達も自分の武器をしっかり見て、扱ってけば自ずと

なにをすべきかがわかるよ。」

そう言い終わった後に突如勢いよく扉が開かれ、眼鏡の女性と金髪の医者のような人が入って来た。

シャーリー 「八神部隊長失礼します！！そして、風切少将すこし調べさせていただきますよー！！」

シャマル 「すこしごめんなさいね」

そう言つて二人が何かを俺の体につけ始めた。

何か計測しているらしい。はて？俺の体が癌か何かにやられているのか？

そして一分ほど達結果が出たようで驚いた感じで見えてきた。

なのは 「ねえ何を調べてるの？」

なのはがこの場の全員の意見を代弁してくれた。

やられている本人もわからないので賛同せざるをえない。

シャマル 「やっぱりそうね……皆驚かないでね。翔護さんに



フェイト 「翔護さんって魔法なしで……」

ティアナ 「陸戦SS+……ですか……」

え？この人って人間？みたいな視線で俺を見てくる三人。一方、

エリオ 「魔法なしで陸戦SS+かあ!!」

スバル 「へえ〜翔護さんってやっぱり強いんだね!!」

キヤロ 「やっぱり翔護さんすごいなあ〜!!」

と残りのおてんば組みは驚きと尊敬、そして憧れの視線を向けていた。

シグナム 「生身で私に勝つとは、ふふふふ！面白いぞ風切ー！！」

ヴィータ 「もう、ついていけねえよ……」

リン 「……」

と、バトル馬鹿はさらに燃え、ヴィータとリンは翔護のスペックのおかしさに

呆れていたのであった。

）翔護side out）

）side）

シャマル達の爆弾発言により、翔護のスペックが分かってしまった

一同。

なのは 「翔護さんリンカーコア無いんだ……でもなんか翔護さんからは  
不思議な力を感じるけどね」

フエイト 「あ、なのはも？私もそんな感じ。魔力では無いなにか  
を感じる。  
なんかとても暖かいような感じで……落ち着く暖かさを。」

なのは 「だよね。今度はやてちゃんに聞いてみようよ。翔護さんと仲良さそうだから  
なんか知ってると思うよ？まあ知ってて話さないんだったら……」

「

なのは・フェイト 「O H A N A S I I ! ! だね・・・」

六課で怒らせてはいけない人物が翔護の事を調べてい回るのであった。

余談

フェイト 「っっ、この際だから、彼女がいるかも聞いちゃおうかな／＼／＼／  
あ、あと好きな食べ物とかもいいかも／＼／＼／」

片割れは乙女の悩みも抱えていた。

side out



第11話 模擬戦終了後（後書き）

しばらくは文章構成で更新できないかもしれません……

あと、皆様、作者は感想が大好きです。

ぜひとも書いていってください。

**番外編その2 零法町でのとある一日(前書き)**

表向きは20000PV達成記念ですが、  
ただ単に書きたくなっただけです。

キャラうまく表せたかな？

番外編その2 零法町でのとある一日

〽零法町 神童組合長室〽

守 「いやあくよくぞ遠いところから来てくれたなあ！！本当に久しぶりだ！！」

守は今日の前にいる来客二人に嬉しそうに話しかけた。

???? 「いや〽、僕もこっちに来たかったんだけど忙しくてね〽あ、そうだ！

また翔護君の卵焼き食べさせてよ。あれおいしいんだよね」

どうやらこの二人は以前にも来たことがあるようだ。

?????2 「ぼおくも〽くおっちにはきたかっただがね〽何分いそがしくて。」

この独特なしゃべり方（若本風）の型は若干たらこ唇なのが特徴的

だ。

守 「まあまあいいじゃねえか！本当に久しぶりだな、マスオ、アナゴー！」

マスオ 「いやいや〜守君、こつちだつてこれと言つてお土産がなくて申し訳ないよ〜」

アナゴ 「さあて、茶番はここまでにして、ほおんたいにはいろいろかあ〜？」

どうやら今日この二人は何か話があつて来たみたいだ。

場の空気からして結構重要そうだな。ここでマスオ&アナゴ共通ルートのCG回収です！！

守 「ああそうだな。まずお前たちに頼みがあるんだが、聞いてはくれねえか？」

アナゴ 「つぶ、なあにをいまさら〜？もともとそのつうもりだあろ〜？」

守 「はは！やっぱりばれてか！まあそのことは置いて、今の付近に墮人Lv3が2体いやがる。

まだ早坂兄弟には無理だし、今翔護は別件で出ている。ライトの奴は・・・相変わらず連絡がつかねえ。頼む！お前さんら二人で倒しちゃくれねえか？報酬は弾ませる！！」

マスオ 「なにを言ってるんだい守君！親友の頼みを断るわけないだろ？」

アナゴ 「そおだぞ、君とおぼくたちとの仲だろお？」

守の切実なる願いを快く聞いてくれた二人に守は改めて友情の大切さを知った。

守 「・・・ありがとう、っ本当に！ありがとう！！」

アナゴ 「なあ〜に、いいってこ・と・よ。」

マスオ 「そうと決まれば早速行こうか！！」

こうして守御一行は墮人Lv3の目撃された場所に向かった。

守 「感じるぞ・・・近くに嫌がるな。それじゃ御二人さん、俺はサポートしかできねえけど

頑張れ！まあ俺の補佐の意味もないだろうけどな。」

マスオ 「分かったよ。僕の方は5分でケリをつけるよ。アナゴ君は？」

アナゴ 「ぼくはあく・・・1分だ。」

守 「ははは！相変わらずだな！それじゃ・・・っと来た見たいだぞ！！たのんだ！！」

そして、守は戦闘区域から離れていき、その場にはマスオとアナゴが残った。

二人の手には神器らしきものが持たれている。

と、そこに、眼の前に普段の墮人とは違う大きさが森の木ぐらいいなっ

巨人の墮人Lv3が2体いた。

マスオ 「おやおやおんなに早くお出ましかい？まあいいさ。早く



ここで、もつとも怒らせてはいけない人が覚醒した。

ここからは音声だけでお楽しみください。

マスオ 「ほらほらどうしたんだい？後ろがガラ空きだよ？ズバ  
ッ！！！」

アナゴ 「虫けらがあゝ頭に乘るなよゝ？」

ゝ30秒後ゝ

マスオ 「これでチエツクメイトだよ？何か言い残す事は？ああそ  
うだったしゃべれないんだっけ？  
ならいいよ。このまま逝きな……」

アナゴの相手をしている堕人が木の棒を放り投げた！！

アナゴ 「アイテムなんか・・・使ってんじゃ、ねえ！！！！！！」  
「！！！！！！」

結果、二人とも一分かからなかった。

ガサガサ、ザツザツ

守 「いや〜相変わらず二人とも激しい戦いだな。見ててひやっとするよ。」

マスオ 「これくらいどつってことないよ。」

アナゴ 「まあ〜朝飯まえかなあ〜？」  
この時もう神器は二人とも解除しています。

この後三人で世間話をしながら組合に帰ると、ちょうど仕事を終えて帰って来た翔護がいた。

翔護 「ああボス・・・って、マスオさんにアナゴさん！？お久しぶりです！！」

マスオ 「やあ翔護君！ひさしぶり。もう仕事は終わったのかい？」

翔護 「あ、はい。今帰って来たところです。」

アナゴ 「あまり無理はするなよ〜？」

翔護 「はい！アナゴさんこそだめですよ無理しちゃ。」

アナゴ 「はっはっは！若造に心配されるとはなあ！」

マスオ 「ああそつだ翔護君、またあの卵焼き作つてよ。あれ本当においしいんだよね。」

翔護 「喜んでくれたならたくさん作りますよ！アナゴさんも何か作りますか？」

アナゴ 「ぼくはあくあさりの酒蒸しをたのむよお」

守 「んじゃ俺は鯖のみs」なんでボスマまで？」「たたくいいじゃねえかよ。というわけで味噌煮な！」

翔護 「はいはい。あ、そうだ！マスオさんにアナゴさん、せつかくですから何か最近の事聞かせてくださいよ！」

マスオ 「ああいいよ。でもなににしようかねえ？」

アナゴ 「そうだフグ田くん、あれはどうかなあ？」  
「ゴニョゴニョ」

マスオ 「おっ！それはいいねえ。それにしよう！」

守 「ん？なんだなんだ？おもしろい話か？俺にも聞かせる！！」

うわあ！ボスそれまだ生だよ！

ヒック！っいゝ貴様らぶち殺すぞおおおお

おおおお！

まあサザエ今晚中には帰るって!!えっ?!  
まって鍵は閉めないで!!

ほれほれ早くしないと全部俺が食っちゃまう

ぞっ?

.....

つと、こんな感じで楽しく、一風変わった神童組合の一日なのでした。

番外編その2 零法町でのとある一日(後書き)

やばい、やっちまった……

何してんだ俺？

遅くなりましたが煤払様！

感想ありがとうございました！  
作者はとっても嬉しいです！

第12話 初出陣ただし主役は待機(前書き)

本当にごめんなさい！

久々の更新ですいませんでした！！

第12話 初出陣ただし主役は待機

（side）

翔護 「ほらエリオ！もう少し距離を取れ！それじゃ槍の意味が無  
いぞー！！」

エリオ 「はっはい！」

ここは六課にある訓練所である。  
今そこでは”翔護VSFW陣”の勝負が繰り広げられていた。

スバル 「でやあああああああ！！！！」

翔護 「スバル少し考えて行動するんだぞ。そんな攻撃じゃ簡単に避けられるぞ！」

真正面から勢いよく突撃してきたスバルの拳を  
綺麗に手の平で受け流してスバルのバランスを崩した。

スバル 「うわわっ！」

今現在の翔護の武装は訓練用のジャケットの上に神の羽衣を着た状態  
態で

武器は持っていない。

純粹なる拳だけで指導している。

翔護 「これでスバルは撃墜だな。実践だつたらやばいぞ？」

スバル 「あははは・・・頑張ります。」

翔護 「残るはエリオとキャロとティアナか。ああ、スバルはちゃんと見て勉強するんだぞ。俺の技でも盗めるところは盗むんだぞ？」

スバル 「はい！そうさせてもらいます。」

先ほどの撃墜の事など忘れたかの様に元気よく返事をするスバルを見て

少し頭が痛くなる翔護。

翔護 「(ちよっとは反省点とか考えて……………」

翔護 「さてっと、ん？誰か近づいて来るな…………これは…………キヤロか!！」

キヤロ 「いくよエリオ君!！」

エリオ 「うん!…!でりゃあああああああ!…」

そこにはキヤロと一緒にいたエリオが超速の槍で突撃してきた。

キャラの魔法でブーストがかかっているせいか想像以上にはやい。

翔護 「動きはだいぶ良くなったな。けど甘いよ!!」

翔護は槍を最小の動きで避けて、鞭のように撓った蹴りをエリオに放った。

しかし、突如としてエリオが塵気楼のように歪んだ。

翔護 「!!!?何?!しまった、ティアナか!!」

それはティアナが作り出した幻影であり、キャラはその引き立て役と言ったところだ。

そしてこの瞬間を待っていたとばかりに物陰に隠れていたエリオが上空から飛び降りてきて

ストラーダを突きつけてきた。

翔護 「つく?! なかなかやるな」「クロスファイヤーシュート!!」  
なに?!」

翔護はエリオの奇襲を横に移動することにより回避する。  
だが、避けた先にはビルの物陰に潜んでいたティアナが自信の打てる最高の弾丸を放って来た。  
さすがの翔護もこれには驚きそして油断していた。

翔護 「(こつこついう時こそ眼を瞑り、そして集中する。)」

翔護は両者から迫り来る攻撃のさなか、聖拳流の構えである祈る構

えになった。

着々と迫る攻撃のなか翔護はただ静かに祈っていた。

そして、

エリオ 「えええええ?!」

ティアナ 「うそでしょ?!?!」

直後、見事に避けきったのである。

聖拳流はいついかなる時でも冷静になり、そして物事の本質を見極め警戒心を強め超集中により敵のいかなる攻撃も回避し、そしてカウンターを喰らわせる  
事が出来るまさに無敵の流派なのである。

翔護が祈るような構えになるのはその構えが一番集中できるからだ。

翔護 「まずはエリオ!!!お疲れさん!」

ゴスツ!!!

エリオ 「うっ!ゲホオ!!!」

エリオの腹に裏拳を入れて撃墜して、引き立て役になりすぐさま退散したキャラのところまで行き、

翔護 「はい御苦労さま。ぼん!」

キャラ 「キャラ!」

キャラの頭に手をポンと乗せて撃墜を意味させた。  
そして最後の一人となったのは……

翔護 「残りは……一番厄介なティアナか……」

残ったメンバーは唯一幻術が使える、なおかつ遠距離からの射撃を得意とする

ので、基本近接戦闘の翔護にとっては苦手な相手である。

翔護 「まあやることは決まっているけどね。集、中……………」

また翔護は祈る構えになった。

今の状態の翔護は、たとえ銃弾が飛んできても避けきれぬくらいに集中している。

聖拳流を使う者は皆この状態になることができるのだ。

ティア 「（あれは…………私を誘ってるのかしか？まあまずは幻術で攻めようかしら）」

ティアナの方は冷静に物事の判断ができていようので今の翔護に迂

闇に近づくといい  
事をしなかった。現に、これが正しい判断である。

翔護 「む？気配が1・・・いや3か。」

翔護の方も何かを察知したようで気配に気がついた。  
無論そのうちの二つが幻影であることに気づいているがここでカマ  
をかける事にした。

翔護 「クソ！この二人どっちが本物なんだ？！（さて、この発言  
でどう動くかな？）」

そう、あえて目の前にいる2体の幻影のどちらかを本物が見た  
いに言っつて、  
残りの観察しているであろう本物をあぶりだそうと言っつ考えた。

翔護 「はあああ！！！！消えろ！！！！」 ドガァ！！！！

そしてシナリオ通り1体の幻影を殴って消して残りが一体となった。

ティア 「チャンス！翔護さんは向こうを私だと思っている見たい  
！！」

そして翔護が残り一体の幻影に手を出した時にティアナも射撃の体制に入った。

バコン！！翔護が残った幻影を消した。

ティア 「この勝負もらった！！」      バンバンバン！！

ティアナが勝利を確信して放った弾丸は結果的には翔護には当たらなかった。

見事に翔護の読み通りにティアナが攻撃してしまったからだ。

これによりティアナの現在位置が翔護に知られた。

ティア 「え？！まさか、これも計算？？！！」「そうだよ・・・」  
「！！！！！！？？」

突如自分の耳元から声が聞こえたので即座に振り返ったがもう遅かった。

翔護 「ポン！ はい、これで全員撃墜確認！！今日の模擬戦は俺の勝ちって事で。」

キヤロと同じく頭に手をおいて撃墜させた。  
これにより翔護の勝ちとなった。

ティア 「結局私は才能ないのかな……」

ティアナが自分があぶりだされた事を知り自暴自棄になりかけていた。  
しかし、そんなティアナを翔護はこう判断した。

翔護 「いや、正直言って君はかなり優秀な指揮官の才能がある。  
エリオの幻術はまさにその良い例だ。相手の盲点を突いてそこを見  
事に攻める。」

あの時は本当にやばいと思ったよ。だから、自信を持っていいよ。」

翔護は学校の先生の経験を生かしてやさしく論するようにティアナ  
に言い聞かせた。

それを聞いてティアナもなんだか少し自信が出たみたいだ。

ティア 「ありがとうございます！！なんだかやる気が出てきまし  
た。」

と、そこへ撃墜組みが来た。

スバル 「ティイイイア~~~~~おつかね~~~~~!!!!」

エリオ 「おしかったですねティアナさん!!」

キャロ 「次はもっと頑張りましょう!!」

ティア 「ありがと!つてか、バカスバルはもう少し頑張りなさいよ!!」

スバル 「うわあ〜ごめんティア〜」

ティア 「少しは反省しなさいよ!!このバカスバル!!」

翔護 「はいはい喧嘩はそこまでにしてお昼にでm・・・」ロス  
トギアと思われるものを  
発見!直ちに出勤して下さい!!」つとどうやらお昼はまだ先みたい  
だな。

さあ皆初出陣だ!気引き締めて行くぞ!!」

全 「了解!!」

ספרי תנאים ומוסדות

ヴァイス 「しっかし旦那、訓練後とはまた災難ですね」

翔護 「仕方ないよ、運がわるかったんだ。」

この翔護の事を旦那と呼ぶのは機動六課のヘリのパイロットであるヴァイス・グランセニツクである。なんだかんだで翔護とは気が合いいつも仲が良いように話をしている。

なのは 「皆！今日が初めてだからって緊張しないでね！大丈夫訓練通りにやれば問題ないよ！」

ヘリでガチガチに緊張しているFW達になのはが和らげる感じで話しかけた。

フェイト 「いざとなったら私たち隊長達に色々聞いてね。間違っ

ても無茶をしちゃだめだよ？」

フェイトも皆が心配で仕方がないようだ。

ヴァイス 「みなさん！ポイントに着きました！降下準備を！」

そして、ヘリのハッチが開き皆が下りて行った。

だが、

ヴァイス 「って、なんで旦那下りないんですか？！皆行っちゃいましたよ？」

ただ一人翔護だけは下りてはいなかった。

翔護 「この戦闘・・・たぶん仕組まれてるな。俺たちの戦力の様子見だろ。」

そこに俺が出ても仕方ないしなによりこれ以上は過剰戦力だろ。」

たしかに既にメンバー的には最善を尽くせるような人たちがわんさか出動しているのにここで

最後の隊長である翔護が出るのは過剰だ。おまけに周りからは翔護は魔法が使えないと思われるからイレギュラーな事が出来ない。

なので、ここで神力を使うわけにもいかない。

翔護 「とりあえず今日の俺は待機かな？ヴァイス、皆にそう伝えておいてくれ。」

ヴァイス 「わかりました！」

こうして初出陣は翔護無しで幕が下りた。

とある研究所

暗い研究室の様な場所でモニターに映る六課とガジェットとの戦いを眺める人物がいた。

「む？どつやら向こうには鋭い奴がいるみたいだねえ」

????2 「ドクターどうかなされたのですか？」

このドクターと呼ばれた男は広域次元犯罪者ジェイル・スカリエツ  
ティである。

戦闘機人の基礎理論などを完成させた男だ。

ジェイル 「おやウーノかい？そうだ、君は今回の戦闘についてど  
う思う？」

ウーノ 「私は別にこれと言ってあまり変わった所が無いとおもっ  
のですが……」

ジェイルの質問にこれと言ってあまり変わった所が無いので困って  
いると、

質問した本人から答えを言いだした。

ジェイル 「クックク！実は！今回の戦闘に敢えて加わらなかった奴がいるのだよ！！」  
そいつはどうかやら誰かが戦力を様子見していると気付いたらしくてね？  
わざと待機していたのさ！」

ウーノ 「それはつまりドクターの意図がバレていたと？だとしたら誰なんですか？その人は？」

ウーノが分からなくなりつい質問してしまった。

ジェイル 「今管理局にスパイに行っているドゥーエがいるだろう？彼女からのデータによればその人物の名は風切 翔護だそうだ。リンカーコアなしで階級がなんと少将！いったいどれだけすごいのだろうね！？」

少し興奮気味に翔護の事を話すジェイルの若干引き気味のウーノ

ウーノ 「では、今後その人物をマークしますか？」

ウーノの質問にジェイルは

ジェイル 「いやいい。リンカーコアが無いのであればそんなに大した事はできないだろう。」

といた。

後にこの回答が自分を苦しめるとは夢にも思わないジェイルだった。

§  
E  
N  
D  
§

第12話 初出陣ただし主役は待機（後書き）

スカさん登場！！

主人公は待機という状態です。はい。

第13話 男なら海に出る！（前書き）

すみません久々こうしんです。

これでまたしばらくは無理です。

もしかしたら次回からは一気に話が飛ぶかもしれません。

第13話 男なら海に出る！

くフエイトsideく

この前のリニアール事件から数日が過ぎた。

FW達のデバイスもあれ以来新しくなり皆いちだんとヤル気が上がっている。

エリオとキャロもなんかうれしそうだったなあ。

あ、そういえば今日はエリオと翔護さんは休暇がでるんだっけ？

なんでこの二人なんだろ？必然的に二人でお出かけだよな？

いいなあ〜私も翔護さんと出かけたい……………// // // //

なのは 「どうしたのフェイトちゃん？さっきからボーっとして？」

隣で一緒に歩いていたなのはが心配そうに見てきた。

いけないいけない私ったらつい考えごとで頭がいっぱいだった。

フェイト 「大丈夫だよなのは。心配しないで！」

私は別段気分が悪かったわけでもないので元気に振る舞った。

なのは 「そっか。なら食堂に行こうよ」

こうして私たちは食堂に向かった。

それにしてもエリオ翔護さんと一緒にいいなあ

私もいつか翔護さんと一緒に……

くフエイトside outく

3日前の事

（翔護side）

翔護 「エリオって休みの日って普段なにしてるんだ？」

俺は何気ない感じで訓練が終わった後エリオに聞いてみた。

エリオ 「僕ですか？そうですねまあ自主練ですかね？」

正直俺の中の感想が「この子本当にまだ10歳そこらの子供？」って感じた。

だって普通はないでしょ、俺がこのころだとそうだな・・・海にでも遊びに行ってたかな。

翔護 「エリオはそれで楽しいのか？」

エリオ 「まあ楽しくはないですけど、自分のためにもなりますし。」

こんな十代じゃだめだな。俺の十代は少なくともカチコミに行ったりしてたし  
これじゃ詰まらないだろ。  
そう思った俺はエリオを連れ出すことにした。

翔護 「おっし！エリオ、明後日俺と遊びに行くぞ！」

エリオ 「え！で、つでもデスクワークが・・・」「ここに少将権限を発動する！！」「・・・はい。」

つと、こんな感じで半ば無理やりエリオを連れ出すことにした。

くそして現在く

はやてに少しばかりでは無く、だいぶ怒られたが（なんでも……いきなり休暇それも二人分よこせなんてアホか！！??）まあ大丈夫だろう。

今現在俺はエリオと一緒に自宅にいる。

エリオ 「翔護さん、今日は出かけるのにどうして家にいるんですか？」

ははん、それは良い質問だな。

翔護 「エリオ、海に行った事あるか？」

エリオ 「海……ですか？ないです。」

これはナイスチャンスだ！

翔護 「それじゃ俺がとっておきの穴場スポットのところに連れて  
ってやるよ。」

そういつて俺はあらかじめ買っておいたエリオ様の水着を渡して俺  
も準備を始めた。

エリオ 「わあすごいちゃんと僕のサイズに合ってます！」

翔護 「ちゃんと考えて買ったからね。」

エリオ 「あれ？でもどうやって海に行くんですか？ここ翔護さんの家ですよ？」

翔護 「エリオ、俺のレアスキルを忘れたか？俺は扉さえあれば何処でもいけるんだよ。」

そう、俺のボスから貰ったこの力があれば違う世界にも行けちゃうのだ。

エリオ 「ああ、そうでしたね！それと、その抱えている物ってサーフボードですか？」

エリオの疑問通り俺は今物置から持ってきたサーフボードを抱えている。  
前いた零法町でも結構やっていて、地元のサーファー達と仲良く波に乗って遊んでいた。

翔護 「よくわかったな、慣れるとたのしいぞ！今度エリオもやってみるか？」

エリオ 「良いんですか！？是非やらせて下さい！」

エリオもノリノリだ。

べつやらこの手の遊びは嫌いじゃないらしい。

翔護 「よし！そうと決まれば行くか！アギト！フェンリル！行くぞ！」

アギト 「おう！久々に泳ぐぞ」

フェンリル 「わんわん！」

すでにアウトフレームになり水着に着替えたアギトと、真っ黒のフェンリルを連れていく。

そして俺は玄関の扉を開いた《……》そして俺たちは古びた小屋の扉からでる。

すると目の前には……

エリオ 「うわあ〜！綺麗な海ですね！！白い砂浜に透明で蒼い色  
！！」

翔護 「そうだろ美しいだろ！、そしてようこそ第178管理外世  
界通称”幻想の海”へ」

ここの海は管理外世界でなおかつ人口が約100人しかない。

俺は偶然この世界に来た時にここの長と仲良くなりいつでも来ていいという事になった。

そしてこの海自体殆ど人が来ないからほぼプライベートビーチ感覚である。

翔護 「おっしゃー！皆いっぱい遊びまくれ！」

俺がそう言つと皆一斉に走り出した。

皆久々の海だから俺も楽しくて仕方が無い。

さてと、この楽しい機会にあいつらも呼ぶか。  
そして俺は皆から少し離れたところでフェンリル以外の仲間を召喚する事にした。

翔護 「我が身を護りし神聖なる者たちよ、契約の名のもとにここに姿を現したまえ。  
出でよ！トルム、雅<sup>ミヤビ</sup>！」

すると、翔護の目の前に二つの光が現れて、光が消えた後には2人の男女がいた。

トルム 「おお！翔護殿久しいな！ん？ここは……海ですか。」

いつも通りのトルムしかし、今回は水着を着用している。ここに来る時に

召換ルートで水着を装着するように念じたのだ。

同じくして雅の方は……スタイルが良く、出るところは出て、へこむところはへこんでいる。おまけに、水着が純白のビキニ。

とりあえずほぼ無人世界で良かった。

そして……

雅 「やっほー！翔護お〜 おっひさー！」

この元気がいっぱいなところ。これでも守護獣だけどね。  
まあこの元気が3人と仲良くやっていけるところだと思っけど。

翔護 「雅ひさしぶりだけど相変わらずだな。まあ今回は休暇だから各々羽目はずして来い！」

トルム 「御意。では主、そして雅よ私は少し5キロ先まで泳いでくる。」

雅 「りょうかいました！守護獣雅！精一杯あそんできまあーす

「!!」

こうして二人が走って海に行った。

ああああトルムの奴どうしてバタフライで行くのだから。

雅は雅でエリオをからかっているし、エリオはいきなり現れた女性の目のやり場に困っているし。

ここは助けてやるか。

翔護 「おいエリオ、今からサーフィンやるんだけど、お前も一緒に来るか？」

エリオ 「良いんですか!?!それじゃお言葉に甘えて行かせていた

できます！

すみません雅さんそういう事なので失礼します！」

雅 「ああ翔護！いま私が遊んでたんだよ！勝手に連れてかないでよ〜ぶう！ぶう！」

翔護 「あはは！悪い悪い。まあそういう事だから、フェンリル達と遊んでろ。

いくぞエリオ！」

こうして俺とエリオは波のあるところに向かった。

「The 波!!!」

エリオ 「そういえば翔護さん水着ですけど、普通ウェットスーツを着るんじゃないんですか？」

そう、エリオの言うとおり俺はいま赤くて英語のデザインが入ったロングトランクス型の水着とボードだけである。

翔護 「まあ普通はね？けどこれが俺流スタイルだからいいんだよ。それより行こうか。」

さあエリオ俺の背中に掴まれ」

俺はエリオが背中につかまったのを確認するとボードに  
乗りそのまま波の場所まで向かった。

しばらく経つと、遠くの方から大きな波が来た。俗に言うビックウ  
エーブだ！

エリオ 「翔護さん！あれはマズイですよ！」

翔護 「いや、あれに乗るぞ！しっかり掴まってる！」

そして俺はその波に向かって行った。

ザザザザザ！

エリオ 「うわあああ！飲み込まれるうっうっうっ！」

翔護 「よし！今だ！乗るぞ！！！」

そして次の瞬間、俺たちは見事に乗ることができた。

翔護 「ほらエリオ、目を開けてみる面白いぞ」

俺は背中のエリオをボードの先端付近に降ろして支えている。  
そして、エリオもようやく瞑っていた目を開いた。

エリオ 「うわあ〜!!すごい、すごい景色ですよ翔護さん!」

翔護 「そうだろ?俺もこの景色好きなんだよな〜なによりこの爽快感!たまらない!」

ザッブーン!

そして俺たちは岸に流れ着いた。

エリオ 「あはは！…！翔護さん！もう一回、もう一回やりましょー  
！」

どうやらエリオは相当気に入ったらしい。

翔護 「はは、仕方ないな〜それじゃもう一回だぞ！」

つとまたボードに乗り波がある場所まで向かった。

その回数50回……

夕暮れ

日がだいぶ沈んできて、太陽の光が海に照らされている。  
その姿はまさに幻想的だった。

雅 「ああー楽しかったあー もう大満足！」

雅はどうやら心行くまで楽しんだらしい。見たらそこらじゅう砂まみれで  
この世界の貝でアクセサリーを作ったらしい。手には綺麗な貝殻のブローチがある。

アギト 「あたしも久々に泳いで満足満足！ありがと兄貴！」

そう言って小さくなったアギトが俺の肩に座る。

まあこの世界は本当にきれいだから羽伸ばしには最適だね。

フェンリル 「わお〜ん」

フェンリルも満足そうに鳴くと俺の頭の上に乗って寝息を立てた。

翔護 「ありやりやそんなに遊んだのか。おつかれさま」

俺はそっと頭を撫でてあげた。

エリオ 「翔護さん今日は本当にありがとうございました！僕初めてです、  
誰かにどっか遊びに連れて行ってもらったの。だからすごくうれしかったです！！」

エリオもすごくうれしそうだ。まあ明日からは忙しいけど。

翔護 「そうか喜んでくれたなら満足だよ。あ、そうだ今度サーフインの練習でもやる？  
俺のお古で良ければボードあげるよ？」

俺が何気ない感じで聞くと、スバルのように目を輝かせて

エリオ 「え！いいんですか？じゃあお言葉に甘えてお願いします！僕にもサーフィンを教えてください！」

どうやら今日の事ですっかり虜になってしまったらしい。  
エリオも男の子ってことか。

翔護 「ああ俺でよければ教えるぞ。ところで、トルムの奴何処に行っただ？」

エリオとの会話の途中で気がついたが、トルムの姿が見当たらない。  
どっかで迷子にでもなったか？そんな心配をしていると、

トルム 「ぜえはあ、ぜえはあ、間違えて100キロ先まで泳いで  
しまった……  
往復200キロはさすがにきつい……」

あれ、こいつって天然だったっけ？それともただのバカ？  
なんだか自分の守護獣が悲しくなってきた。

翔護 「トルム……もついい。何も言つな。とりあえず皆帰るぞ。」

皆 「」「」「」「はい……おう、御意」「」「」「」

そして俺たちは小屋の扉から風切邸へと帰還した。

（翔護side out）

（その頃六課部隊長室）

はやて「やってもやっても仕事が終わらん！もう！エリオと翔護さんずるいで

休み取るなんて！」

はやては翔護の休みを取るために普段より少し多い量の仕事をして  
いた。

リン 「まあまあはやてちゃん、これもエリオのためですがんば  
るです！」

ピッー！ピッー！

リンが励ましているときに部長長に向けて一通のメールが来た。

はやて 「なんやこれ？だからやる……」

画像が添付されていてそれを開くと……

はやて 「ほあ・・・仕事サボってサーフィンかいな・・・これは少し

O H A N A S I しないとあかなあ・・・」

と黒い笑みを見せるはやて。っとそこにリインが

リイン 「でも、エリオすっごい笑ってます！！なんか楽しそうです」

その画像にはサーフィンで波に乗っていて楽しそうに笑う翔護と、

それ以上に笑顔を見せている翔護の姿があった。

はやて 「まあ今回は多めに見とるか。……………っつて、  
誰がこれ撮影したんや!？」

ちなみに撮影者は雅だ。

〈六課 side out〉

（後日）

エリオ 「おはようございます！」

朝訓練でエリオが仲間と隊長に挨拶をする。

皆挨拶をした本人の方を向くと、一斉に言葉を発した。

全 「「「「「「「「エリオ(君)黒!」「」「」「」

そう前日の海のせいでエリオは日焼けをしていた。  
それもいい感じの真夏男くらいに。

エリオ 「え?そんなに黒いですか?」

ティアナ 「ええもうまっくろよ」

スバル 「昨日どこいったの?」

キャロ 「楽しかった?」

フェイト 「海いったんだ……」

なのは 「翔護さんはしゃきすぎだよー」

つとそこに遅れてエリオを連れ出した張本人が来た。

翔護 「すまんすまん！遅れた！」

翔護が皆に謝罪すると皆の反応がまたしても

全 「 「 「 「 「 翔護さんも黒！ 「 「 「 「 「

という感じになった。

ティアナ 「昨日絶対海にいつてましたよね?!」

スバル 「いいないいな！私も行きたい！」

キャラ 「エリオ君いいなあ〜」

フェイト 「翔護さんに私の水着が見られる／／／／／／／／／／」

なのは 「一日中いたんだ・・・」

結局その日の朝訓練は翔護達のお土産話になった。

〜後日談end〜

### 第13話 男なら海に出る！（後書き）

うっう 今回戦闘描写なくてよかった。

戦闘は苦手です。なので下手でも眼をつぶってやっつけて下さい。

そして今回最後の守護獣登場です。

名前はミヤビさん！元氣いっぱいですので温かく見守ってください。

第14話 行くぜ！海鳴市！！前篇（前書き）

すみませんすみませんすみません！

ほんっっっっっっっっっっとうにすみませんっしたあああああ  
あああ！！

なかなか更新できなくて自分が憎い

第14話 行くぜ！海鳴市！！前篇

（side）

今ミーティングルームに六課の全戦力が集まっていた。  
これから行われる任務の説明のためにはやてが呼んだのである。

はやて 「ほな、これから任務についての説明をするで！！」

なのは 「ど、どじしたのはやてちゃん・・・？？」

フェイト 「さっきから無駄にテンションが高くないかな？」

そう、今回のはやては、部屋に入って来た時からるん るん 気分  
の感じで、

もうスキップをしてきたくらいテンションが高い なのである。

はやて 「まあまあ、きつとなのはちゃんも、フエイトちゃんも  
うちの気持ちはそのうち分かるから！」

と言っではやてはモニターの電源をつけて、皆に任務の説明をした。

はやて 「オホン！ええ今回は聖王教会から直々に依頼が来ました。  
なんでもとある場所にロストギアがあるというお話で、それを我々  
機動六課が回収する事になりました！」

一同がへえ〜という感想の中、ヴィータは

ヴィータ 「なんだよそれ！あたしたちは便利屋じゃねえぞー！！」

と、まさに堪忍袋の尾が切れそうだった。

シグナム 「おちつけヴィータ！！お前がそんなでどうする！！」

それをシグナムがたしなめるといふナイス連係プレーも発生した。

翔護 「しっかし、六課の全戦力を連れていくっていったい何処にいくんだ？」

痺れを切らした翔護がはやてに場所の説明を要求した。

はやて 「ふっふっん！それがなんと、海鳴市にあるんや！！……ど  
や、  
なのはちゃん、フェイトちゃんうれしいやろお！？」

なのは 「ほ、本当なの？！」

フエイト 「本当にはやて?!」

二人とも久々に自分の故郷の話題が出てうれしそうだ。  
尚且つ、今回は帰省もできるといふ豪華特典つきである。

翔護 「で、出発は？」

翔護はどうやらこの話をなるべく早く終わらせたいらしく、急いでいる。

実はこの時翔護は前の日に食べた大量のアイスによりお腹が弱いのですぐさま

トイレに行きたくて仕方が無いのだ。

はやて 「そんな急かさんといてな翔護さん、まあ出発は明日や!  
!!

各自準備しておくように!」



昨日と同じ場所には準備が終わったメンバーがいた。

なのは 「本当に久しぶりに帰るよぉ〜アリサちゃん達元気かな？」

フェイト 「私もはやくアルフ達に会いたいな。」

ライトニングとスターズの隊長はどうやら本当につれしらしく、  
実は皆がもうこの場には気づいていなかった。

はやて 「その二人！浮かれるのはええけど、もう行くでえ！！」

痺れを切らしたはやてが二人を急かす。

なのは 「ああ待って!!」

フェイト 「置いて行かないで！」

慌てて二人もやって来た。

翔護 「ったく、隊長がそんなでどうするんだ、もっとしっかりしなきゃ……」

翔護が呆れた様子で二人に言う。 実際昨日の翔護の方が隊長としてどうかと思うが…

なのは 「あはは、すみません」

フエイト 「うう、以後気をつけます・・・」

こうして二人を乗せて皆乗った。

車内にて、ティアナがふとぶつぶつ言っている。

ティア 「文化レベルB?!魔法が存在しない世界。。。。  
そんなところからこの3人が来てるなんて、どうなってんのよ・・・」

どうやら地球の資料を読み漁っていたらしい。

なのは 「まあ私は突然変異みたいなものかな？」

つとティアナの背後辺りから突如としてなのはが顔をヒョイっただした。

ティア 「!!!????っし、失礼しました!!」

ティアナは驚いてついつい敬礼してしまった。

はやて 「別に謝ることもあらへんよ。実際につち等は異常なんや」

そこにはやてとフェイトも加わり自分たちの話をする。

フェイト 「そういえば、翔護さんって名前を聞いた感じ私たちと同じ地球出身かな？」

フェイトの疑問にはやては翔護の事を知っているため、答えるべき

か悩んだ。

でも、本人が今ここにいないので言うべきではないと判断した。

はやて 「たぶん同じやと思うんよ。あ、ホラ！見えてきたでえ！」

急な話題転換に少し違和感を覚えるフェイト

フェイト 「(はやて、なにか私たちに隠している気がする……」

そんなフェイトの考えを無視しつつ、一行は海鳴市に到着した。

そして初めてミッドから離れ、地球に来たエリオ達は感想を述べた。

エリオ 「ミッドとあまり変わらないですね」

ティアナ 「あ、車が走ってる!!」

翔護 「ティアナいくらなんでも地球はそこまで発達してないわけじゃないぞ!!」

スバル 「へえ〜ここがご先祖様がいた世界か……」

キャロ 「緑が豊かだねフリード!」

フリード 「キュクル〜」

ここで、リインが先にアウトフレームモードになっていたので翔護

もポケットの中の  
アギトを呼び出してアウトフレームにした。

翔護 「アギト！もういいぞー！」

アギト 「了解！」

パア！！光に包まれると、アギトもエリオ達くらいの大きさになった。

そして皆がしばらく観光気分で目的の場所まで歩いて行くと、  
だんと

目の前には立派な家が見えてきて、そこに仁王立ちしている女性と、  
おしとやかで物静かなそうな女性がいた。

なのは 「あ、アリサちゃん！すずかちゃんも一緒だー！」

アリサ 「ちょっと！遅かったじゃないのよ！連絡くらい寄こしなさいよ」

なのは 「にははは……すっかり忘れてた。」

フェイト 「本当に久しぶりだね二人とも！元気してた？」

アリサ 「当り前よ！私たちが元気じゃないなんてありえないわね」

すずか 「アリサちゃんそれは言いすぎだよ……」

はやて 「すずかちゃん久しぶりやなあ、元気しとった？」

すずか 「はやてちゃん！アリサちゃんと同じく元気だったよ。」

突如現れた謎の美少女二人についていけない翔護 + FWメンバー  
そこにそのメンバーを疑問に思ったアリサがなのはに聞く

アリサ 「ちょっとなのは！いいかげんにそこにいる人たちに紹介  
しなさいよ！」

なのは 「忘れてた！皆ここにいるアリサちゃんは今回私たちに口  
ストギア

確保までの拠点を貸してくれる人だよ！それでその隣の子がずずか  
ちゃん！

二人ともすつごく良い人だから安心してね！」

そしてこの後一通り皆の自己紹介が終わった後で各自自由な時間と  
なった。

翔護も数年前にこの町に来た時にお世話になった所に行くことにし  
た。

翔護 「さて、俺も出かけるかな！」



なのはも苦笑いがうかぶ

なのは 「にやはは……それより、それなら一緒に行きませんか？」

翔護 「それもそうだな。アギトも丁度リン達と遊んでいることだし行くか。」

そう言っつて二人は翠屋に向かって行った。

その光景をフェイトが嫉妬深そうな目で見ていたことはここだけの話

）  
翔護  
side  
）

）  
side  
out  
）

カランカラン！

士郎 「いらっしゃいっと、おや珍しいお客さんだね」

俺たちが翠屋に入るとマスターの士郎さんがグラスを拭きながら迎えてくれた。

翔護 「士郎さんお久しぶりです、相変わらず元気そうですね」

なのは 「お父さんただいま、あれ、お母さんは？」

士郎 「桃子なら今厨房で残りの仕事を終わらせてるよ。いや本当

久しぶり

だね翔護君。だいたい4年ぶり？くらいか」

翔護 「もうそんなに立つんですか……あの時は本当にすいませんでした。」

士郎 「いやいや気にしなくていいさ。僕もたのしい経験ができたしね。」

翔護と士郎が4年前の事について話していると店の奥から人数分の紅茶を持った

桃子がやって来た。

桃子 「あら！なのはお帰り、そして翔護君ひさしぶり」

翔護 「おひさしぶりです。桃子さんもお元気そうですねによりです。」

なのは 「ちようどお店も休憩の時間だしすこし話そうよ！」

士郎 「そうだなせっかくの愛娘の帰宅と婿も居ることだし。」

つとここで士郎が何を勘違いしたのか翔護の事を4年前の一件で完璧になのはの夫と認識して変な話を始めた。

これに赤面したなのはがたまらず士郎に反論した

なのは 「ちよ、ちよっとお父さん！もう、そう言う話はやめてよ  
お！」

翔護 「そうですよ士郎さん、なのはにはユーノって言う立派な  
彼氏が居るんですから。」

翔護もちやっかりなのははいじりをしている。

その様子を微笑ましそうに桃子が眺めておりこの場にはなのはの味方は存在しない。

なのは 「翔護さんも！ってユーノくんのこと知ってるんですか！？」

翔護 「うん、無限書庫の人でしょ？何度か会ったことあるよ。これでも少将だからそう言ったところにはよく行くんだよ。」

士郎 「あ、そうだ翔護くん、良かったらまた道場で一本どうだい？」

ここで士郎さんから「一本いつとく？」見たいなノリで模擬戦を申し込まれた。  
うーん。俺としても久々に骨のある人との戦いは良いけどいかんせん時間が無いからな」

翔護 「すいません、今日は挨拶だけで結構時間も押しているので  
また今度で  
お願いします。」

すると士郎さんも渋々といった感じでそうかと頷いた。

士郎 「まあでも、暇な時にはいつでも来ていいからね。僕たちは  
いつでも歓迎するよ。」

桃子 「そうよ翔護くん、一応デザートには自信があるから食べに  
いらっしやい！」

4年前と変わらず優しいこの二人に俺はつついっつうれしく思っ  
てしまっ。

本当に偶然でもこの世界に来ることができてよかった。

翔護 「是非そうさせてもらいます。あ、紅茶おかわり願  
いしまっ。

そして俺たちはしばらくなんの変哲もない世間話をした。  
しばらくたった後、時間も丁度よくなり、夕方くらいになっ

なのは 「それじゃ行くね！また今度暇な時には帰っ  
てくるから！」

翔護 「お世話になりました！」

こうして二人は戻って行った。これから始まる戦いがあるとも知らず……

（翔護 side out）

第14話 行くぜ！海鳴市！！前篇（後書き）

はいいただきました地元バージョン。

いやね、アギトは空気じゃありませんよ？

問題はこのあとなんですけどね……

さあお便りでソラト様！度重なる感想をありがとうございます！

誤字脱字などがありましたらご報告下さい。

第15話 行くぜ！海鳴市！！後篇（前書き）

やばい………内容に行き詰ってきている。

どうやって書けばいいのか。

誰かアドバイスお願いします！

第15話 行くぜ！海鳴市！！後篇

Side

翔護達が戻ってきて今後について話しているうちにもう  
晩御飯の時間になった。今回は地元の方々の協力によりバーベキュー  
をする事に決定した。そう、決定してしまったのだ……

390

シグナム 「ヴィータ……今回はすんなりと肉が食えると思う  
なよ？」

挑発的にヴィータを誘うシグナム。  
それに対抗するかの如くヴィータが牙を光らせる

ヴィータ 「っは！上等だ！この鉄槌の騎士の名に懸けてこの肉貰うぞー！」

シグナム 「私はもう警告したぞ……今後貴様の肉がどうなるかと私は知らない。」

そうシグナムが呟き肉を焼き始めた。ヴィータもそれに頷くように自分の肉を焼き始めた。

翔護 「なんかあの二人纏っている空気が全然違っぞ。少なくともバーベキューの雰囲気ではないな。あれは……言っならば戦いだ。」

その言葉にヴィータとシグナムを除く一同が頷く。

フェイト 「みんなこっちも焼き始めよ！」

なのは 「そっすだよ早くしないとあの二人に全部食べられちゃうよ？」

皆を急かすようになのはが一言付け足す。

スバル 「大変だよそれは！エリオ！急いで焼こう！」

エリオ 「はい！スバルさん！」

それに促されるように肉をこれでもか！っと言っくくらい焼く二人。それを見てティアナは呆れていて、キャラは苦笑いだった。

〈数分後〉

皆が焼いていた肉はほとんどが焼けていた。

こちらの至って普通の方は

翔護 「ほらアギト焼けたよ、今皿にのせるよ」

アギト 「サンキュー兄貴！ モグモグうまいぜ！！」

フェイト 「ほらエリオ、キャラコのお肉はもう食べても平気だよ」

エリオ 「はひふぁとづごひゃいまふ」  
（まだ大量の肉が口に入っている。）

キャロ 「はい！いただきます」

一方こちらは……

シグナム 「ヴィータ、あの肉は私が育てていた肉だったんだぞ。それをなぜ……貴様が食べるのだ？」

ヴィータ 「ッへん！はやく喰わねえ奴が悪いんだよ！そら！もう一枚！」

シグナム 「っな！貴っ様あああああ！もう許さん！こっ

ちに来て！」

ヴィータ 「上等だ！あたしもそんな気分だったぜ！」

森の方に歩いて行こうとしている二人をはやてが止めにかかった。

はやて 「二人とももうちょい仲良くできんの？！肉くらいで  
デバイスはだめやる！」

シグナム 「しかし主はやて、これは私の肉の甲い合戦でもあるの  
です！」

ヴィータ 「……………なにが甲いだよ……………もう死んでんじゃん  
(ボソツ)」

シグナム 「っ！貴様、何か言ったか？」

ヴィータ 「さあねえ？空耳じゃねえの？」

ひとたび口を開けばこの様である。  
痺れを切らしたはやてが二人にある物を差し出した。

はやて 「分かった。どうしても戦うっていうんなら、  
これ食べてからにせえや。」

そう言つて二人に青っぽい色のピンクの何かを差し出した。

シグナム 「主……これはなんです？……！！まさかっ！  
？」

ヴィータ 「シャルの……料理……」

今二人の目の前にあるのは、あの有名なシャルが

作ったと噂される伝説の料理だ。過去に何人もの人をその味に魅了させ、  
気絶や病院送りにしたことで有名である。

はやて 「さあ？お食べ」

シグナム・ヴィータ 「うわあああああ！！！！」

その後二人はしばらく起きなかった。  
その光景を見てシヤマルは一人いじけていた。

なのは 「皆食べ終わった事だし、あそこに行かないかな？」

アリス 「ええ確かにこの大人数だとあそこしかないわね。」

すずか 「そうだねやっぱり盛り上がりません！」

はやて 「はあ！たのしみやわ！これでシグナムやフェイトちゃん達を……ぐふふふ！」

フェイト 「なにか今とてつもない寒気に襲われたんだけど……」

シグナム 「テストロッサもか。私もだ。」

先ほどから狙ってやっているとは思えない分かる人にはわかるつとという会話しかしていないなのは達にとつとつ痺れを切らした翔護が聞いた。

翔護 「なあさつきから何を話しているんだ？俺たちは全然わから

ないぞ」

F W 「「「「うんうん!」」」」

なのは 「そうでしたね、今から行く場所は銭湯ですよ。」

翔護 「海鳴にあるのかそんなレトロなものが?」

なのは 「ちゃんとありますよ。結構良い場所ですから行きまじょう」

エリオ 「翔護さん、せんとつつてなんですか?」

今この場にはミッド出身者が4人は居るため皆”銭湯”がなんだか分からない様子である。

そこで翔護が説明に入る。

翔護 「銭湯って言うのは、まあ言えばでっかいお風呂かなあ」

スバル 「なんだか楽しそうですね！！速く行きましょうよ！！」

はやて 「よっしゃ！そうと決まれば早速出発や！！」

” 〽 銭湯 〽 ”

入口にて人数分の金額を払い終わった後に男湯に向かう  
エリオに向かってキヤロが死刑宣告をだした。

キヤロ 「エリオ君一緒に入る！」

当然のごとくこれに首を一心不乱に横に振るエリオ  
いくらまだ幼くても女湯は恥ずかしい。

エリオ 「ええっ！？だめだよそんなの。それに僕男の子だし！  
(本当は男の娘って書きたかった。)

キャラロ 「そういつと思った あちらをご覧くださーい」

キャラロが指さす方向を見るとそこには、

”11歳以下は同伴OK！良い思い出をどうぞー！”といった張り紙があつた。

キャラロ 「ふふふ・・・エリオ君10歳！！・・・復唱要求だ！この銭湯において、10歳児が女湯に入つてはいけないという道理は無い！！」

キャラロがエリオを追い詰めていくがここは男エリオふんばる。

エリオ 「で、でも、ティアナさんやスバルさん達は嫌ですよね！！？」

しかし、無情にもこの二人にそんなちやちな言葉は聞かなかった。

ティアナ 「え？私は別に構わないわよ？」

スバル 「私もいいよ！てか、前から頭洗いたって行ってたじゃん！」

エリオ 「ま、まさか……この僕が、負け……る？」

エリオがこの世の終わりといった感じで顔面蒼白になっているところに救世主が現れた。

翔護 「お、エリオ！俺と一緒に風呂いかない？」

そう、我らが翔護がこの場を一気に変革へと導いた。

エリオ 「ああ！翔護さん、そのお言葉を待っておりました！さあ行きましょう！男湯へ！」

エリオが翔護の背中をぐいぐい押して男湯に向かう。  
それと同時に翔護の背中にはいつの間にか女子軍に参加した  
フェイトとキヤロの五寸釘の様な視線が奥深くまで刺さっていた。

フェイト 「はあ、結局二人ともいつちゃったか。皆、私たちもいこう？」

スバル 「ですね。行きましようか。」

こうしてフェイト達もお風呂に向かうが、その場に一人キャラが残  
り、  
さっきの張り紙を注意深く見ている。

キャラ 「11歳以下は同伴OK・・・なら逆もまた然りってこと  
かな？」

そしてキャラは勢いよく男湯に向かって歩みを進めた。

着脱室にて

エリオと翔護ははた目から見たら親子のようにはしゃぎながら  
服を脱いでいる。

そしていざ二人して風呂に入ろうとした時にエリオは自分の隣に  
翔護とは違った人が仁王立ちしていることに気がついた。

エリオ 「ってキャラ？！…！どうしてここにいるの、ここ男湯だよ  
！！」

キャラ 「えへへエリオ君、私も10歳だからこっちに来てもいい  
んだよ？」

その言葉を聞き注意書きを思い出して顔を真っ赤にするエリオ。  
どうやら事態の收拾はできたようである。

406

翔護 「はあ、まあこうなったのは仕方が無いけど、二人ともお風  
呂ではあまり  
騒がずに過ごすんだよ？のぼせそうだったら無理せず上がること。  
いいね？」

エリオ 「はい・・・わかりました。」

キャロ 「はい！約束します！」

翔護 「うん！よろしい。それじゃ行こっか！」

そのあとはもう色々だった。

温泉に浸かり和んでいるエリオにキャロが露天風呂にいこ！と誘っていたら、途中から女湯にさらわれるという事が発生した。

翔護 「はあ、あの二人は元気だな・・・こんなにゆっくり風呂に浸かるのも久しぶりだなあ。向こうでは良くライトや早坂兄弟と風呂に入ったなあ」

翔護は昔の事を思い出していた。

雷神のライトや早坂兄弟との修行生活などの事を。

零法町での思い出に浸っていると突如言いようのない感覚が翔護の頭を襲った。

翔護 「あの頃は楽しかった……ッ!!この感じ、何かあるのか!!」

翔護は神の力があるおかげで魔力が無くてもある程度のロストギアなら反応が  
感覚的に分かるのだ。

そして急いで風呂からあがりロビーに向かってもう皆が準備していた。

翔護 「ごめんね!少し遅れた!」

フェイト 「大丈夫です私たちも今来たところですから。」

事実フェイト達も急いで来たせいでまだ髪が湿っぽい。

翔護 「そうか、なら急いで行ってちゃっっちゃと終わらせよう!」

全 「」「」「」おう!」(です!」「」「」

現場に到着した翔護達は目の前に状況に困惑した。

翔護 「なあはやて、こいつら倒した後って仲間になりた  
そんな目でこっちを見てくるかな?」

はやて 「翔護さん今の発言は結構やばいで？」

今翔護達の目の前にいるロストギア？らしきものの形はいつならば  
・  
・  
・

ド クエのぶつちやけスライムである。

フェイト 「とりあえずこれを倒せばいいのかな？」

なのは 「そうだと思っけど、ここはFW達にやらせてみない？  
良い実践になると思うよ。」

ここでなのはが新人たちの実戦訓練という案を用いた。隊長、  
副隊長もこれに賛成して今ここに新人たちの戦いが始まった。

翔護 「無理な時は深追いするな！遠くに行ったら俺らが  
しとめるからそれまではお前らは今できる最高の戦いをして！特に  
ティアナ

は指揮官としてもっとも最適な判断を期待してるよ！」

こうして隊長達は数歩後ろにさがり見学していた。

ティア 「（指揮官として最も最適な判断……）！！そっだ！  
スバル、  
そしてエリオ！あんたらは普段通りに前衛！なるべく相手をつぶし  
に行って！」

スバル・エリオ 「了解！」

ティア 「そしてキャラ！今回は主に封印できるタイミングを  
見つけ次第即封印をお願い。それまでは味方の援護と、私の護衛を  
お願い！」

キャラ 「了解！」

こうして新人、Sの指揮官たるティアナの戦術がはじまった。

ティア 「まず二人の攻撃で何処までの戦いができるか……」

スバルの拳がスライムに直撃する。すると、その体が崩れて行って最終的には消えて無くなった。

ティア 「敵は一発で仕留められる……なら！私も参戦してなるべく早く終わらせる！あいにくこちらの知能はそこまで発達していないみたいだし！」

キャロにブーストをかけて貰い、二人の援護射撃を行うティアナ。エリオもその小さい体を生かして敵の攻撃を軽やかに避けて、強烈な突きを放つ。

新人達の善戦によりなんとか早めに封印することができた。

翔護 「すごいな！ずいぶん早かった！」

なのは 「うんうん！皆頑張ったね！スバルも足捌きとか、動き方にもだいぶムラが無くなって来てよかったよ！」

スバル 「ありがとうございます！」

フェイト 「それにティアナは結構単調だけどそれでいて、正確な指示だったよ！」

ティアナ 「そう言っていていただけるとうれいす！」

ティアナもうれしそうに少し頬を朱に染める。

翔護 「エリオも槍をうまく扱って、なにより自分が何ができるかを理解できていてよかったぞ！キャロも迅速ながら的確な支援の手際がよかった。」

エリオ・キャロ 「ありがとうございます！」

翔護 「しっかし、終わったのは良いけどさすがに今日帰るってのも結構つらいな。なあはやて、今日一泊していかないか？」

はやて 「なんやまた少将権限ですか？」

翔護 「いいや、ただのお願いだ。それでどうだ？」

はやて 「うーん、まあええですよ。」

フェイト 「やった！（これで翔護さんとお泊り／＼／＼）」

なのは 「海鳴で眠るのはひさしぶり〜」

アリサ 「それじゃあたしの家の別荘に行きましょう！」

すずか 「そうだね。皆はやく行こー！」

こうして六課メンバーはこの日アリサの別荘で一晩すごした。  
ちなみに翔護と同じ部屋がいい！っと思っていたフェイトは結局  
エリオにその権利を奪われ渋々なのは達と眠った。

（翌朝）

なのは 「それじゃもう行くね」

荷物をまとめて別荘の外にいる六課メンバー

アリサ 「病気とかには気をつけなさいよ!!」

「  
すずか 「なにかあったらいつでも来てね!! だって私たち……」

アリサ・すずか 「友達だから!!」

その言葉に目を潤わせながら返答するのは  
それに合わせるように返答するフェイト

なのは 「グス……二人ともありがとう！」

フェイト 「ありがとう！私たちも嬉しいよ！」

そしてここではやてが事態を締める

はやて 「そんじゃまあいこか!!！」

翔護 「短い間でしたがお世話になりました！」

翔護の声に合わせて皆がお辞儀をしながらお礼を言う。

全 「「「「「「「「お世話になりました!!!( )です!!(「「「「「「「

「

アリサ 「たまには連絡くらい寄こしなさいよね……………」

そして、  
たくさんの人たちに見送られて皆は転送ポイントから帰って  
行った。

第15話 行くぜ！海鳴市！！後篇（後書き）

雷神のライトについてはまた後日お話を創りますので待っていてください！

感想指摘などどしどしお待ちしております！

## 第16話 ホテルアグスタ（前書き）

やばい有言実行できなかった……

さらに、無理やり一話に収めたから長い。

相変わらずの駄文ですが、読んでやってください

## 第16話 ホテルアグスタ

（ヴァイス side）

どうも！あまり出番のなかったヴァイス・グランセニツクだぞ！

今日はこの六課のメンバーで、俺と結構仲のいい人を紹介したいと思っ！

その方は……ウイング隊長の翔護の旦那だ！

いや〜なんとというかあの人は結構歳も近い事もあって結構気が合うんだよね〜。

なにより旦那は男にも女にも優しいし、面倒見が良いから、俺が酒で酔い潰れても部屋まで連れてってくれてほんと感謝感謝！

つとと、話がそれちまった。

今回の任務はどうやらホテルアグスタっていう一流ホテルでの任務らしいんだが

最近どうもティアナの様子がおかしい。なんか焦ってるっばいぜ？

まあそれも無理ないと思うけどな。周りに才能がいっぱいある奴が大量に

居れば自分がちっばけに見えちまうもんだ。

でも、ティアナにも才能はあるのに。こんなろくでなしの俺じゃ届かない

くらいのもんがよお……

今回の事については俺も旦那も承知済みだからあまり心配はしていいないけど、

間違っても無茶だけはしないしてほしいよなあ

はあ今日も頑張っへり飛ばすか！どうもヴァイスでした

＼  
s  
i  
d  
e  
／

＼  
ヴ  
ァ  
イ  
ス  
s  
i  
d  
e  
o  
u  
t  
／

今回与えられた任務はホテルアグスタにて警備に当たるとい  
ものである。

それにさしあたって隊長達には衣装が渡された。

翔護 「……で、なんで俺も着るのかな？もともと外での任  
務だったはずだろ？」

今回翔護は隊長の中でただ一人だけ新人達の援護を志願して  
いたのだが、  
それを面白くないと見たはやてが無理やり直前でホテル内の任  
務に変えたのだ。

はやて 「なんや翔護さんノリ悪いで？そんなんやったらフ  
ェイトちゃんも  
愛想尽かすで？」

その言葉を聞いたフェイトは顔を真っ赤にし、翔護は首を傾げた。

フエイト 「ちょ、ちょっと!?!?どうしてそこで私が出てくるのよ  
!?!?」

はやて 「いやあ、別にいゝなんとなく」

フエイトの質問に意地のわるそうな笑みを浮かべてヒシヒシと笑う  
はやて。

なのは 「もう!はやてちゃんフエイトちゃんで遊ぶのはやめて速  
く着替えてよ!」

一足先に着替えを済ませたなのはがはやてを急がせる。  
なのはがただ単にはやくホテルに行ってユーノにこの姿を見せたい  
だけだが……

そして10分後

なのは 「3人ともいいよ！翔護さんなんてスーツ姿カッコイイ！」

はやて 「いやあく似合いそうだと思うとったけど、まさかここまで

イケメンスーツ男になるとはなあ！」

フェイト 「しよ、翔護さん・・・あの、似合ってます／＼／＼／＼」

この3人が述べた感想通り、今の翔護はスーツ姿である。しかし、その着こなし方が異常ではない。普通にモデル並である。長身のからだに、すらっとした綺麗なスーツ。THEイケメンである！！

翔護 「男として褒めてもらえるとうれしいよ。それに3人も良い感じだよ！」

べっぴんさんやで！」

翔護も負けじと褒めるが、なのはは普通にうれしそうに笑い、フェイトは顔を真っ赤にして俯いたり、はやてに至っては、どや？翔護さんうれしいやろ？などとからかいに来ている。

翔護 「まあうるさいはやては置いて、さっさと警備に戻ろうか。」

翔護の声に反応したはやてを除く二人は警備に戻って行った。

ホテル内に入ってしばらくすると、少し離れたところから学者の様な男が翔護たちに近づいて来た。

ユーノ 「なのは！久しぶり！」

この男はユーノ・スクライア。  
時空管理局で無限書庫の司書長をしていて、なのはに淡い恋心を抱いた者。

なのは 「ユーノ君!!! 元気だった?」

なのはもユーノに会えたからだろうか、こころ無しかうれしそうだ。  
ユーノがなのはと少し談笑していると驚いたように翔護の方を見た。

ユーノ 「!!!? 風切少将?! お、お久しぶりです!」

しかし、その驚愕の顔は嬉しさから来る顔であった。

翔護 「やつ！ユーノ久しぶり！つと、前にも言ったる？そんな堅苦しい呼び方しなくていいよ。」

翔護も彼に向けて片手を上げて挨拶をする。

ユーノも翔護に言われていつもの呼び方に戻る。

ユーノ 「はい翔護さん！今回は翔護さんもお仕事ですか？」

翔護 「まあね。ってことはユーノも仕事かい？」

ユーノ 「ええ、今回はここに出展される者のまあプレゼンみたいな形です。」

翔護 「なるほどお。まあお互い今回は頑張っで行こうな！」

そう言って拳をグーにして突き出す翔護。

それに答えるようにして拳をコッソと当てるユーノ

ユーノ 「はい！それでは！」

そしてユーノは最後に皆に挨拶をしていくと去って行った。

～ side ～

〈ティアナside〉

今日私たちはホテルの警備任務にあたっている。

スバルたちは真剣に取り組んでいるが私はどうもヤル気になれない。

なんというか、私は本当に役に立っているのか？という気持ちになる。

そもそも私の周りには才能にあふれた人が多すぎる。

スバルは言わずとも魔力もあり、格闘もシューティングアーツで  
きる才能。

エリオは幼いながらも私と同じ陸戦Bランクで槍を扱う才能。

キヤロはレアスキルで龍を召喚できる才能。

そして何より一番才能があるのがウィング隊の翔護さん。

リンカーコア無しで陸戦SS+まで押しあがった戦いのスペシャリスト

それに比べて私はどう？

リンカーコア有り　しかし魔力が低い。

レアスキル　無し。

戦闘　命中率はせいぜい中の上。

本当に自分が嫌になるわね……

でも私は挫ける訳にはいかない。私の大好きだった兄さんを馬鹿にした

上司達をあっと言わせるまで。

スバル　「どうしたのティア？悩み事？」

私が悩んでいるとスバルがのんきに話しかけてきた。まったく、悩みが無い人はこれだからいいわね

ティア 「何でもないわよ！ほら行くわよ！」

はあ、でも私が頑張ればきっと兄さんの無念も覆すことができるはず！

まっつててティーダ兄さん！

くティアナside outく

side

全員が配置につき終わり、なのは達もホテル内で警備していたところ、  
予想通り侵入者が現れたらしい。

今は外にいる新人達と副隊長が戦っているが正直危ない状況である。

翔護 「来たか！はやて！俺は先に行って新人達を援護する。お前  
たちは会場の方を  
たのんだぞ！」

そう言って足早に会場を後にする翔護。

はやて 「ああもう！ちょっとは待ってくれてもええやないか！  
・  
・  
しゃあない。フェイトちゃん、なのはちゃん！こっちは会場の警備  
を続行  
してネズミ一匹も通さんようにするで！！！」

なのは・フェイト 「了解！！！！」

そして3人もセットアップして会場の人たちを避難誘導していった。

会場から忠告を聞かずに飛び出た翔護はティアナ達のところに向かっていた。

途中に来ていたスーツの上から花鳥風月のケースに入っていた神の羽衣を

羽織って、風の神力で猛スピードで走って行った。

翔護 「（なんだか今回は胸騒ぎがするな・・・新人たちは無事か？）」

など少し焦りつつもただひたすらに走って行った。

そして、目的地に着くと、そこにはスバルに向かって飛んでいく魔力弾があった。

翔護 「なんだってこんな事に！？つく、危ないスバル！！」

そして翔護は咄嗟に飛び出しスバルの壁になるように向かい、腕を前に突き出して呪文を唱えた

翔護 「風よ！ここに集え！嵐風壁らんふうへき！！」

瞬間目の前にとつもない圧縮したかのような嵐の壁ができ、魔力弾を掻き消した。

翔護 「ふう、大丈夫スバル？」

スバル 「あ、ありがとうございます！」

なんとか安否を確認できるとそこに自分の持ち場から来たヴィータがいた。

ヴィータ 「ティアナ！仲間撃つなんてどういっつもりだ！」

ヴィータの怒声の中スバルが必死に弁明をするが翔護がそれを抑え込む。

その後、茫然と、しかし落ち込んでいるティアナに翔護が話をかけた

翔護 「ティアナ、この任務が終わったら俺の部屋に来て。そこでゆっくり話し合おう……」

そう言って静かに去っていく翔護。  
スバルやティアナ、さらにはヴィータですらその後ろ姿には何も言えなかった。

S  
S  
i  
d  
e  
  
O  
u  
t  
S

〈ティアナside〉

私は今日ミスをした。

いや違う、危うく仲間を殺すところだった。

思えばなんで私はあの時あんなに焦っていたんだろう……

シャマル 「こちらシャマル、スターズの方にガジェットが接近中！  
二人とも隊長達が着くまでなんとか持ちこたえて！」

普通ならここで防御戦をしていればいいものを私はできなかった。

ティア 「(ガジェットが来る?!ここで仕留めなきゃ!そう、私  
がやらなきゃ

兄さんのために……私がやるんだ!)」

あの時私は兄の事を侮辱した人たちが許せなくて、それで……  
敵討ちのつもりで先走ってしまった。

ティア 「いいえ、全部撃墜してみせます!」  
「そ、そんな無理よ!  
いますg……」  
「スバル行くわよ!」

シヤマルさんの話も聞かずに勝手に戦いを初めてそしてあんなことになった。

ティア 「スバル！私が特大の撃つからそれまで時間を稼いでくれない？」

うそだ。私にはそんな技術は無かった。けれどもやるしかないと思っていた。

スバルもこんな私を信用してか、

スバル 「分かった！私が敵に突っ込むからその間にね！」

そしてスバルが敵に向かって走って行った。

私もそれに合わせて多重にカートリッジをロードする！

そして………

ティア 「クロスファアシュート!!」

まだ完全に制御もできていないのに弾丸を放った。

思えばそんな弾がしっかり飛ぶはずもない。

そして段々と軌道がズレてスバルに向かって飛んで行った。

ティア 「(マズイツ！スバル避けて！)」

そう願っていたが、もう避けられない距離まで弾は行っていた。無理だと思ったその瞬間、翔護さんが現れた。

スバルを守るように立ち、腕を突き出しながら何か唱えていた。

翔護 「風よ！ここに集え！嵐風壁らんふうへき！！」

突如翔護さんの目の前に嵐の盾ができ、私の弾丸を掻き消した。

な、なんとか助かった・・・そう思っていたら  
駆けつけて来たヴィータ副隊長に怒鳴られた。

ヴィータ 「ティアナ！仲間撃つなんてどういっつもりだ！」

正直仕方がないと思う。私はそれだけの事をしたんだ。  
仲間を撃つ。ましてや相棒を・・・

私が落ち込んでいると翔護さんが不意に話しかけてきた。

翔護 「ティアナ、この任務が終わったら俺の部屋に来て。そこでゆっくり話し合おう……」

話し方はいつも通りだが、心なしか怒っているように感じた。  
そして翔護さんはすぐに去って行った。

その後、私は会場裏の警備にあたっていたが、スバルが励ましに来たのを  
自分勝手な言い草で怒鳴り返してしまった。

なんて幼稚な事をしたんだろうか……

そして任務が終わりそのまま私は言われた通りに翔護さんの部屋の前に行きノックをした。

コンッ！コンッ！

ティア 「失礼します！ティアナ・ランスターです」

入ろうとしてドアノブを捻ると翔護さんが出てきた。  
どうやら場所を指定しただけで他の場所で話すみたいだ。

翔護 「此処だと話ずらいからね。俺の家に行くよ。」

そう言っただアを閉めてまた開けるとそこは翔護さんの家のリビングになっていた。

翔護 「さあ上がって。紅茶でいいかな？」

ティア 「は、はい……」

なんだろうこの雰囲気は、とてもじゃないけど今から怒られるという気がしない。

翔護さんが紅茶を用意している間、私は悩んだ。今後どうなるか、部隊から外されるかを。

翔護 「はい、お待たせ。それじゃあティアナ聞けど、どうして焦っていたのかな？」

ティア 「!!!?」

驚いた。翔護さんは知っていたのだ。私の心境を・・・完璧に。  
まだ誰にも、なのはさんにも話していないのにこの人は知っていた。

ちゃんと私の事を見ていてくれたんだ・・・

ティア 「どうしてそう思うんですか？」

翔護 「そんなの君の自主練を見てればわかるよ。ヴァイスと俺でよく話し合ってたからね。だから、なんとなく君が今の自分に焦りを感じ  
ているんじゃないのかなって思ったんだよ。」

私は涙が出そうになった。悲しいからじゃない。

ただ純粹にうれしかった、私を見てくれて。

だから思う。翔護さんには………本当の事を言おうと。

ティア 「わかりました………すべてをお話します………」

そして私は文字通りすべてを話した。

兄が死んだこと、

その兄が当時の上司に侮辱されたこと。

その時に「死んでも捕まえるべきだ！」 「航空隊の恥だ！」 など  
と言われたこと。

なのはさんの訓練では自分が強くなっているか心配なこと。

周りには才能がある人がたくさん居ることなどを。

話終わると何やら翔護さんが出かける準備をしていた。

翔護 「なるほど。つまりティアナはなのはの基礎ばかりの訓練だと  
自分の強さが実感できないって事でしょ？」

ティア 「はい……」

翔護 「そうか……だって俺と模擬戦をしよう！  
そうさ！そうすれば少しは変わるでしょ？」

ティア 「……ええええええええええええ！！！！？」

な、ななな、なんで私が翔護さんと模擬戦を??!

か、勝てる訳ないじゃない!相手はSS+よ?

ティア 「無理ですよ!翔護さんSS+ですよね?私じゃ無理ですよ!」

翔護 「そうかな・・・?まあでも、今回は俺がティアナの現段階でのおおよそのランクを判断させてもらうためのものだから。」

この後私が何かを言おうとしたが有無を言わず扉からまた別の場所に”転移”した。

翔護 「っと、到着！」

着いた先は自然が豊かな森の中だった。

そして翔護さんが花鳥風月を取り出して構えた。

翔護 「さて、俺はこれしか使わないからこの勝負もし俺にこれ以外を使わせたら君の

勝ちだ。まあ別に俺が負けを認めるのもいいけど  
「

そう言って静かに目をつぶった翔護さん。後半なんか口笛を吹きながら挑発  
してきたのには少しイラッと来たが。

一瞬どうしたのかなっと思ったが、ここで気付いた。  
もう戦いは始まっているのだと。

そして私もクロスミラーージュを起動して一本の木の後ろに素早く隠れた。

ティア 「翔護さんはまったく動く気配がない……!?!?これは  
前の  
模擬戦の時と同じ?!」

確か前もこんな感じで私は撃墜された。

よっし! 今回はひと泡吹かせてやるぞ!

＼ティアナside out＼

＼翔護side＼

どうやら何か考え付いたらしいな。

ティアナとの模擬戦を初めて数分だったが、今だ動きを見せない両者。

俺自身も常に集中状態なので自分から動く事は少ない。

ん？いきなりティアナの気配が増えたな。4人か？

内一人が木の陰に隠れたままで二人が両サイド、最後が俺の後ろか。どうやらこちらの様子をうかがっているみたいだな。そして予想通り、一人が突っ込んできた。

翔護 「本物じゃないからよゆ・・・!!」

これは・・・考えたね！

幻影が掻き消される寸前で魔力弾を俺に撃ちこみさらにまた違うところに移動して新たな幻影を作る。

つまりは持久戦か。しかし、ティアナの魔力量だと圧倒的に不利だぞ。

さて、どうする？

）翔護 side out）

）side）

先ほどティアナが先に仕掛け、それを翔護が対応していた。しかし、このままでは明らかにティアナの方が不利である。

翔護 「……………っ！そこか！！」

そしてまた新たな幻影が翔護の花鳥風月によって切り裂かれた。  
しかしまた新たな気配が生まれる。

翔護 「いいかげん攻めさせてもらっよ！」

そう言うと翔護は鎌を下段位まで下げて猛スピードで走りだした。  
段々と近づきえもいぬ速さで幻影をまた一つ、二つと消し去った。

翔護 「（残りの気配は後二つ。そのうち一つは木の後ろ？）」

そして翔護はもう目の前にいる幻影を切りにかかると。

が、

ティア 「いつけえ！シユート！！！！」

幻影だと思ったティアナが本物であることに気づく事が出来なかった。

慌てて魔力弾の大群を回避して避けたが、逃げた先には

翔護 「設置型のバインド！？」

それにより足と手を拘束され身動きが取れない。  
そしてティアナがクロスミラージュを突きつけて、

ティア 「この勝負どうですか？」

翔護 「……ああ、俺の負けだよ……」

それを聞いたティアナは……

ティア 「やつ……やったあ~~~~」

と言ってその場へたり込んで座ってしまった。  
どうやら長い緊張から解放されたようである。

翔護 「どうやらティアナ、自分の中で答えを見つけられたんじゃないか？」

するとティアナは驚いたような顔になったが、同時に満面の笑みに

なった。

ティア 「はいっ!!ありがとうございます!!」

翔護 「どういたしまして。ああそれと俺なりに今のティアナの陸戦評価をするけど。」

そしてまた場の空気が少し重くなった。それは単にティアナがまた緊張しているからである。

翔護の口が開かれ……

翔護 「正直……どうしてBランクなのか理解できない。普通にAA+くらいあるよ。というか十分に強い。」

ティア 「ほ、本当ですか!?!」

翔護 「ああ、本当だよ。俺が証人だ。」

そしてティアナは本日二度目の喜びの表情になった。  
さらにつれしさのあまり翔護に抱きついた。

ティア 「あ、ご、ごめんなさい／＼／＼／＼」

翔護 「いいよ。それぐらいうれしくて事でしょう？なら今は思い  
つきり喜んでいいよ。」

その後しばらく二人で今後の事について話していた。  
主になのはに謝りに行くことについて。

すると急にティアナがまた顔を赤くして翔護に尋ねた。

ティア 「あ、あの翔護さん・・・その、” 兄さん ” って呼んでもいい・・・ですか？」

モジモジし、赤面しながら聞いてくるティアナに、  
それこそ本当の兄のように優しく

翔護 「良いよ。ティアナの好きなように呼べばいい。」

そう言ってティアナの頭を優しく撫でた。

ティア 「はいっ!!” 兄さん ” !!!」

そして二人は仲良く来た” 扉 ” から隊舎に戻って行った。

〜おまけ〜

〜side  
outs〜

アグスタでの事件が終わって、なのはに謝罪をしたティアナ。その時にクロスミラージュの新しい姿と訓練の真意を聞かされて泣いた。

翌日のニュース。

食堂にて

モニター 「次のニュースです。昨日深夜零時過ぎに、何ものかが管理局局員3人を襲い内一人を意識不明の重体にすると言う事件が発生しました。」

フェイト 「わあ、なんか物騒だね。エリオとキャロちゃんと戸締りして気をつけてね。」

エリオ・キャロ 「はい！」

モニター 「被害者の一人に状況をうかがったところ、「数年前、  
貴様ら

はやってはならない事をした。死者を侮辱するとはいい度胸だ。ど  
うした？

死んでも捕まえてみる。」などと犯人に言われて突如見えない  
何かに殴られた、との事です。」

なのは 「うわあ、この被害者の人あれだよ、この前航空隊で  
不正賄賂で問題になった人だ。」

はやて 「ああ！せやいたなあそんな人。なのに自分は悪く  
ないとか言ってた人やる？頭に来るわ！」

といいながらトーストを食べるはやてとなのは。

モニター 「さらに調べてみると被害者らは何らかの不正な事実を隠していたとみなし、完治し次第取り調べが行われる模様です。

犯人について……」

そんな隊長たちをよそに驚きながらモニターを見つめるティアナ。そう、今回襲撃に合ったのは兄が死んだときに罵倒した当時の上司だったからだ。

どうして？つと不思議に思っていると最後の隊長である翔護が眠そうに食堂に入ってきた。

フェイト 「どうしたんですか翔護さん、随分眠そうですね？」

翔護 「ああ、昨日はちょっと遅くまでごみ掃除をしたからね。まあ綺麗に片付いたから少しはいいけどさ。なあアギト？」

アギト 「ほんつと、嫌なゴミだったよな。まあけど兄貴は本当に綺麗に掃除してたからな」

なのは 「はえ〜じゃあ今度翔護さんの部屋に行きますね！」

はやて 「あかんでなのはちゃん一人だけなんて！うちも行きませわ！」

フェイト 「ずるいよ！二人とも！翔護さん、私も行きます！」

なのは、フェイト、はやてが揉めている中、ティアナだけは少し嬉しそうな目で翔護を見ていた。

ティア 「（そっか、昨日のことでもう調べちゃったんだ。相変わらず兄さんには叶わないな……）」

ここにいるメンバーの中でティアナだけは気付いていた。  
モニターに映る襲撃犯が誰なのかを……

くおまけ終わりく

## 第16話 ホテルアグスタ（後書き）

ヴァイスを出す意味がいまさらながら無かった気がしてきた・・・  
ああもうこのところスランプ気味でネタが思いつかない。

感想コーナーばむくん様！感想ありがとうございます！

自分も帝王の灯火を毎回楽しく読ませてもらっている者として  
非常にうれしいです！まさかシャルルの生みの親から感想をもらえ  
るとは・・・

皆様からの感想や指摘、お待ちしております！

第17話 動き出す歯車（前書き）

今回は少し無理やりなところがある相変わらずの駄文ですが、

ぜひとも見逃してやって下さい。

第17話 動き出す歯車

〈神童組合side〉

その日はいつものように皆が任務に行き、事務の子が和んでいたり、早坂兄弟が暴れたり（主に炎鬼）でいつもの日常だった。

そう、唯一つを除いては……

雷人 「ハア、ハア、クソツ！ 渋てえな！」

ピカッ！つとまばゆい光が広がったこの部屋に佇んでいるこの男は雷神の力を持つ神童組合、守の右腕である雷人だ。

そして、この荒れ果てたこの場所こそが神童組合である。

??? 「なかなかやるなあ〜？ 雷神さんよあ〜？」

ふと雷人に向けてゆっくりと歩いてくる人影が見える。  
それは全身が黒ずくめでその男が歩くたびに空間が揺れる。  
一言で表すなら”邪”

雷人 「っけ！なにがだよ！全然喰らってねえくせして！」

そう言つて雷人は掌に雷を集めて圧縮している。  
すると！雷人の腕には一本の槍上の雷が出来た。

雷人 「喰らいやがれえ！鳴神なるかみ！！」

雷人の手から放たれた青白い閃光は光速の速さで男に向けて飛んで  
行った。

否、もう男を貫いていた。



やられるほど  
俺は雑魚じゃないんだよ！」

そして邪神が指を鳴らすと奥の方から大量の堕人たちが現れた。  
中にはLv3の姿もちらほら見られる。

雷人 「つく！仕方ない。……現れる！我が神器”ミヨルニール”！！」

雷人が両手を前に差し出す、するとその手が紫の光に包まれ、いつの間にか大きな  
ハンマーが握られていた。先の方からは紫電が瞬いている。

雷人 「悪いがお前達は寝ててくれ……轟雷！！！」

ミヨルニールにありつたけの神力を注いでライトが一気に地面をたたいた。  
すると、

ドッガン！！！！

一瞬爆弾が光つたかの様な光景になった後、  
雷人を中心とする半径1kmに巨大な落雷が降り注いだ。

その落雷によりそこら中を埋め尽くしていた墮人たちが一瞬にして  
浄化されていった。

477

邪神 「パチパチパチ！ブラボー！さすがと言ったところか？しかし良いのかよ  
こんなに周りをめちゃくちやにして？」

もうそこには神童組合の面影は一切なかった。  
有ったのは先ほどの落雷により燃えた建物だけである。

雷人 「なかにいた奴らなら全員避難済みだ。後は、お前が大人しく封印  
されれば良い話だ………はあああああああああ  
!!!!」

突如として邪神の周りに紫電の刃が十本姿を現し、刃を向けていた。  
どの刃もすべて発射準備完了だ。

雷人 「大人しく、くたばれえええええ!!サンダーブレード！」

そして邪神を囲むように刃が飛んでいきさらには天空から巨大な  
雷の大剣が降り注ぎ、今度こそ本物の邪神に向かって行った。

攻撃の衝撃で、辺りが砂嵐になり邪神の姿が見えないがこころなし  
か、  
まだ終わらないつと雷人は直感で感じた。

ザー！

ヒュッ!

雷人 「!!!あぶねえ!」

一瞬砂嵐から何かが飛んでくるのが見えて避けたが、  
その飛んできたものを認識してさらに驚愕の表情を浮かべた。

雷人 「まさかテメエ・・・アッシュだけでは飽き足らず、  
・・・・・・ボスマで取り込みやがったか!!!?」

邪神 「あつはつは!大正解だよ!いや、この数千年待ったかいが  
あつた。

君たちの長の力は防御に関しては最強だからね!いただいたよ!」

そういつて自分の来ている服のお腹の部分をめくると、そこには守の顔があった。意識はないようだが、いうならば完全に取り込まれている状況だ。

邪神 「いやはや、アッシュだっけ？こいつの体もいいけど、神童守は能力が良い！これで・・・これで俺様は神界に行くことができる！もう誰も邪魔はできないぜ？」

自信が支配しようとして追放された神の世界に向かうことができるすべを手にいれて喜びに浸っている邪神。

しかし、此処で諦めるのは神童組合ではない。いかに守の神器の能力が強かろうとも、最後の一秒まで諦めないのが神童組合である。その心に従うように雷人も突き進む。

雷人 「お前一つ忘れてないか？どうしてこの場に雷神の神である俺一人しかいないかを・・・」

雷人はゆっくりだが宣言するように語る。

それに首をかしげながらゆっくり近づいてくる邪神

雷人 「そもそもお前早坂兄弟がどこにいるのか知っているのか？」

その瞬間邪神の動きが止まった。  
黒く覆われた顔には戸惑いの色が見えた。

雷人 「そうか・・・ボスは分かっててあいつらを向こうに”飛ばして”

俺に此処を任せたのか・・・」

邪神 「いつたい何が言いたいんだ雷神の雷人？この神童守が一体なに  
をしたというんだ？」

すると、雷人は馬鹿にするかの様に笑う。

雷人 「っふふ、何簡単なことだ。これもボスの計算の内だったってことだ。」

今回俺がここにいるのはこの世界から合計3人の神が消えた。それにより世界が不安定な状況になったが、安定させるまで時間がかかる……

つまり！！ボスは今回この瞬間に！お前が来るのを分かっている！  
えとお前に  
取り込まれた。」

この間その場を動かずに雷人の説明をただひたすらに黙って聞いている邪神

だが、表情には少し焦りの色が見えてきた。

雷人 「邪神、しってるか？ボスの転移能力は神界に行くことができる。」

だがなあ、それはオリジナルの場合だ！お前は今ボスを取り込んで神界

に行こうとしているが、ボスの転移は残念ながら……”本物”じゃないぜ？」

その言葉に完全に疑問を抱く邪神

邪神 「どづいうことだ？本物でないとは？」

雷人 「まだ分からないか？ボスは神力を自在にコピーできる。  
そしてオリジナルの方を自分ではなく他の誰かに託した。」

そこまで来てやっとこの場にはいない者の存在に気づく。

483

邪神 「まさか・・・まさか！！風のガキに渡しやがったのか！  
？」

本来ならこんな戦争みたいな時に、組合で一位、二位をあらそう  
レベルの翔護がないことにようやく気付いた邪神。

雷人 「その通りだ。だからお前がいくら頑張っても無理だ！  
だからさあ……此処で大人しく寝てろおおおおお！  
！！！！」

雄たけびを上げ自身の持つ神器を地面に力いっぱい叩きつけると、  
一瞬世界全体が光った後に邪神を中心にして円状の呪文見たいな  
術式が現れた。

邪神 「まさか貴様……死ぬつもりか！？こんな事をすれば人  
間の  
身である貴様が持たないぞ！」

邪神が忠告すると、それを鼻で笑うかのように雷人が言う。

雷人 「なあに。俺が死んでも次の世代がしつかりやる、なにより  
俺の命でお前がやられるなら儲けもんだ。幸い此処にはいないが後  
を任せられる奴もいるしな……」

そしてその言葉を区切りに邪神の四肢を雷の鎖が拘束して行き、さらには、雷人の持つミヨルニルが巨大化し、煌めく巨大な刃が装着されていた。

雷人 「ボス・・・俺はあんたの作戦に乗ってよかったよ。あの馬鹿兄弟じゃこんな事できねえし、なによりやさしい翔護じゃ無理だろうな・・・」

数年前・・・

守 「雷人……邪神はいつか必ず俺を狙ってやってくる」

煙草を吹かしながら自分の部屋のソファに座っている雷人に話しかける守。

守 「だがなあ、ただ此処でじっとして待ってるのも癪じゃねえ。そこでだ、奴にひと泡吹かせようと思う。」

そして守は雷人に作戦を伝えた。

わざと自分の力をコピーし、コピーした方を自分に残して

オリジナルを翔護に渡す。そして、オリジナルを持った翔護をこの  
”世界”

という概念から飛ばすというもの。

もしもの時のために早坂兄弟と雷人も数年後に飛ばすということ。

雷人 「しかしボス！それだとボスがやられるじゃないですか！！」

身を乗り出して守に詰め寄る雷人。普段の雷人は冷静沈着だが今回は冷静でなかった。いや居られなかった。

守 「なに俺は大丈夫だ。なんてったって護りの神童だぜ？  
そう簡単にやられる自信は生憎持ち合わせてねえよ。」

雷人 「しかし！……なら、自分も残ります！」

そう言っつて守に詰め寄る雷人。

だが、

守 「ふざけんじゃねえ！お前まで残る必要はねえ！」

つと守に一喝されてしまった。  
けれども雷人もこんなことでは食い下がらなかった。

雷人 「自分は自分の決めた事に悔いを残さないように生きよう  
と思います。それに、3人もこの世界から神が消えたら修正に時間  
がかかりボス一人じゃ大変でしょう。」

守 「しかし・・・やっぱりそれh」たまには俺にも背負わせて下  
さい」！！」

守が否定の言葉を言おうとしたが雷人がそれを止める。

雷人 「ボス、なんでも自分で抱え込まないで下さい、  
俺は貴方の一体何なんですか!？」

今にもキレそうな勢いで言われて逆に畏まってしまった守。  
だが、此処で一つの決心が両者にできた。

守 「いや、わかった。俺の背中をお前に預ける！！決戦の日は頼むぞー！」

守は仲間である者を信用する決心を、

雷人 「任せて下さい！」

雷人は自分の尊敬する人の背中を守抜く決心を。

・ ・ ・ ・ ・

数年前に決心した思いを再び奮い立たせ目の前の敵に集中する。  
今からは瞬きすらできない。

雷人 「これが、俺が出来る一世一代の最高のシヨ―だ!!  
我が身は雷、如何なる時も空を支配し統べる者。この身が朽ち  
果てるまで、悪しき者に我が全力の一撃を与えたまえ!!

断罪の雷光!!ジャッシュメントライト!!」

邪神 「ぐ、ぐおわああああああああ!!!!!!!!!!!!!!

！きさまあああ  
ああああああああああああああああああああ  
！！！！！！」

雷人の命を懸けた最後の一撃は幻でもなく正真正銘の邪神に命中した。

その攻撃の余波により地は裂け、嵐が生まれ、草原は燃え尽きた。

閃光の起きた場所はもうすでに生命が見られないような状況だった。

雷人 「はあ、はああ、つく！ゲホオ！はあはあ」

もう立つことすらできずにその場に力なく倒れ伏す雷人。  
そしてかすかに動く口で絞りだす最後の言葉……

雷人 「はあ、はあ好き勝手にやらせんよ翔護お！！お前に託したぞ！！」

遙か遠くに向けて大きな声で雷人は叫びそして、笑って逝った。

・ その雷人の周りには不思議と太陽の光と虹が現れたという……



ザッ、ザッ、ザッ

邪神 「ゲボオ!!! はあ、はあ!!! . . . っけ、何だお前死んだのか。この俺様に攻撃しておいて死ぬとは生簀かねえ野郎だ。おまけに笑いやがって!!!」

満身創痍の体で雷人の亡骸を見下す邪神。  
心なしか悲しみの表情が読み取れる。

邪神 「なんだ？神童守とアッシュ、貴様ら泣いているのか？」

そして今はつきりと邪神は涙を流した。だがこの涙は邪神の者ではない。

邪神に体に乗っ取られたアッシュ・ボルガノンの悲しみそして、翔護と早坂兄弟を逃がし、さらに世界を安定させている不意を突かれて

取り込まれてしまった守の悲しみだった。

邪神 「くくくくくくくくくく！あはははははははあはあ！そつかそつか！お前らにとってこいつはそんなに大切な、な、

今から奪いに行くのはお前らの最後の希望だ！！」

そして邪神は取り込んだ守とのシンクロ率を上げ、記憶を読み取った。

邪神 「ははは、並行世界とは考えたな。ならそのわずかな平穩

俺が奪いに行くぜ！なんてっ たって俺様は……邪神口キ様だ  
！！」

そう高らかに宣言すると両手を前に突き出して、空間を引き裂いた。  
引き裂かれた空間の裂け目に迷いなく進んで行き、この零法町からは  
完全に神々が消えた。

）神童組合 side END（

新キャラ設定

【桐谷 雷人】

雷神の神力を持つ雷の神。

神器はミヨルニールと言い、大きなハンマーである。  
また、翔護よりも年上で翔護にとっては良い兄貴分であり、  
守の右腕でもある。

邪神との最終決戦にて、その命のすべてを懸けて戦い力尽きた。

### 【アツシュ・ボルガノン】

翔護の悪友で、神童組合では一般人の者だった。  
神の加護を受けており墮人の1〜2LEVを倒していたところを  
突如として邪神に体に乗っ取られた。その際に魂を封印さ  
れてしまったために抗うことが出来ずそのまま成すがままになっ  
ている。

### 【邪神口キ】

神童組合が数千年前から追っている神で、神童組合は邪神を封印するために設立された。神界に行くために守の転移能力を欲し、守を取り込めだが、オリジナルの力ではない事をしり、オリジナルを求め並行世界に向かう。

## 第17話 動き出す歯車（後書き）

次回から邪神を書くときは”ロキ”と明記させていただきます。  
よろしく願います。

感想コーナー

翔護 「今回からこの場所埋に俺たちも参加するよ。」

フェン 「わわん！」

アギト 「おう！はりきっていくよー！」

翔護 「それではソラト様！度重なる感想を真にありがとうございます！  
ます！

作者もろとも感激の涙があふれてまいります！！」

アギト 「ありがとうー！！うれしいよー！」

フェン 「わあ〜ん」

翔護 「それじゃ今回はここままで！とよ〜なら〜」

〜終わり〜

第18話 追求と理解と早坂兄弟(前書き)

スランプが続いてしまった……

第18話 追求と理解と早坂兄弟

リンデイスイデ

はあゝい

皆さんお久しぶりのリンディよ。

なぜ今回私が居るのかと言・う・と！それは、翔護君の”力”が皆にもう

隠せないくらい広まりつつあるからなのよね

前のホテルでの事件の時に堂々と使っていたし。

あれほど人目は避けなさいと言ったのに……

まあ気を取り直して！それで、私は一応翔護君の上司に当たるから彼の事についてなのはちゃん達に説明しなきゃいけないわけ。

はあせっかく色々隠蔽してたのに！これじゃ意味がないわ！

とりあえずモニターを繋げてっ！

あ！繋がった！

よし、ゴホン！

リンディ 「皆さんお久しぶりね。翔護君も元気してた？」

）  
翔護  
side  
）

）  
リン  
デ  
イ  
side  
out  
）

まずい、いやはや非常にまずいぞこれは。

お、俺の前に修羅がいつぱいいる……………

まず、なのはとフェイトがもう鬼神モード入ってて、

シグナム並びにヴォルケンリッターは怒気を孕んだ目つきで見えています。正直怖くて仕方ありません。

あまりの恐さにティアナを始めFW達は震えている。フリードに至っては

アギトとリインと一緒にどこか遠くに避難していった。

なのは「翔護さん…………ティアナのデバイスの映像記録を見せてもらったん

だけどね？スバル助ける時に魔法使わなかったかな？」

こ、怖い！！殺気がぶんぶん飛んできてる！

フエイト 「確か翔護さん魔法使えないんじゃないかな？ たっけ？ てことは、

……私たちに嘘をついてたのかな？」

ふえ、フエイト！？ 目からハイライトが消えているけど！？

こ、此処は正直に皆に説明した方が早いかな？

翔護 「わ、分かった！ 今回の事についてしっかり説明するから、だからまずは上司の許可をくれ！」

はやてからは目線で大丈夫なんですか？ と言った心配の目線を向けられ

たが、どちらかというの良い機会なのかもしれない。

そして俺はリンディさんにちょっとしたメールを送ったあと、通信を繋げた。

リンディ 「皆さんお久しぶりね。翔護君も元気してた？」

通信がつながると、手を振りながらこちらに向けて笑顔を向けてくるリンディさんが映っていた。

翔護 「元気でしたよ。それで早速本題なんですが、皆にもう話しても

良いんじゃないでしょうか？」

リンディさんは少し腕を組んでから、時間にして約5秒くらい悩んだあと  
に笑顔で了承した。

リンディ 「うん！いいわよ。翔護君も皆に本当の事を言えるって  
いう

位信用出来たってことね。」

「翔護君も皆に本当の事を言えるっていう位信用出来た」え？

ああ・・・そうか。確かに俺は今まで自分の力をはやて以外には黙っていたけど、自分から話したいと思えるほど、

いつのまにか

信賴していたんだな。

そしてリンディさんは「それじゃ、がんばって！」と言って通信を切った。

俺は皆の方に振り向き、自分の生まれと世界、力について説明する事にした。

翔護 「それじゃ今から俺の事について説明するよ。全部本当の事だから、  
信じてね。」

すると、皆が唾を飲む音が聞こえる。って、なんではやてまで!?

はやて 「だってうちも翔護さんの事そこまで詳しくないからつい・  
」

まあいいか。けれどもいざ言つとなると説明って結構難しいな。

翔護 「まず、俺の生まれたところについて説明するよ。俺の生まれは地球の零法町って所なんだけどシャーリー、ちょっと調べてみてくれ。」

するとシャーリーはすぐさま調べたが、結果を見て首を傾げていた。

シャーリー 「翔護さん、零法町なんて97管理外世界にはありませんよ?」

翔護 「うん、確かにこの”世界”には零法町は存在しない。でも、俺は確かに零法町のある”世界”で生まれた。」

皆俺の言っている意味が分からず首を傾げている。  
だが、シグナムがはっ！となり、驚いた顔で俺をみた。

シグナム 「風切よ、これは私の推測なのだが、お前はもしかやあらゆる

可能性が分岐した

” 並行世界 ” から来たというのか？ 「

そんなことはありえないと言った様に聞いてきたシグナム。

だが、現に俺は此処にいる。だから敢えてここはYESで答える。

翔護 「その通り。俺は並行世界の住人。こことは違う世界からきた世界にとっては混入物イレギュラーだよ。」

シグナムはそうか・・・と言って下がったが、ここでティアナが手を上げて発言した。

ティアナ 「ちよつと待って下さい！兄さんが言っているのは次元世界の事じゃないんですか！？」

そっか、普段並行世界なんて言葉きかないから勘違いしてもおかしくな

いよな。此处は説明しとかないと後々面倒だし……

それにシグナムを除いてまだみんな分かってないみたいだし

翔護 「うーん、それじゃティアナはどうしてガンナーになろうと思っただい？」

いきなりの俺の質問に少し戸惑うティアナ。それでもきちんと返答して

ティアナ 「それは、死んだティータ兄さんの意志を引き継いで……

┌

翔護 「そう、君はティードさんの意志を引き継いでガンナーになった。

しかし、もしかしたら君はその意思を引き継がなかったかもしれない。「

ティアナはとたんになんか？マークになり首を傾げた。

ティア 「どういふことですか？そんな事ないですよ！もしもそんな事が

あったとしたら……！！！！」

そこまで言っただけで翔護の言おうとしている事にティアナを含めて周りもだんだん気が付いてきた。さすがエース揃いの六課。  
頭の回転がはやいな。

翔護 「もう気がついたんじゃない？俺が元いた世界は……」

”あらゆる可能性”  
を秘めた世界だったことが……”

翔護の告げた言葉にシグナムを除く一同が驚愕の顔になる。  
その顔はありえない……といった表情である。

翔護 「まあ一番ありえないって思っているのは俺もただけどね。  
なにせ初めてこっちに来た時には驚きばっかだったもん。」

先ほどの緊張感を感じさせぬ笑った顔で自分の来た時の心境を語り、  
なつかしんでみたりする。思えば本当に来た時は焦ったなあ……  
なにせ自分の知っている町は無いし、文化や人も違う。  
顔なじみなんて居る訳がなかった。まさに一人ぼっち。

そう思うと、あの時銀行に行って預金して良かったなと思うよ……

一通り話し終えるとスバルが何やら真剣な表情で質問してきた。

スバル 「寂しくは無かったですか？だって、周りには自分の知り合い

なんて一人もいないんですよ！？ましてや自分を知っている人もいないなんて……辛すぎます。」

どこか思いつめたような感じで翔護に自分の気持ちを伝えてくる。そこからは、スバルなりの優しさを感じられた。

翔護 「もちろん寂しかったよ。でもね、俺には仲間との思い出があった

からそれをバネにして毎日を過ごしてたよ。」

場の空気が少し辛かったんだなあくつと言った感じになってしまった。

ちよ、フエイトさんそんな涙目で見てこないで……こいつぁ……やばいな。どうにかして雰囲気を変えないと。

翔護 「まあ辛気臭いのはこちらへんにしといて、次は俺の力について

説明するよ。」

多少無理があるが、無理やり話題を変えた。途端にシャーリが俄然やる気MAX！な状態になり興味津々に耳を傾け始めた。周りもそれに合わせて真剣な表情だ。

翔護 「まず最初に聞くけど皆さん神様って信じる？」

・・・・・・・・はい！皆の目がすごく痛い！  
ちよつとヴェータ！なにこいつ・・・・・・・・見たいな眼で見んといて！

なのは 「神様つてあのオーデインとかですか？  
私は信じるけど・・・・・・・・どうしてですか？翔護さん？」

一様なのはだけが返答してくれた。  
ああ、なんともうれい事なんだ！！誰かが答えてくれるのは！！

ゴホン！気を取り直してと。

翔護 「ありがとなのは。それじゃ聞くけど、今皆の目の前に神様が  
いるっ  
て言ったらどうするっ？」

皆がより深く悩み今度はシグナムですら？マークである。

まあこれは仕方がないことだ。なんせ俺の存在なんて全並行世界を巡っ

ても他に類を見ないだろうし。

翔護 「皆わからないようなので簡単に説明すると、俺は神様って事だよ。」

ああ、またこれだ。ヴィータ？「また始まったよ……」って今度はボソッと呟いたよね？もう泣くよ？いいの？

翔護 「まあ今の説明はかなり大雑把に言っとそういう事になるんだけど

細かく言つとそうだなあ、人に一番近い神であり、神に最も近い人間？

って事だな。」

もっと皆にとってはややこしくなってしまういもう熱暴走を起こしそ  
うだ。

けど、これ以外に説明する方法無いしなあ。実際に見てもらうか？

翔護 「まあ口だけじゃ伝わりにくいだろうから、実際にやるよ。  
皆、

訓練室に移動してくれ。」

俺はそういつと一足先に訓練室に向かう。

その後ろを皆がぞろぞろと着いてくる形になった。

〈訓練室〉

俺は訓練室に着くと神の羽衣を着て、花鳥風月を持ち風の短剣を羽衣の  
中にしまつて待っていた。

そこに今回の実験相手になるシグナムとヴィータがやって来た。

シグナム 「風切、本当にお前の実力が今回分かるのだな？」

ヴィータ 「ちよつとでもふざけたら承知しねーぞ！」

先ほどからの俺の挑発したかのような回答（神様論とか）でキレている  
ヴィータをたしなめながらシグナムがレヴァンティンを構える。

翔護 「ああ。今まで見たいな出し惜しみはもつしない。今回の模  
擬戦で

俺の力を十分にに使わせてもらおうと思う。」

俺一人でもこの二人はいけるが、一応あのコンビネーションで戦う  
か。

将来のエリオの戦術に取り入れるために今の内に見せて置かないと。

翔護 「今すぐ戦ってもいいんだが、ちょっと準備があるから待つ  
てくれ  
ないか？」

俺はそういうと二人から距離を少し取り、腕を前に突き出して守護  
獣召  
換の呪文を唱えた。

すると、目の前に光る三つの陣が現れ中から雅、トルム、フェンリル  
が姿を現した。

雅 「んもっ！長い間退屈だった~~~~~！」

トルム 「ようやく表にでられますな。」

フエンリル 「わう〜ん！」

雅達は長い間の隠れた生活が飽き飽きしていたようで思いつきり伸びをしている。だが、シグナム達は突然現れた3者に警戒している。

翔護 「紹介するよ。トルム達は俺の守護獣と呼ばれる存在で、神に仕える神聖なる者たちなんだ。さあ自己紹介して！」

ここで雅がはあくい！と言って一歩前に踏み出した。

雅 「翔護の守護獣をしている雅でーす！本来の姿は天使だよ」

トルム 「翔護殿の守護獣が一人トルムだ。格闘戦には少しばかりの経験と自信がある。これからもよろしく頼む。」

二人は自己紹介が終わると互いに礼をして後ろに下がった。さて、問題の後一匹だが、

フェンリル 「わん！わわんわわん！」

シグ・ヴィ 「「?????」」

まあ当然の結果だな。

これで理解出来たら少し恐ろしいが。

翔護 「ごめんごめん。こいつの名前はフェンリルだ。  
どうだ、かわいいだろ？愛くるしいだろ？」

俺がそう言つとヴィータが目をキラキラさせて俺に「もふもふして  
いいか

！？」など聞いてきたので「OK！OK！」と一応答えておいた。

なんか向こうの方に行つて一人と一匹がすごいじゃれあつてる。

翔護 「さて、向こうで盛り上がっている間に、なのは、フェイト！  
二人も今回の模擬戦にちよい参加してくれ！」

さすがに人数的に今のところは俺の方が多いからな。

此処は均等を保つために隊長を二人追加しないとすぐに終わってしまう

連絡を聞いた二人が即座に訓練室に入りセットアップを終えた。

翔護 「それじゃはやて、カウントスタート！」

模擬戦を見学しているはやてがカウントを開始した。

はやて 「3 . . . . . 2 . . . . . 1、始め!!!」

開始と同時にフェイトとシグナムが突撃してきた。  
フェイトは自慢のスピードを生かして真っ向から俺に切りかかってくる。

対してシグナムは、トルムの方に向かいレヴァンティンからの下段斬り  
の姿勢でトルムに接近している。

翔護 「トルム！今日は特別に神龍拳を使っても構わない！守護獣の力を  
皆に教えてやれ！雅も天使化して遠距離からの補助と援護よろしく  
！」

雅・トルム 「了解！（御意！）」

二人は阿吽の呼吸の如く意志疎通で行動し、雅は即座にシグナムの剣の  
軌道をずらすために自身の発現した翼の羽を高速で弾き飛ばして向  
かわせ  
る。

トルムは逆にシグナムに近づいて即座に足の腿付近に鋭い一撃を放  
った。

シグナム 「!!!なに、一撃で、これだと・・・!!」

やられたシグナムはトルムの一撃の強さに驚き即座に後退した。

翔護 「さてと、こっちもそろそろ行くか!フェンリルおいで!」

ガキン!

フェイト 「つく!」

バルディッシュの斧状態の攻撃を花鳥風月で器用に防御し、フェンリルを頭に乗せると、足に風を纏わせてフェイトの比でないくらいの速さで離れた。そして、フェンリルを降ろすと何やら唱え始めた。

翔護 「我を護りし守護獣フェンリルよ。この一刻その真の姿を現したまえ。神名解放、――ベオ・ウルフ！――」

呪文が終わると同時に今まで小さく愛くるしかったフェンリルの様子子が

一変した。いや、豹変した。

フェンリル 「ガルルルル！！！！ウォオオオオオオオオオオン！！！！」

その身はより一層黒く、全長5メートルにも及ぶ巨体になり、夜の闇を照らすような煌めく鋭い牙に、鋭利な爪、そのどれもが先ほどまでのフェンリルとは違った。これが、神名解放したフェンリルの本当の姿。

神の姿である。

今にも飛びかかりそうな勢いのあるフェンリルの上に翔護が馬に乗る様に跨る。

翔護 「フェイト見せてやる。これが俺とフェンリルのコンビネーションだ！！」

鎖付きの二振りの鎌になった花鳥風月を両手に持ち、さながら騎馬戦の様に颯爽と駆けていく。

フェイト 「うそ！？さっきとは比べ物にならないくらい速い！」

フェンリルとのコンビネーションにより、スピードが格段に上がった翔護を前に、フェイトもザンバーフォームに変える。

翔護 「ザンバーか・・・フェンリル、少し上げるぞ！」

フェンリル 「ウオン！」

さて、隊長達せめて新人達が俺の力を理解できるくらいはもってくれよ？

（翔護 side out）

（side）

翔護達が神力を使い模擬戦をしている頃、ミッドのとある森林に二つの膨大な反応があった。

???? 「っ!.....ここは!?!、 そうだ、 氷臥どこだ?!」

一人の少年が誰かの名前を叫ぶ。

しばらくするとそれに反応する声が聞こえる。

氷臥 「兄さん!良かった無事だったみたいだね!」

炎鬼 「心配させんなよ!つたく。」

しばらく黙りこむ二人。ふいに氷臥が口を開いた。

氷臥 「結局僕たちは何もできなかった.....。ボスが僕たちを逃がしてくれなかったら今頃僕たちも邪神にやられていた。」

炎鬼 「つちきしょおおおおおお！！！！俺は……俺はも  
つと

強くなりてえ！！強くなって邪神の奴をぶっ潰してえ！」

二人は自分たちの世界で起きた事に何もできずにいた事を悔やんで  
いた。

氷臥はただただ自分の無力さを責めて、炎鬼は力の無さを悔やんだ。

炎鬼 「氷臥……速く翔護を探して鍛えてもらおうぞ。」

そう発した炎鬼の瞳は決意に満ち溢れていた。

もう誰も失わない力を入れると言う決意に……

氷臥 「そうだね兄さん。翔護さんにまた一から教えてもらおう。」

氷臥も珍しく炎鬼に賛同して立ちあがった。

来るべき決戦に備えて二人は進む・  
・  
・  
・  
・

side  
out

第18話 追求と理解と早坂兄弟（後書き）

ちなみに炎鬼と氷臥は守るが直前に翔護の世界に飛ばしたため場所が指定できなかつたため森にいます。

二人は自分たちの力不足でこんなことになったと思っています。

第19話 あらら、模擬戦だよ(前書き)

久しぶりの連続投稿

第19話 あらら、模擬戦だよ

（フェイトside）

フェイト 「はあああああああああああ！！！」

ガキン！、ザンズババツ！！

なんで？！どうして私の攻撃がかすりもしないの？！  
いくらなんでも強すぎる！それにすごく速い。

まさか、これが神の力だとも言うの？

翔護 「どうしたフェイト？一発も当たってないぞ？」

私の焦る気持ちを逆なでるように挑発してくる翔護さん。  
いつもの私なら逆上してキレているだろう。

けれどもなぜか勝てる気がしてこない。

フェイト 「はあ、はあ、どうして、当たらないの？」

それどころか弱音が出てくる。

接近戦が駄目だと分かったから遠距離からの雷撃に戦法を変えたり  
した。

だが、結果は眼にも止まらぬ速さでの回避。ましてやそこからの私

への  
直接攻撃だった。バルディッシュがシールドを貼ってくれなかったら  
やられていたかも……

フェイト 「つく！まだまだこれからですよ！」

ザンバーフォームに変えていざ！これならさつきよりは随分ましに  
成った

はず！まずはあの大きな狼のスピードを落とさないと。

フェイト 「行け！ハーケンセイバー！！」

私は高速移動を繰り返して翔護さんに近づき、今使えるありったけの  
魔力を使った特大のハーケンセイバーを作成し、突撃させた。

だが、翔護さんが呟いた言葉で場の状況が一気に終わりに向かって行く。

翔護 「フェンリル、防御は俺に任せて思いっきり飛ばせ……」

フェンリル 「ウォーンー!!」

私から見たらそれは異様な光景だった。

先に攻撃したはずの私の技が、一瞬、本当に一瞬の間に掻き消された。

ツズツバアアアアアアアアアアアアアアアン!!!!!!!!!!

翔護さんの大鎌が目に見えない速さで縦に振りおろされ、そこから発生

した無数の鋭い風が、ハーケンセイバーを切り裂いた。

フェイト 「そ、そんな・・・私の攻撃が!?!?!?!?!つどつど!  
そんな、このわずかな間に見失う?!?!」

驚きと絶望に打ちひしがれている内に突如翔護さん達が消えた《  
・》

・ いや、正確には近くにいる。けれども、早すぎて視認できない・・・

翔護 「フェイト、これが人間の限界だよ・・・君はよく頑張った。  
だから、少将権限で、おやすみなさい・・・」

いきなり耳元から声が聞こえたと思い振り向くと、巨大な漆黒の狼  
となった  
フェンリルにまたがって、こちらを優しく見つめている翔護さんが  
いた。

この時私は場違いだろうと思うけど、ものすごく胸がキュンとした。

翔護 「癒しの風よ、悠久なる恵みと静かなる眠りを

スリープウィンドウ!!!」

そう言って私が意識を手放す瞬間に優しく抱きとめてくれた。  
たった一瞬の出来事なのに私にはとてもうれしい出来事だった。

＼フエイトside out＼

シグナム side

シグナム 「飛龍一閃!!!」

トルム 「空歩!!!」 ヒュン! シュバツ!!!

ザザザアアアアアアアアン！！！！！！

なんなんだこの男は？！私の一撃を空中に飛びあがり回避しただと？  
魔力も無しにか？ それにこの男がやっている事はただの武術。

そのはずなのにこの身のこなし・・・まさしく達人の域だ。  
動きの一つ一つに無駄が感じられない。

トルム 「どうした？そんな攻撃は当たらないぞ？」

右手をのばしてこちらにクイクイツと挑発した行動を行ってくる。  
自然と私の中のプライドが反応した。

シグナム 「っ！貴様！いいだろう。これでも喰らえ！！

シュランゲフォルム！」

一度元に戻したレヴァンティンをまた連結刃にしてあの男に叩きこむ。

レヴァンティンは蛇の様な軌道を描き辺り一面を抉り散らした。

トルム 「つく！なるほど、剣の腕は一流と言うことか……」

砂煙が晴れると少し来ていた服を着崩したトルムが立っていた。手には先ほどまでは無かった金色に輝く籠手が装備されていた。

シグナム 「なるほど、咄嗟に籠手を使って防御したか。だが甘かったな！」

レヴァンティンの攻撃は一度きりではないぞ！」

私は柄を上を勢いよく振るって連結刃をなぎ払うようにする。

しかも今回は炎の魔力を流しているからさつきとは比べ物にならないくらい

いのダメージが行くはずだが……奴はこの攻撃で倒れるか？

否、その程度の男であれば先ほどの一撃で既に事を終えているはずだ。

勝利を確信するな、周りを見るんだ。

トルム 「さすがに胆が冷えた。少しばかり侮っていたようだ。」

やはりか。まったくこうもしぶといと逆に楽しくなってくる。

風切といい、このトルムと言う男と言い私の周りは強敵ばかりだな。

私が考え込んでいると有る事に気づく。

シグナム 「変わった構えだな。どんな流派だ？」

右手を腹の前に構え、左手を自分の視覚から相手を隠す感じに構えている。

武装からして拳で来るのであろうが、どんな攻撃だ？

トルム 「少しばかり本気で行かせてもらおう。

神龍拳 三

ノ型  
脚震爆きゃくしんぱく！！」

何か来る！と思い構えていると、奴は右足をものすごい速さでわずかな

時間に何度も地面に踵落としを叩きこむ。

すると、私のいる方に向けて地面が崩壊し始めてきた。

シグナム 「っ！不味いこれでは足場が！！」

足場を崩壊されると厄介だが、いまさらこの攻撃から逃れるすべは無い。  
仕方なく上空に飛びあがろうとした時、私の横から奴の気配を感じた。

シグナム 「！！なかなか速いようだが、気配で分かるぞ！」

そう言ってレヴァンティンで斬り降ろすが、その瞬間奴が笑った。

トルム 「時に拳は弾丸のように鋭く破壊の一撃となる

神龍拳 二ノ型 龍弾撃！！」

中段で構えていた拳を関節を外すぎりぎりまで引き絞り一気に解放して  
放ってきた。

その勢いはまさしく弾丸の如く。

シグナム 「つつっぐー!!!!うおおおおおおおおおお!!!!」

レヴァンティンの腹で受け止めたが、その威力に逆にこちらがやられて

しまいそうだッ!

横に移動して回避しないとこのままでは……

体を捻らせようとした時、不思議と拳の威力が弱まった。

シグナム 「(奴の勢いも此処までか?ならば今だ!)」

このチャンスを逃すまいと一気に相手に詰め寄った。

連結刃を元の剣に戻して、自身の持ちうるカートリッジを使い最高の一撃

を決めてやる!!

シグナム 「喰らえ！紫電いつせに！神龍拳奥義！！龍翔！！」っ！  
ぐッはあああ！！」

その瞬間、まるで龍が空に翔び上がるかのような拳が私の目の前を掠めていった。その風圧だけで、皮膚から少し血が出てしまうほどだ。

な、なにが起こった！？奴はついさっきまで私に拳を放っていたはずだぞ？

切り返しは私の方が速いはずなのに、なのにどうして奴の一撃の方が私にやってくるんだ！？

そして奴は私に向かってゆっくりと歩いてきてこう言った。

トルム 「まだやるか？今ので勝敗が分からないほど腕は落ちていないだ  
る？」

その言葉に私は少しイラツとしたと同時に、奴の言っている意味も  
理解

したので、レヴァンティンを待機状態にもどして、

シグナム 「ああ、私の負けだ……だが、いつかきつと倒す！  
」

その言葉を残して敗北を認めた。

シグナム side out

（雅 side）

なのは 「ディバインバスター!!!」

ドゴオオオオオオオオオオ!!

雅 「ひゃ!もう何すんの!危ないじゃないのっよっ!」  
クヒヒ

ユビュン！

ヴィータ 「アイゼンカートリッジロード！」 ガキнгаキン！！

ああもう、さっきからずっとなのはって子は遠距離攻撃で、  
ヴィータって子は近距離攻撃のベストバランスだけど、もう少し私  
にも  
攻撃するチャンスくれたっていいんじゃないの！？

ヴィータ 「いっけえ！ラケーテンハンマー！！」

ちよっとちよっと、なにこのちっちゃい子！？あぶないんだけど！

雅 「ええいもう！これでも喰らって！ フェザーショット！！」

まずは的確に遠距離から射撃をしてくるのはって子を落とさないと

面倒だね。

そして私の羽を使った攻撃は見事なのはに当たった。と思う。

ヴィータ 「なのはっ！てめえ！許さねえぞ！！」

え？これって模擬戦だよね？なんで私怒られてるの???

なのは 「ちょっとヴィータちゃん落ち着いて！！」

しかも向こうは向こうで少し怪我したくらいだし……  
めんどろだな。

雅 「はいはい感動的など悪いけど、ウィングキャノン！！」

ちょっと悪い気もしたけど、連続でなのは方を落とすに行く。  
咄嗟にシールドを貼ったみたいだけど、今のでひびが入るって事は  
もう少し

強くしたらシールドを超えるって事か。これはこれで収穫だね

ヴィータ 「てめえあたしを狙え！」

雅 「ええー、だって戦いで狙撃者を落として何が悪いの？それに  
君みた

いな小さな子を倒しても勝った気がしないし。」

ヴィータ 「つつ！あ、あたしは……ガキじゃねえええええ！  
！！！」

おお〜翔護の情報通り子供って言うて怒るんだあ〜  
これで少しは冷静さを失ったかな？

雅 「はいはい怒った所悪いけど、少し黙ってて？ストームキヤノン！」

あ、やばいさすがに超至近距離からの嵐の一撃はまずかったかな？

ヴィータ 「うああああああああああああああああ！！！」

なのは 「ヴィータちゃん！」

慌ててなのはが助けに来たけどさすがに気絶している見たい。  
まあ私の中でも結構上位クラスの砲撃で無傷だったら結構シヨック  
だけど

なのは 「もう、許さないの……」

そう言ってレイジングハートを向けてくるなのは。

ああ、翔護が魔王、魔王って言っている意味がわかった気がする。

なのは 「全力全開……スターライトブレイカー!!!」

そっちが本気で来るって言っなら、私も少し本気ですよ

557

雅 「なかなか強いね でも……ストームキャノン!!!」

ドゴオンドガン!!!

雅 「こっやって相殺することもできるんだよ」

なのは 「そんな……私の全力が……」

信じられない者を見るかの様に私を見てくるなのは。  
まあ仕方がないよね、割と本気で今のは撃ったし。

雅 「羽よ、我が名のもとに飛び、そして彼の者に向け  
羽ばたけ！……黒羽」

私の詠唱が終えると、翼から数本羽が抜けると、純白だった色が深  
く黒い  
漆黒に変わり、なのはに向けて飛んでいく。

なのは 「こんな攻撃当たらないよ!」

そう言って見事に避けていく。が、

雅 「うん！当てるつもりもないから……掴め！黒羽！！」

私がそういうと、黒羽から黒い糸が伸びていき、なのはの四肢を拘束した。

雅 「だめだよ、自分に向かってくる物が全部攻撃だと思っちゃ。」

私はゆっくりと翼をはたかせてなのはのもとに向かう。

なのは 「にやはは、ヴィータちゃんを落ち着かせる前に私がだめだったみたい」

そう言って地面に寝かせているヴィータに向けて笑みを向ける。

なのは 「雅さんって強いなあ。私結構本気だったのに。」

雅 「そんな事ないよ、私も最後は少し本気になっちゃったし・・・」

なのは 「そんなこと言ったら私も本気だったよ！」

雅 「いや、なのはは人間でも私は天使だし。本気は少し不味いんじゃない・・・」

なのは 「いいんだよこれは模擬戦なんだから!!」

.....

つとまあしばらくこのようにお互いに譲り合うような会話が続いた  
あと

なのはが降参の意志を表明したため私たちの模擬戦はしゅーりょー！

なんか締まらなかった・・・

〈雅side out〉

くおまけく

模擬戦が行われる少し前の事

翔護 「あ、雅ちょっと良いか？」

雅 「ん？なに翔護？」

翔護 「ああお前を戦わせようと思っている二人なんだけどな、もしかにかいたくなつた時に効果的な言葉を教えてやる。」

雅 「え！何それ！！教えて！！」

翔護 「まず、小さい赤い方には、子供みたいとか、小さい子がここにいちゃ

危ないよ？って言ってやれ！」

雅 「うんうん！」

翔護 「そして白い方には、魔王とか、悪魔とか、冥王とか言ってやれ！」

雅 「なるほど。ありがと翔護！それじゃ後で呼んでね！」

このやり取りにより雅は二人をからかう術を手にいれたのだ。

くおまけ終わりーく

くおさらいコーナーく

## 神龍拳

一ノ型 こりゅうえんぶ  
古龍演舞

踊るようにして前、後ろ、右、左、上、下からの拳の攻撃  
傍から見ると本当に演舞しているかの様に美しい技。

二ノ型 りゅうだんげき  
龍弾撃

弾丸のようにスピードを上げた拳。腕の間接を外れる限界まで引き

延ばし

それをばねのように利用した破壊の一撃でもある。

三ノ型

脚震爆きやくしんばく

地面を鋭くそして素早く何度も蹴る事により、相手の足場に強力な揺れを起こして崩壊させる。

空歩くうほ

その名の通り空中を歩く。実際は空気をものすごい速さで力いっぱい蹴っている。

〜奥義〜

龍翔りゅうしょう

中段で構えた正拳を鋭くアップercutする技。あまりの速さに風圧だけで皮膚が裂け血が出る。

第20話 再会(前書き)

バイトいそがしい。

レポート終わらない。

PSP水没。

結果 ついてない……

## 第20話 再会

（side）

リイン ミッド郊外の森林地区にて二つの転移反応を確認！  
直ちに出勤して下さい！！

時間は丁度翔護が六課の皆に、自分の力と、なぜ戦うかを一通り説明した  
後である。

それにより、六課の皆は墮人の存在を初めて知り、墮人が元は人間の負の感情から出来るという事実困惑を隠せないでいた。

翔護 「皆！疲れているところ悪いが、出動だ！」

なのは 「墮人の事は切り替えて、今は任務に集中だよ！！！」

全 「『『『『了解！』』』』」

ヴァイス 「皆さん！へりの準備が出来ました！すぐに飛べますよ  
！」

ヴァイスの合図とともに皆は一斉にへりに乗り込んだ。

ミッド郊外森林地区

翔護 「……シャーリー、反応のあった場所わかるか？」

へりに乗りついた現場には、転移反応の有ったであろう物が無かった。

シャーリー 「あれ？おかしいですね、転移は有ったんですけど、魔力反応が………ない？」

フエイト 「（転移なのに、魔力反応がない？……まさか！？）翔護さん！それってまさか！」

翔護 「ああ、たぶんそうだ。俺も感覚を研ぎ澄ませたら分かった。皆聞いてくれ！たぶんその二つの転移反応は俺と同じ奴が起こした物だ！」

皆に向かって発した翔護のその顔は、なぜか笑顔であった。フエイトもなぜ笑っているのかが分からなかったが、不思議と安心できた。

翔護 「（二つの反応……やっぱりあの二人しかいないよな。）  
」

ひとまずへりから降り、隊ごとに分かれて搜索を始めた。

フェイト 「時空管理局です！！誰か居ませんかー！？」

エリオ 「フェイトさん危ない！！」

ギキン！！

フェイトが声を発しながら搜索していると、突如後方から火の球が飛んで来たが  
すんでのところではエリオがストラダを使って防御してくれた。

炎鬼 「つち！防御したか！」

氷臥 「ちよつと兄さん！なに勝手に攻撃してるの！？」

茂みの奥から攻撃を放つたであろう人物と、それを咎める人物が出てきた。

炎鬼 「つたく、翔護の奴が見つからないから変な奴らにからまれたじゃねえか！！ああもうイラつくぜ！！」

氷臥 「だからって神力使うことないじゃん！」

なにやらいきなり揉め出した二人。そんな二人を見てどうしていいかわからずあたふたしているところに、一番この場に向いている人物

が来た。

翔護 「っこんのバカ炎鬼！！なにいきなり神力使って攻撃してんだ！！バシィン！！！」

炎鬼 「痛つてえ〜〜！！！！誰だ！なにしゃ……が……つて翔護！？」

氷臥 「翔護さん！やったね兄さん、翔護さん見つかったよ！」

翔護 「やったねじゃねえ！氷臥、お前もなんで炎鬼のバカを無理にでも止めなかつたんだよ！！！」

翔護に会えた事に喜んでいた二人だが、その人物からの久々の説教に少しばかり冷や汗が出ている。

氷臥 「いや、僕も止めたんだけど、ちょっと目を離した隙に……」

そう言ってジト目で炎鬼を見つめる氷臥。

炎鬼 「な、何だよ！俺が悪いって言うのか！？」

翔護 「お前が悪いんだよ！」

そう言ってまた頭を叩かれる炎鬼。

ようやく事態の收拾が出来たフェイトが翔護に尋ねる。

フェイト 「翔護さん、この二人とは知り合いなんですか？」

フェイトの質問になぜか炎鬼が答える。

炎鬼 「ああそうだぜ！同じ組織だからな！ところで姉ちゃん、だれだ？

翔護の彼女か？」

炎鬼の後半の言葉を聞いて突如茹でダコのように顔を真っ赤にしてバルディッシュを左右にブンブン振り回し、慌てるフェイト。

フェイト 「かかかかかか、彼女なんかじゃじゃじゃじゃじゃじゃじゃないよ

よよよよおおおおおおおお？？？？？？！！！！！」

その動揺っぷりは周りから見たら「ああ、YOU恋してるじゃん  
っっていう感じ

である。だがしかし！！我らが翔護はその時、一緒にいたアギトとじゃれていた！

翔護 「ん？どうかした？」

氷臥 「こつちでも相変わらずなんですね……」

そんな翔護を見て氷臥は零法町の時と重ね合わせて有る意味  
翔護の事を感じていた。

翔護 「何の事だ？まあいいか！アギト、帰ったらまた自己紹介だぞ！」

アギト 「ええ〜またかよ!？」

炎鬼 「なんだこのちっこいの？まさか翔護の……子？」

またしても炎鬼のバカみたいな発言にアギトは抗議し、  
翔護は静かにキレた。そして茂みの近くでまだフェイトは妄想に卜  
リップ  
している。

アギト 「あたしはユニゾンデバイスだ！」

翔護 「はあ、炎鬼お前ってやつは……帰ったら無呼吸力バ  
イの刑  
だな。」

無呼吸力バディ！それは、審判である翔護が良しと言つまで呼吸を  
しては

だめという鬼の様なスポーツである！！

尚、勝手に呼吸した場合翔護の聖拳流のサンドバッグである！

翔護 「そんなことより、どうしてお前ら二人がこの世界に居るん  
だ？

俺が連れてきた記憶は無いから……またボスがなんかやらかし  
たか？」

翔護が何気なく発した質問に氷臥は黙りこみ、あの炎鬼でさえも  
俯いてしまった。

翔護 「……………何かあったのか？」

すると炎鬼が顔を上げて意を決したように語りだした。

炎鬼 「翔護、ボスが……………ボスが死んだ。」

side out

）翔護side）

は？炎鬼は今何と言った？

ボスが死んだ？

ありえない。寿命で死ぬならまだ納得できるが、生憎俺ら神は最低でも

80までは生きる。しかしボスはまだ50代だ、ありえない。

ならなぜ死んだ？

一般人に殺害可能か？ 答えはNOだ。  
しかもボスは守備に関してほぼ最強。  
一般人は愚か、そこらへんの低級神でも傷は付けられない。

ならなぜ死んだ？

答えは………邪神。

奴なら可能だ。奴はあらゆる邪の集まった神。  
その強すぎる力故に神界を追放された神。

ああ、そういう事なのか……

俺が考え込んでいる内にどうやら自分たちがどういう経緯でこの世  
界に

来たのかをフェイトと通信越しではやてに氷臥が説明していた。

炎鬼 「すまん翔護！！俺達………何もできなかった！！」

氷臥 「ただ黙って見ている事しかできませんでした！！雷人さんが戦って  
傷ついているのに、ボスが僕たちを逃がすために邪神を足止めしてくれて  
いたのに、見てる事しかできませんでした！！」

こいつらはこんなに自分を責めて……本来なら俺の責任でもある。  
邪神を野放しにしてきてしまった俺の責任だ。

こいつらがこんなに深く悩む必要は無い。

翔護 「二人とも、いいんだ。ボスもこの結末が分かって俺のいる世界

に二人を飛ばしたんだと思う。それにわずかだが邪神の力もこの世界から

感じる……ボスは俺らに託したんだと思う。

この何百年にも及ぶ俺たちの戦いに終止符を打つために……」

俺の言葉にさっきの表情に戻りつつある二人。  
だが、それと同時に怒りの表情になった。

炎鬼 「翔護、やっぱり邪神の奴は生きてるんだよな……」

氷臥 「ボスと雷人さんを殺して、さらにこの世界まで来て、どれ  
だけ  
犠牲をだせば……」

翔護 「奴の事は俺たちが蹴りをつける……。今はとりあえず  
奴を倒すために力をつける。そのためにいったん帰還するぞ。  
フェイト！皆に連絡してくれ、反応の正体を見つけたから帰還する  
ぞって」

フェイト 「わかりました！」

そう言って念話で皆に連絡を入れるフエイト。  
それを不思議そうに見つめる炎鬼と氷臥。

炎鬼 「あの姉ちゃんなにやってんだ？」

氷臥 「僕もわかんない……」

あ、そうか。この二人は来たばっかだからこの世界の性質を知らないのか。

後で六課に戻ったらおしえてやるか！たぶん驚くだろうな……

アギト 「あ、兄貴へりが来たみたいだ！」

翔護 「よし、じゃひとまず六課に戻るか！」

こうして俺たちは六課に戻って行った。

新しい仲間を連れて……………

（翔護side out）

第20話 再会（後書き）

今回は少し短めです。

感想、指摘、誤字脱字など、どんどんお書き下さい。

作者は感想をいただくとよろこびます！

第21話 ドラゴンボールのあの人じゃないよ？（前書き）

はいっ！久々の更新いただきました！

ごめんなさい！

それと皆さんにお知らせなんですが、もう一人くらい捨石感覚でオリキャラを入れるかもしれませんが、なので初めて目にした方はえ？誰こいつ？みたいな事をしないで温かく迎えてあげて下さい。

第21話 ドラゴンボールのあの人じゃないよ？

（side）

翔護 「はいつ！というわけで今日からこの二人が民間協力者にな  
つて  
くれました！拍手！パチパチ」

炎鬼 「早坂炎鬼だ！よろしく！」

氷臥 「早坂氷臥です、よろしくお願ひします！」

全 「……………」よろしくお願いします!」「……………」

今六課のメンバーはブリーフィングルームで新しい仲間を受け入れていた。

先の任務で加わった炎鬼と氷臥は翔護によって（おもに職権を使って）スムーズに民間協力者になる事が出来た。

なのは 「そう言えば二人って双子?」

なのはが二人を見ながら自分の疑問を言う。

氷臥 「はい、双子で今年に17になります。」

氷臥がそう答えると、ボソツとスバルが「に、似てない……」とコメントしたのを炎鬼は聞き逃さなかった。

炎鬼 「てめえ！今俺の事を氷臥とは天と地位の差があるくらい似てない  
って言ったろ！」

案の定キレた！

スバル 「そこまでは言っていないですよ！ただ、氷臥さんの方が落ち着き  
があるな〜って思っただけですよ！」

炎鬼 「ほほう〜なら俺は落ち着きがないって言うのか!!」

翔護 「今この時点で落ち着いてないだろうが……ゴキッ  
！」

痺れを切らした翔護がちょっと荒っぽいやり方で炎鬼えお強制的に  
黙らせた。氷臥は零法町では日常的な事なので見慣れているが、  
他のメンバーは恐怖した。曰く、「翔護さんは怒らせてはだめだ・  
・と  
」と

はやて 「まあ新人追加2名はうれしいけど、空き部屋あったかな  
あ？」

今六課は新設の隊舎だが、なにも翔護達しかいないというわけでは  
ないので  
当然他の人たちも隊舎に止まっている。なので、炎鬼と氷臥の部屋  
があるか  
分からないのである。

翔護 「ああ、それについては問題ないよ。二人とも俺の家に連れ  
ていくし。」

たしか、アギトまだ空き部屋あったよな？」

アギト 「まだ全然あるよ！なんせ結構金をつぎ込んだからな！」

アギトの自信たっぷりの回答に炎鬼が首を傾げながら翔護に質問した。

炎鬼 「結構つぎ込んだって、翔護お前いくら使ったんだ？」

しばらく考えるそぶりを見せたあと、

翔護 「うーん、大体1億……くらいかな？」

つとあっけからんと答えた。その答えを聞き氷臥が口をパクパクさ

せている。

氷臥 「い、1億って……一体どうやったらそんなお金が？」

炎鬼 「俺の給料でも一億……無理だ!!」

頭を使ったせいか、少し頭を押さえている炎鬼と翔護の金の出所を不思議に思う氷臥。さすがに宝石を売ったら数十億でしたくとは言えず黙っている

翔護。

翔護 「まあ、俺の話は此処までにしておいて……っつてなんだ  
はやてと言い、フェイトと言いその目は？」

翔護達が家の話で盛り上がっていると、はやてがじーっと翔護を見

つめ、

フェイトは好奇心で翔護を見つめていた。

はやて 「いやな？うちそういえば翔護さんの家に前に行きたいな  
って

言ったらうまくはぐらかされた気がして・・・な？

せやから、うちも翔護さんちつれてって~~~~~!!」

フェイト 「わ、私も翔護さんのおうちに行きたいです！」

目をキラキラさせながら二人が見つめてくるのに翔護も戸惑った様子である。

翔護も周りにヘルプを求める視線を送るが、全員目をそらす始末である。

翔護 「まああれだ、フェイトはまだ良いとして・・・はやては  
ほら、仕事と

か有るし、ま、また今度だな！」

フェイト 「（フェイトはまだ良い フェイトが良い！？キヤー翔護さん大胆！）」

はやて 「っな！？うちだけ仲間はずれかいな！」「さあーて炎鬼、氷臥  
今日は仕事が終わったらパーティーでもするか！」って無視すんなあ  
！！」

その後翔護達が出て行ったあとははやての聲が木霊した・・・

はやて 「ほんでうちはホンマに翔護さんの家にいけないんかい！？」

さあそれは翔護次第じゃないですか？ （天の声）

はやて 「ははくん、ならうちにも考えがあるで……」

ふむふむ考えとは？ （天の声、通称天さん）

はやて 「そんなの天さんに言ったらバレてまうがな！だから内緒や！」

こうしてはやてもなにか思いついたようでグヒヒと笑っていた。

## 訓練室

スバル 「っは！せいっ！とりゃあああああ！」

翔護 「スバルあと少し前に屈んで殴ってみろ！重さが変わるはずだ！」

所変わって此処は訓練場。

そこで今スバルは翔護に格闘戦の稽古をつけてもらっていた。

アドバイスをもらってそれを実行したとき、思わぬ乱入が入った。

スバル 「はいっ！はああああ」「あ、翔護さん！」え？っつてうわあ  
ああああ  
ああああああ！……！」

ゴスツッ！！

何も知らずに訓練場に入ってきた氷臥がスバルの正拳をお腹のど真  
ん中  
に受けてしまいその場に膝をついていた。

氷臥 「っグフ！っく……君の拳……世界を・狙えるよ・  
……」

スバル 「す、すみません！！すみません！」

必死に謝るスバルをよそに氷臥の顔色はどんどん悪くなっていった。その様子を見て翔護は少し笑いをこらえていた。

翔護 「ぶくくく！いやはや、しかし氷臥に此処まで言わせるとは、スバルお前も大したもんだな！」

スバル 「わ、笑いごとじゃないですよ！本当にごめんなさい！」

氷臥 「ま、まあ大丈夫だから。もう平気だよ。」

頑張って立ち上がり何でもないように立ち振る舞う氷臥。  
そんな氷臥をみてやっとな落ち着くスバル。

そして相変わらず笑っている翔護……

翔護 「つぶつぶくくく！はあ、少し休憩しよう……くくく！」

そんな笑いながらの言葉に二人はもうあきれた感じで翔護について  
行き

食堂で休憩することにした。

|| The 食堂! ||

バクバクバク！モグモグ！むしゃむしゃ！

おわかりだろうか？

これらの音はすべて一人の人間から出ているのである。

スバル 「ふえ？ふあふえかふあにかふいふいまふいた？」

訳 「え？誰か何か言いました？」

氷臥 「うん、とりあえず口の中の物を全部胃に持って行こう！」

目の前で大量に盛られたサラダとミートスパをたったの5分で食べるスバルの様子を見て氷臥は吐きそうになりながらスバルを注意している。

翔護 「ちなみに今この光景は俺がお前に見せたかった光景の一つだ。」

氷臥 「どちらかと言うとあまり見たくは無かった……」

気分が悪そうに氷臥が言っている中、その人物であるスバルは？  
？って

顔をして首を傾げている。

スバル 「そう言えばなんでティアは翔護さんの事を”兄さん”  
って最近  
読んでるの？」

そう、翔護とティアはこの間ひそかに模擬戦を行い、その結果  
ティアが翔  
護に懐いてそう呼んでいいか？と聞かれたのを六課メンバーは知  
らない。

翔護 「ん？ティアと模擬戦してそのあとに呼んでいいか？って聞  
かれた  
から別にいいよって答えただけだよ？」

スバル 「ふうん……じゃあ！私も翔兄いって読んでいい？」

今の話の流れに乗ってスバルも便乗しだした。  
氷河はのんびりと紅茶を飲みながら二人のやり取りを見つめている。

翔護 「まあ別にかまわないが……なんでだいきなり？」

スバル 「なんかティアばかりずるいと思ったから？」

と自信なさげに首をかしげる。

翔護 「なんでそこ疑問系？てか氷臥もいい加減紅茶飲んでないで  
ご飯食べる？」

あまり箸が進んでいない氷臥を見て仕方がないなあといった感じに注意をするが、氷臥は「なんかさっきの見てたら食欲が……」などと

腑抜けたことをいつている。

氷臥 「大丈夫だよ翔護さん、ちゃんと食べるから……とりあえず今はゆっくりさせて……」

そういつてまた紅茶をすすり、遠くを眺めている。

翔護も仕方がないという様子で食堂を後にしようと席を立つ。

スバル 「それじゃまた今度格闘を教えてくださいね！」翔兄い！  
”

翔護 「ふふ、早速か。まあ暇があったらな！」

新しい呼び名にむず痒さを感じながら食堂を出て行った。

side ends

第21話 ドラゴンボールのあの人じゃないよ？（後書き）

感想お待ちしております

## 第22話 進みゆく物語（前書き）

はいっ！久々の更新です！

まだ見てくれている人はいますか？

最近本当に自分の描いている作品が面白いのか不安です・・・

## 第22話 進みゆく物語

side

|| とある研究所 ||

ジェイル 「ふう、とりあえず計画の方はこのまま進行してと…  
(ボタン!)  
うん? ウーノそこにいるのかい? いるんだったらコーヒーの御代り  
を頼むよ」

カツン！カツン！

ジェイルは呼んでも反応のないウーノに疑問を抱きながら後ろを振り向いた。

ジェイル 「ウーノ？早くコーヒーを……！！貴様誰だ!？」

するとそこにいたのは全身を黒ずくめにした一人の男が扉を背にしてたっていた。

608

邪神 「俺が誰かって？さあ〜？だれかなあ？」

その小馬鹿にしたような態度にジェイルは思わず怒声を浴びせようと思ったが、  
頭を冷静にして言ったん考える。

ジェイル 「(まで、此処の警備は決して手薄ではないはず・・・) 君はいつたい どうやって此処まで来たんだい？警備は厳しいはずだが？」

すると邪神はきよとした顔でジェイルを見つめる。

邪神 「警備ってまさかあの変な機械の事言ってるのか？だとしたら俺を馬鹿にしたよ  
うなふざけたガラクタだったな！！ドン！」

瞬間ジェイルの腹部めがけて邪神の鋭い右拳が突きささる。

ジェイル 「っグフ！？き、貴様！！」

腹部を抑えながら一丁の拳銃を懐から取り出し邪神に向けて発砲する。

弾丸は計3発放たれた。だが……

邪神 「へえー！お前銃なんて持ってんのかあ」

すべて避けられ、さらには相手の接近を許してしまった。

ジエイル 「馬鹿な！？この近距離だぞ！」

相手の接近を許しながらもカートリッジに詰まっているすべての弾丸を使いきるまで邪神めがけて発砲する。

しかし、結局一発も弾は当たらず、かする事もしなかった。

邪神 「なあんだ、お前”魔法”って奴を使わねえのか……なら、もう利用価値もないし……貰うか!!!」

ジェイル 「ッヒィ!! つぐ!ぐ` うばあああああ`!!」

邪神がそういつてジェイルの頭を掴むと、ジェイルの体を”黒い何か”が覆い  
うごめいて行く。

そして数分がたつとそこにはもう”ジェイル”しかいなかった。

ジェイル 「なるほどこいつの笑い方はククク!か。ん?ほほう・・・  
なかなかな

に面白い知識を持ってんじゃねえか!はは`ん、風のガキは管理局  
つてここ  
にいんのか・・・」

否、そこにはもう“ジェイル・スカリエッティ”すら存在しなかった。

ジェイル 「待ってるよ！！必ずこの俺様がオリジナルを頂くからな！！！」

こうしてジェイルの体を手に入れた邪神は静かに部屋を出て行った。

side out

くドゥーエ sideく

はあ、なんだか此処最近博士の様子がおかしい気がするわ。  
しゃべり方とかは前と同じ気がするんだけど何かが違う気がする。

私だけでなくトレーヤウーノも感づいてはいるみたいだけど一体博  
士に

何があったのかしら？

ああ、それにしても今日は久々の充実した日だわ！

いっつもあの脳みそ達を相手にして鬱憤がたまっていたけど、今日は  
違う仕事が終わって来た！

しかも仕事内容が……。「第389管理世界への生物調査」

最初見たときはなんで私がつて思ったけど、依頼主が……

『時空管理局少将 風切翔護』

ツえ！？うそ？久々に彼に会えるの！？そう思った瞬間胸がドキドキするのを感じた。

彼に最初に会ったのは確か……

「2年前」

ドゥーエ 「はあくどうして私がこんな強盗を制圧なんて……」

あの日は万年人手不足のせいで近くの強盗を取り押さえると言っ  
任務があった。  
現場についてももの15分くらいで制圧出来た。

ドゥーエ 「早く戻って報告書を書かなきゃ……」

そう言って私が犯人たちから目をそらしたすきに、遠くの方にいた  
一人の  
男が私に向けてもっていた質量兵器で発砲した。

気が着いたのは音がなってからだった。

だが、不思議な事に体中の何処も痛みがない。

そして気づく。自分よりも大きい男の人が白いアタッシュケースを盾にして私をかばってくれていたのを。

翔護 「そこのお前、今の容疑にプラスで殺人未遂だからな！覚悟しろ。

これからお前には考える時間が与えられるぞ！」

そう言って持っていたケースを発砲した犯人に向けて勢いよく投げ  
る。

犯人 「べばおらあ!?!」

ケースは顔面に命中して犯人は一気に静まった。

ドゥーエ 「あ、ありがとうございます。時空管理局のドゥーエと申します。」

翔護 「別に良いですよ。あ、申し遅れました同じく管理局所属の風切少将であります。」

ん？少将？つてことは将官！？  
結構若そうに見えて以外・・・

ドゥーエ 「それでは報告書の作成もあるのでこの辺で・・・ッ  
！」

その場を去ろうとした時、突如足が痛みだした。  
よく見るとわずかに割れたガラスの破片が刺さっていた。

翔護 「これは！？大変じゃないですか！待って下さい今治療します。」

そう言っただけで彼は私の足を触ると短く何か呟く。すると、私の足に柔らかな  
風が吹き、もう一度見ると怪我が完治していた。

ドゥーエ 「なんて高度な治癒魔法・・・すごい！」

なんて感心していたら、突如体が浮いた《……》  
それはなぜか？正解は彼が私をその……お、御姫様だっこしてい  
たから／＼／

ドゥーエ 「え！？どついつ事ですか!？」

翔護 「いや、いくら治ったからってその足で歩かせるわけにはい  
きませんよ。」

局も近いですしこのまま連れて行きます!！」

いや、行きます!！じゃなくて、彼は気付いていないのだろうか？  
周りからの視線に。私はたまらず顔を紅らめて目をつぶった。

・  
・  
・  
・  
・

・ ・ ・

そつだ、そのあと私からお礼も兼ねて食事に誘つたら結構気があつて、

今じゃたまによくメールするまでになつたんだ。

まあ向こうは私の気持ちに気づいてないだろうけど・・・

そして気づいた。さっきの調査依頼とは別にもう一枚紙があるのに。

ドゥーエ 「ええーとなになに？」久しぶりドゥーエ。たぶんまた本局からの

仕事が忙しくて休めていないだろうと思ひましてこの調査依頼を出しました。

7泊8日で、しかもリゾート地なので是非ゆっくり調査をしてきて下さい！

あ、ちゃんと給料出ますから安心してねえ。

翔護より『「

ああ〜なんでかしら胸のあたりがあつたかくなつていく。  
本当に彼つて優しいのね

でもどうせなら彼と一緒にきたかつたなあ〜……………つま、そ  
れは欲張り  
すぎかな？

さて、早速旅行……………いえいえ！ちよ、調査の準備をしなくちゃ！

その後私は脳みそ達の制御はほかの者に任せて任務に向かつた。

やっぱり翔護と行きたかったなあ

くろごうHside out

## 第22話 進みゆく物語（後書き）

ドゥーエさんだしてみました

今回は今までの解説みたいなのを投稿しようと思います。

ではでは今回はこのへんで

感想・指摘待ってます！

**特別話 クリスマス前夜編（前書き）**

おひさしぶりーのえんぐいいです！

そろそろあけおめですがその前での更新！

今回の内容はまあぶっちゃけると準備する側も大変だということですよ

特別話 クリスマス前夜編

side

翔護 「ん？」

翔護は管理局での仕事を終え自宅でシャワーを浴びていた。その時ふと、誰かの視線を感じる。

翔護 「アギトか？いやもう寝ているはずだし……炎鬼のバカか

氷臥の奴か？」

しかし、いまだに反応がない。

なので自分の思いすごしだろうと感じ、風呂からあがる事にした。

翔護 「ふわぁあぁ、アギトの奴ぐっすり熟睡だな」

自室の机の上にちょこんと置かれたミニチュアのベッド。

それが、ユニゾンデバイスであるアギト専用寝具である。

そこに気持ち良さそうに少し笑みを浮かべながら寝ているアギト

翔護 「なんだか俺も眠くなってきた……駄目だ！寝る！！」

そう宣言し勢いよくベッドに飛び込んでいく

そこで翔護の意識は途絶えた。

（10分後）

なにやら翔護の部屋に不審な影がある

翔護 「スウーZZZZスウピ〜ZZZZ」

??? 「ふう、やっと寝たか………まったく勘がよくて焦っちまった！」

そう言つて謎の人物は手に持ったカメラで翔護の寝顔を撮影する。撮影が完了すると、どこから取り出したか分からない白い大きな布袋にカメラを締まって部屋から出ていく。

??? 「これでプレゼントの作成は完了つと……後は地球の翠屋か。」

全身赤主体の服と帽子をかぶった謎の男は翔護の家を一切の音も立てずに  
飛び出ると何か唱える。

??? 「クリスマス使用召換！！出でよツイントナカイ！！」

すると目の前には2頭の凛々しいトナカイがご丁寧にソリを装着して現れた。

??? 「つたく・・・創造神も神使いが荒いなあ・・・なんで毎年毎年

俺がこんな事をしなくちゃいけないのやら・・・」

男はネチネチと文句を言いながらソリに飛び乗り次なる目的地に向かう

準備をする。

??? 「はあいくら俺が“夢の神”だからって子供たちの夢をこんな形で

叶えなくてもいいのになあ」

トナカイ兄 「仕方がないですよネム様、それが我らの務めなのですから。」

トナカイ弟 「そうですね！！さあ今はサンタクロースになりきり  
ましよう！」

ネム 「ええ……それ去年も聞いたし……」

ネムはげっそりと疲れた顔をしながらトナカイを走らせる。

道が無くなってもトナカイたちは空を駆けて行き、それはまるで子  
供たち

の願いをかなえてくれるあの赤くて髭のもじやもじやしたおっさん  
そっくり

であった。

トナカイ兄 「ネム様、髭を忘れております……」

ネム 「いつけね!!忘れてた!」

その日、各次元世界で空を走るトナカイを見たという情報が多数寄せられた。

side out



## クリスマス編オリジナルキャラ紹介

名前 ネム

年齢 不明

身長 175cm

髪 白

役職 夢の神様 意外と地位はあるけどパシリ役

装備 赤い服・・・ぶつちやけるとサンタさんの格好  
普段はそんな格好ではありません！

## 説明

普段は人々の夢をできるだけかなえられるよう障害がなるべく出ない用に努力したり、金銭的な余裕などで夢をあきらめかけている人の手助けなどをしている。

また、夢を操作することができ、犯罪思考の者を善人に変えたり、眠っている時に見る”夢”を見てその望みをできる範囲でかなえている。

クリスマスの時季だけ、

創造神に「お前夢の神なんだって？だったら子供たちの夢叶えて来いよ」

などと無茶な任務を何世紀か前から言い渡されそれ以来

毎年この時期になると子供たちのプレゼントを集めにいろいろ飛び回っている。

名前 トナカイ兄

役職 神獣

説明

ネムに使えるトナカイで毎年この時期は弟と一緒にソリをひっぱっている。  
礼儀正しい。

名前 トナカイ弟

役職 神獣

説明

ネムに使えるトナカイで毎年この時期は兄と一緒にソリをひっぱっている。  
兄と同じく礼儀が正しい。

特別話 クリスマス前夜編（後書き）

毎回思うけど文才があがんねえな

ネムも毎年毎年大変な思いをしております。  
てかすんごい即興で描いたから適当感がいとない

もう少しうまくなりたいです！

感想待ってます！

特別話 クリスマス本番編（前書き）

いやはや、エムゼロって漫画とダブルアーツっておもしろいですね。

彼女ほしい……

特別話 クリスマス本番編

その日の機動六課にて

＼フエイトside＼

朝の日差しが私の顔に当たりゆっくりと目を擦る。  
そしてぼやけていた視界が徐々に鮮明になって行く  
その途中で気がついた。

フェイト 「あれ？枕の横に何かある……」

赤い手紙に Merry Christmas!! と書かれていて、  
サンタとトナカイの  
イラストが入っている。

とりあえず私はその手紙を読んでみる事にした。

フェイト 「ええつとなになに・・・

『やほつ！成人になる最後のクリスマス君はどうお過ごしかな？  
友達と朝まで宴会？彼氏とデート？いやいやいや、思いをなかなか  
伝えられない君にそれは無理だよww？けれど大丈夫！そんな寂  
しい

君にもサンタさんからはクリスマスプレゼントをあげちゃうよ！

それじゃあね！今年の聖夜も君に幸あれ！ See you ag

ain

by サンタクロス』・・・

なんか無性にこのサンタクロスに頭が来た。

何？！”無理だよww？”って！完璧馬鹿にしてるじゃない！

絶対友達にしたいくないタイプだね・・・

まあ気を取り直して、そのプレゼントって一体なんだろう？  
中身が気になるので付属の袋を開けた。

フヘイト「……………ええ！？」  
ズンズン、ズンズン、ズンズン  
翔護の

写真が入ってるの！？／／／／／／／／

ええええええええ！??? なんてなんでなんで?????!!  
!!  
顔が赤くなってるのがわかつちやうよ／／／／

フェイト 「わあゝシャワーシーンだ。体けっこう締まってるノノ

・・・(上半身だけです。下はセーフです!!)  
あっ、こっちは寝顔だ、かわいいいゝゝ」

いつもは凜々しくて頼りがいのあるお兄さんって感じだけど、寝顔はすごく子供っぽくてそのギャップがすごくかわいい

フェイト 「サンタさん・・・ありがとうございます! 私一生大切に

します！」

気のせいかどこかで私にサムズアップをするサンタさんが思い浮かんだ。

フェイト 「よし！！張り切って仕事行ってきます！！！」

そして私は急いで着替えて意気揚々と六課に向かった。

なのは 「フェイトちゃん……朝かららっるぞいよ……」

あ、相部屋だったんだ！ テヘッ

くフイトside outく

（ side ）

フェイトが丁度六課についたところ、他のメンバーにもクリスマスのが起きている。  
奇跡

スバルの場合

スバル 「そ、そんな……信じられない……此処に、此処に

、翠屋特製純白のケーキオブタワー があるなんて!!!」

六課のロビーにご丁寧にスバル・ナカジマ様と書かれた札があり、疑問に思いつつも封を開けてみると、中からウェディングケーキにも負けず劣らずの大きさの巨大ケーキが姿を現した。

凝った事にサンタとトナカイの砂糖菓子や、チョコのソリ、抹茶やメロンシロップなどを使ったクリスマスツリーまで描かれている。

その洗礼された美しき生クリームのに姿にスバルはその場で涙を流しそして本能の赴くままにわずか10分足らずで完食した。

完食し、幸せな気分には浸っていると手紙の存在に気がつく。おもむろに中身を読んでもみると、

『拝啓、スバル・ナカジマ様……秋も終わり段々と寒くなるこの

季節、スバル様はどうお過ごしでしょうか？さて、今回はクリスマスと

言う事で、わたくしサンタからささやかではありますが此処にプレゼント  
をご用意いたしました。物足りないとは思いますがそこはお許しく  
ださい。

これからも健康な生活を送り、来年もまた良い子でいるのであれば  
お会い

致しましょう。敬具

サンタより』

さっきのフェイトへの文とはえらい違いである。  
まあそれはさておき。

スバル 「サンタさんありがとう!!! 私来年も良い子にしてまーす  
!!!」

## キャロの場合

キャロも自分の住む女子寮で目を覚ます。  
そして同じくして枕元に何かを発見した。

キャロ 「なんだろこれ？とりあえず開けて見よ」

A4サイズのクリスマス使用になった封筒を開けると中から出てきたのは

キャラ 「休みの申請書？えっ！？私とエリオ君の分がもう取ってある！！！」

なんともご丁寧にお二人の分がきっかり申請してある。

25日の朝から晩まですべて自由！

さらにキャラはもう一つ同封されていた物を見て笑みを浮かべた

キャラ 「これって……ミッドの遊園地のマスターパスだ！しかも2枚！！」

やった！！これでどのアトラクションも無料で乗れる」

そういつてからのキャラの行動は早かった。

ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド  
ド

ガチャ

エリオ 「はいつてキャラロ?どうしたのそんなあわてて」エリオ君  
遊園地

に行くよ!!」「つてええ!?!まって準備g」「良いから早く!!」「そ  
んな引つ張らない  
で!!!」

エリオの説得もむなしくずるずると引きずられていった。

その様子を遠くから見ていたネムは

ネム 「お譲ちゃん……がんばれ!!!!」

と暖かく見守っていた。

ちなみにエリオのプレゼントはキャロとのペアネックレスだった。

## 他の皆のプレゼント内容

なのは・・・・・・・・ユーノとの休日ミッドデート

はやて・・・・・・・・守護騎士たちとの温泉旅行

ティアナ・・・・・・・・97管理外世界からなぜか知らないが許可が下りて

所有を認められたデザートイーグル一丁とバレット

グリフィス・・・・・・・・六法全書

ヴァイス・・・・・・・・なんか黒い色をした飛行機から人型に変形するフラツ・・・・・・・・なんとかっていうプラモデル

炎鬼・・・・・・・・純粹に欲しかったモンハン3

氷臥・・・・・・・・同じくモンハン&ゴッドイーター

アギト・・・・・・・・低反発枕&お菓子1年分

リン・・・・・・・・はやてに一日甘えて良い権利

ヴィータ・・・・・・・・アイス一年分&ウサギぬいぐるみ大中小各一個  
ずつ

そしてこんな所でも  
.  
.  
.  
.  
.  
.

108部隊

ゲンヤ 「ギンガ、お前に届け物だ。」

ギンガ 「え？私宛に？」

突然お父さんに渡された荷物に疑問を抱く。  
なんだろうと思いつつ中身を確認してみるとそこには……

ギンガ 「これって………箸？でもなんで？」

なぜ箸が？などと疑問に思いつつ同封されていた手紙を読むと。

『この手紙を見ているお譲さんはじめまして。私が全世界の夢を唯一操る事のできるサンタクロース……通称”サンタ”です。まずはじめに貴方はこの中身を見てこう思ったはずですね。箸が入って

いるのか？つと。確かにそれは箸です。でも、ただの箸ではございません

たぶん今頃どこかでこの箸を探している人がいるんじゃないですか？

確かその人の名前は風……風き……しよ……、なんだっけ？

名前が思い出せないので写真を同封しておきます。

まあこの箸をどう使おうがあなた次第です。それでは良いお年を並びに

Merry Christmas!! byサンタクロース』

手紙を読み終わると一枚の写真が床に落ちた。  
一体誰なんだろう？と思いつつ写真をみると、

ギンガ 「えっ？えっ！？じゃ、じゃあこの箸って……翔護さんの！？」

なんと写真に映っていたのは訓練中の真剣な表情の翔護さんの顔でした。

はあ、やっぱりいつ見ても翔護さんはかっこいいなあ／／／／

ギンガ 「確か手紙にはこの箸をどう使おうが私次第って有ったし……」

そして私はそつと箸を自分の机にしまい、写真を飾った。



（翔護 side）

翔護 「つで、俺の分は？」

ネム 「お前も十分大人って歳だから無いよ」

翔護 「じゃあ俺って今回盗撮されただけ！？？」

（翔護 side out）

翔護 「終わりかよ!?!?」

特別話 クリスマス本番編（後書き）

無理やり創ったこのクリスマス編

これはただ単にえんヴいいがクリスマス大好き男だからです。  
どうしようもないくらい好きなんです。

ごめんなさい。

彼女ほしい……

感想待ってます

第23話 新たな敵、そしてイレギュラー

くスバルsideく

昼近く太陽がまだ輝いている頃……

スバル 「はあもう疲れたよティア~~~~~!!」

ティア 「うっさい!馬鹿スバル!あんながアイス食べたいって  
言った

から此処まで来たんでしょ!」

私スバルこと、スバル・ナカジマは只今現在相棒であるティアと  
一緒にミッドのクラナガンにいます!

それはなぜかと言つと

.....

く訓練にてく

なのは 「はいじゃあ今日の訓練は此処までだよ！」

エリオ 「はあはあ、疲れた……」

ティア 「さすがに私も厳しいわね……」

今日の訓練はなんか分からないけどなのはさん達のヤル気？がいつもと

少し違う気がした。

なんて言うんだろう？すごく真剣に私たちを見極めていた気がする。

それでなんとかなのはさんから勝利を掴み取った時に隊長達がすこし微笑んでいた気がした。

668

なのは 「それでね？実は皆に内緒にしてたけど今日の訓練は第二段階の

テストだったんだけど結果は・・・「合格だよ！」ああ！フェイトちゃん私

のセリフ取らないでよ……！」

って、言うのはやくない！？

ティア 「結果はやつー!!」

あ、やっぱりティアも私と同じ感想だったんだ！エリオ達も少し戸惑いつつも微笑んでるしやつぱうれしいんだ。

まあ私ももちろんうれしいけどー！

ヴィータ 「まあこんだけやって不合格だったらぶつとばすけどなあー！」

そう言って脅してくるヴィータ副隊長。でも口元はやっぱり笑っていた。

途中翔兄いとも目があったけどサムズアップしてくれた。

なのは 「それじゃ今日の訓練は此処まで！」

ん？

あの鬼の様な訓練が午前で終了!?!?!?

キヤロ 「本当ですか!?!?」

驚きのあまりあのキャラ口ですら確認してしまっ。

フエイト 「うん、だからゆっくり休んでね。」

ティア 「良いんですか？」

ティアも確認している。それに翔兄いが付け足すように

翔護 「ああ。さすがに俺たちも休みたからな……。ああそれと、

時間何に戻ってくるんだったら町に行っても良いからあゝ」

なんかちよつと眠たそうだなあたぶんこの後絶対仮眠室に翔兄い行くだろうし……

翔護 「ふわあゝんじゃ皆楽しんで来い！！アギト、お前はシグナムと出かけ

ても良いけど遅くなるんじゃないぞ。さてと……

寝る！！」

そう言って翔兄いは片手をパタパタと振りながら部屋を出て行った。

・ ・ ・ ・ ・

なんか締まらない気がするけどこんな感じで私たちはお休みを貰った

最初エリオ達と行こうと思ったけど、キャロとデートだし

炎鬼と氷臥は“もっとこの世界が知りたい！”とか言い出して勝手に勝手に出かけ

ちやうし、それで私は自主練をしようとして訓練室に向かう途中だった  
ティア

を誘って町に出たというわけ。

ティア 「それにしても……あなたそれ何個め？」

良い忘れていましたが現在目的のアイス屋に到着して只今リアルタイムで  
アイスを堪能しております！

スバル 「うーん、まだ13個めだけどなんで？」

ティア 「あなた……その数食べてなんとも思っていないのね……」

私の話を聞くと、どこかティアが遠い目をして私を見ていた。

はは〜んさてはティアったら、私のアイスが食べたくなったのかな  
??

もう、素直じゃないな〜

そんなティアのためにアイスを食べさせてようとしたら・・・

キャラ 「こちらライトニングのキャラです！緊急事態なので至急  
誰か  
応答お願いします！！」

緊急事態による休暇終了のお知らせが来ました。

スバル side out

（翔護 side）

キャラ 「こちらライトニングのキャラです！緊急事態なので至急  
誰か  
応答お願いします！！」

突然のキャロからの通信により俺は自宅のベットから飛び起きた。

俺はすぐに音の発信源である通信機を手に持ち転移で隊舎に戻りミーティングルームに向かう。

翔護 「状況はどうなってるんだ？」

すかさず目の前にいたはやてが俺に伝えてくる。

はやて 「キャロの話によると5〜6歳くらいの少女がだいぶ疲弊して

発見されたそうや。またレリックのケースをもった見たいで今皆が向かっています。」

なるほど。どつりでフェイト達がいなわけだ。  
しかしこのタイミングでレリックとなると・・・

翔護 「はやて、どつ思ひ」

俺の質問にどつやらはやても思ひどころがあるらしく

はやて 「うちもそう思います。このタイミングやどつぱり・・・  
・  
ジェイル・スカリエッティが何か企んでるんだと。」

やはりそうか。あのマッド科学者の事だ、おそろくこれは誘いか？  
となると、フェイト達だけだと荷が重いか？

翔護 「炎鬼と氷臥、お前たち行けるか？」

ちょうど部屋に入って来たばかりの二人が俺の言葉に強く頷き返す。

炎鬼 「おうよ！まかしとけて！」

氷臥 「皆で行けば怖くないからね！」

炎鬼は良いとして、氷臥のこのテンションどうにかならぬのか？  
ま、まあいいか。

翔護 「アギト、久々に援護を頼む。ちょっと嫌な予感がするから・  
・  
」

アギト 「嫌な予感ってなんだ？」

翔護 「まだ俺にも分からない。けれども、何か起りそうな・  
・  
」

そんな事を話している内に二人の準備が整ったらしく、俺は現場の  
座標を  
確認して転移した。

side

翔護 side out

ミッド都市部地下

ティア 「アクセルシューター!!、シュート!!」

ガンガンガン!!

その言葉とともに3つの魔力弾が謎の人物に向けて発射される。

一つは右から、もう一つは左から、最後は中央から逃げ道なるべく作らないよう計算されて。

しかし

「???  
「うおつと!?!あぶねえッス!」

「???  
「ボケっとしてっからだよ!?!」

ティア 「なにこいつら!? 早すぎ・・・」 隙ありッス!!」 キヤッ!!」

先ほどからティアナの放つ弾丸をいとも簡単に避ける謎の二人の人物。

別にこれはティアナが弱いわけではない。仮にもエースクラスの實力をもつティアナの射撃を簡単に避けているこの二人がおかしいだけである。

??? 「つちー! ウェンディなに外してんだよ!!」

赤毛の少女がウェンディと呼ばれた子に向かい野次を飛ばす。

ウェンディ 「仕方ないじゃないツスカ！！こいつ結構強いし！！

第一、

ノーヴェは何もしてないくせして偉そうツスよ！！！」

ウェンディがそついうと、突如ノーヴェが動きを止めた。

そして何やら構えると、突如ティアナに向けて鋭い蹴りをぶつけに行った！

ティア 「つくー!!……少し油断したじゃないのー!!」

その光景を見てなにやら勝ち誇ったような笑みを浮かべてノーヴェエがウエンディを見る。

ノーヴェエ 「どうだウエンディ！お前じゃ当てる事が出来なかったけど、

あたしはあいつに蹴り一発当てられたぞー!!」

この時ノーヴェエはこの後ウエンディが悔しがる姿を想像したが、反応は

違った。

ウエンディ 「まあ当てたのは認めるツスけど、普通に防がれて、しかも倒れてすらないじゃないツスカ……」

さすがに此処までの予想外な反応にノーヴェは少し恥ずかしくなり、奴あたりでさらにティアナに追撃する。

そしてこの時ティアナはふと、思った。

ティア 「（私、こんなめんどくさい二人を一人で相手にしなきゃ  
いけ  
ないのか……………はあ）」

}  
s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t  
}

第24話 負を抱きし者

side

ティアアナが一人でノーヴェ、ウエンディの相手をしている頃相棒の

スバル  
はと言つて……

スバル 「管理局です！！大人しく投降して下さい！！」

ナンバーズとは違う敵を目の前にしていた。

その敵と言つのが……

墮人 「うう……あゝ ああああ」

墮人 「ガガギガエゴギヤガガ……」

何を隠そう墮人であった。

幸い目の前の墮人たちはまだLVが1の状態なので倒すことは簡単だ。

だが、行動を制限するだけで今のスバルには浄化することはできない。

浄化とは汚れた者を清める作業で、清き者か、洗礼を受けた者にしか汚れは取り除けない。

なので、実質スバルが墮人の頭を攻撃して気絶させようが、墮人は浄化

されず起きると再び周りに負をまき散らすのである。

スバル 「投降の意思がないとみなし攻撃させてもらいます!!」  
ち  
やんと  
通告はしましたからね!!」

最後通告をしてマツハキャリバーで加速しながら敵に迫る。

対して墮人たちはただ無防備に立ち尽くし、言葉ではない声を発している。

スバル 「てええやあああ!!」

なので簡単にも倒せるのだが……

5分後

スバル 「はあ、はあ、これだけやっても、まだ起き上がるの？」

息も絶え絶えに墮人たちを見つめるスバル。

あれからスバルは簡単に墮人を倒す事には成功した。

しかし、墮人たちはすぐに起き上がりなかなか気絶しない。

その繰り返しによりスバルの体力はどんどん失われていき、結果的には新たに加わった墮人たちにより囲まれてしまったのである。

スバル 「本当はやりたくなかったけど………マツハキヤリバーカートリッジロード!!!」

マツハキヤリバー 『Load cartridge!!!』

カシユン!!!

カートリッジがロードされた事によりスバルに魔力があふれる。

先ほどまでの焦りはすべて捨て、今は自分が行う最大限の事に集中する。

スバル 「大丈夫、私なら絶対にできる！」

集中するとともに段々とスバルの手には魔力が集まり形成されていく  
その光はまばゆく光とてつもない力を秘めているのは遠くから見ても分かる。

墮人たちはそれに気付いたのか攻撃を阻止しようとスバルめがけて  
突進  
を開始するがもう遅い。

なぜなら、スバルの準備はもう済んだからだ。

スバル 「すうううはああ。行きます!!  
一撃必中!!  
デイバイイイイイン バスタアアアアアアア  
アア！」

言葉とともに放たれたのは、かつて自分を救ってくれた人の技、  
なじみ深い忘れられない師からの意志である。

その思いの力は3体の墮人をすっぽりと飲み込んだ。

墮人 「青い絵hg・おいjふあjm w・パオjふいうい!!!!!!」

言葉にならない声を上げ墮人たちはその場に気絶した。

その様子を確認してホツツと胸を撫で下ろすスバル。

が、

??? 「ス……キ……アリダ!!!」

スバル 「!!!??」

先ほどまでの墮人たちは違い新たな墮人が物陰から現れ、油断していた  
スバルに持っていた刀で切りかかった。

スバル 「（嘘！まだいたの?!）」

気が抜けていたせいで出遅れたスバルなんとか一撃を避ける事に成功したが、

スバル 「この人、さっきの人たちとはなんか違う？」

目の前の新たな敵に疑問を覚える。

その疑問に答えるかの様に新たな墮人がゆっくりと口を開いた。

墮人 「アタ……リ・マエダ……オ……レサ……マハレV……」

「?ダ!」

堕人にはレベルがある。

先程までスバルが相手していたのはLv?で操られた人形にすぎない。

しかし、Lv?は多少の人格があり、無鉄砲に行動するのではなく敵の攻撃を交わしてカウンターを喰らわせたり、罠を張ったりなど出来るような存在だ。

知能一つ有るだけで墮人の強さは2倍から3倍に変わる。

さらに観測されているLvの中で一番最高のLvは？で、？は知能が人間で

言つとエリートクラスの頭脳で計算高く、相手にするのは骨が折れる。

話に戻るが、先程の一撃でスバルの疲労は大きかった。

スバル 「ちょっと、やばいかな・・・」

根性で立ちながらこちらに向かって歩いてくる墮人を警戒していると誰かが走ってくる音が聞こえる。

ティアナはまだ戦っているみたいだし、エリオとキャロは敵の召喚士と交戦中という連絡も入った。

ならば敵の増援？ならばと思いより一層緊張して身構える。

だが、それは良い意味で裏切られた。

??? 「氷の弾丸アイスバレット発射!!」

墮人LV? 「ゲギャ!?!?! ナンダ?!?! キサマ!!」

やって来た人物は手にまるで深い深い海の様な色をした青い剣が握られ、  
自分の上司である翔護と同じコートを着用した……

「??? 僕かい？僕はね……………氷の神こと

早坂……………早坂氷臥っていうんだ。」

やさしい青年氷臥がスバルを護るように立っていた。



## 第24話 負を抱きし者（後書き）

指摘でも、なんでもいいので感想がいただければ嬉しいです。

## 第25話 神の洗礼

Side

墮人LV? 「バ、バカナ……ナゼ……コ……ノセカイ・  
・  
・  
二……カミノ……ケシン……ガ……イル……!!!?」

墮人は目の前に颯爽と現れた氷臥を見て、信じられないと言った表情をしている。

対する氷臥はスバルの安全を確認すると神器を構えて墮人の出方をうかがっていた。

氷臥 「答えてあげても良いけど……その前にたぶん、死ぬよ？」

途端、氷臥の周りに30を超える氷の剣が生成されて空中で止まっている。

その様子を見た墮人も苦虫をつぶしたような表情だ。

墮人「Lv? 「ク……キサマ……ゴトキ……コロシテ……ヤル!!」

すると墮人は手に持った刀を構え氷臥に突進していく。

・ 確かにその速さは少し厄介であろう。だが、氷臥にとっては……

氷臥 「やっぱり、いつ戦っても君たちLv?ってそこまで強く無いよね？」

ひよひよいつと簡単に避けてしまえる程だった。

しかもその間に敵のわき腹を神器で凍らせる余裕さえ見られる。

715

墮人Lv? 「ツヌグ!?バ・・・バカナ!!!・・・アリ・・・エナイ!!!」

墮人の驚きの声を遮るかのように氷の剣が10本墮人に突き刺さる。

そして、剣が溶けて水になると墮人が苦しみだした。

氷臥 「どう？痛いでしょ？それは聖水だからね。大丈夫、すぐ楽にして  
上げるから………」

すると墮人は氷臥の次の行動が分かったのか、いきなり焦り出し、いちもくさんに逃げようと駆けだすが、追加で飛んできた剣に行く手を阻まれる。

氷臥 「これから君にはちょくちょくと痛い思いをしてもらおうよ………」

氷臥が地面にヴォーパールソードを突き刺すと、それを中心に円形の儀式陣が現れる。

途端、氷臥以外の、スバルたちの吐く息が白くなり始めた。

墮人がなんとか逃げようと動こうとするが、すでに足のつま先から凍り始めていて、段々と体の上半身に向けて冷気が昇ってくる。

墮人「Lv?」「ア……ア……ユ……シテ……」

命乞いをするが、その声はむなしく響き……

氷臥「ごめん……ヤダ」

そう言つて完璧に墮人は氷の石像となった。

ふと、氷像となった墮人の体が光始め、中から何か黒いものが天に昇つて行つた。

氷臥 「なんとか浄化できた。でも、だいぶ芯まで負に侵されてたから

しばらくは眼が覚めないかな……」

などと呟いていると、後ろからスバルが勢いよく氷臥に抱きついた。

スバル 「あはは！…氷臥すごく強いね！…私じゃ倒せなかったのに！」

自分の事のように嬉しそうにはしゃぎ、氷臥をぶんぶん振り回している。

よほどうれしかったのか、氷臥がタップしているのにも気づかないで今だ尚振り回す。

氷臥 「スバルちゃん……うっ！……もう……ムリ」

ようやく氷臥の表情に気がついたスバルが慌てて振り回すのをやめたが、  
まだ顔が青白い氷臥。

ガサッ

突如スバルの背後から、さっきまで伸びていた墮人3体が氷臥達に

向かって  
突進してきた。

氷臥 「さすがに少し油断した！！氷の守護アイスガード！！」

すかさず障壁をだして防いだが、なかなか攻撃に転じる事が出来ない。

しかも運が悪い事に墮人の1体が巨大なLv?に進化してしまった。

さすがの氷臥も少し冷や汗が流れてくる。

そんな氷臥のピンチを知りスバルが意を決したような顔をして氷臥に尋ねた。

スバル 「ねえ氷臥、どうすれば私でもあれ倒せるの？氷臥ばかりに戦って

欲しくないよ。お願い、私にも戦わせて！！」

確かに氷臥としてもこの場面での戦力は欲しい。

だがしかし、相手はガジェットと違って明らかに強い

そんな相手にスバルを巻き込んで良いのか？

氷臥がそんな事で迷っていたが、それは無意味だった。

なぜなら、スバルの目が決意と覚悟に満ち溢れているから。

ならば、氷臥が迷うことは無い。

氷臥 「それじゃスバルちゃん、これから俺の言つとおりにしてくれる？」

その言葉にスバルは素直にうれしく思った。  
自分を頼ってくれる、自分も一緒に戦えると

スバル 「分かった。っで、どうすれば？」

氷臥 「うん……俺の血を飲んで欲しいんだ」

言っがはやく、氷臥は即座に神器で自身の指先を少し切る。

ぷくうつと血が染み出てくる。

スバル 「い、いきなり血を飲むって／＼／＼／＼」

スバルはなぜか赤面しているが、いかんせんこの間も墮人たちが障壁を攻撃して、ところどころ輝が入っている。

氷臥 「ちょ、ちょっと恥ずかしくないで早くして!!もうもないから!!!」

スバルの気持ちを知ってか知らずか、焦った氷臥が無理やりスバルの口元に指を押し付ける。

スバル 「ンンむむっむうう!!!」

幸か不幸か、見事氷臥の血を飲みスバルが悶えている。

そして、障壁が崩壊して、冷気で周りに靄が現れた。

氷臥 「（スバルちゃん……成功したかな？）」

霧のせいで氷臥もスバルが見えない。

しかも悪い事にLv？こそ氷臥の方にいるが、後の2体はスバルの方にいる。

その事に気付いた氷臥がLv？の攻撃をかわしつつ助けに行こうとするが  
それは杞憂に終わる。

なぜなら、霧の向こうに見えた姿が……

スバル 「いくよ！マツハキヤリバー、カートリッジロード！！」

マツハキヤリバー 『Load cartridge! !』

体中から闘志を溢れさせ、間近に迫る墮人を物ともせず、

スバル 「ウイングロード展開！！はああああああああ！！  
！！」

己の拳で2体の墮人を”浄化”して行く



く洗礼についてく

翔護や早坂兄弟のように、神である者達は墮人を浄化できるが、神の素質の無い人間にはそれが出来ない。

ならば、どうすれば浄化できるか？

それは、神の一部を己の体内に取り込む事で、少ないながらも浄化の力を宿す事が出来る。

今回の描写でも、スバルの中に氷臥の血を取り込むことで、墮人を

浄化する事に成功している。

前の世界では、SP達は皆、守の血か、翔護達の血を飲んで浄化したり、

翔護達の皮膚や体毛、血液などが込められた弾丸や武器などを使用して

堕人を倒していた。

だが、あくまで一部なので弱い堕人は倒せるものの、邪神や、LV？は倒せない。

## 第26話 努力の証（前書き）

間があいてしまいましたが更新です。

## 第26話 努力の証

（氷臥 side）

スバルちゃんの攻撃を見た後の僕の率直な感想は、すごい。である。

実を言うと、僕たちの血を飲んでも体に馴染むまで時間がかかる。

それをこの短時間で終了してしまうと言う事は、スバルちゃんはこちら

側に体のつくりが近かったのか、ただ単に僕との相性がよかったのか・・・

墮人をなぎ倒したスバルちゃんが僕に近づいてくる。

スバル 「氷臥・・・私どうしちゃったのかな？さっきから力が溢れて来るのがわかるよ。私おかしくなってないよね!？」

どうやら相当体に血が馴染んでいるらしい。

そこで頷ける。  
いくら弱い墮人と言えど、あんな簡単にやられはしないのにとっしてかと。

理由は単純明快、ただ単にスバルちゃんの血とのシンクロ率が高いのと、  
彼女の力が奴らの上に行く結果になっただけである。

氷臥 「大丈夫だよスバルちゃん、どうやら血とうまく馴染めたから体が  
新しい力を手に入れたんだよ。だからたぶん君達で言う魔導士ランクも  
1ランク位上がると思うよ。」

だがしかし、スバルちゃんの場合は別だ。

彼女の場合は異常なまでのシンクロ率をたたき出したからたぶん2  
〜3ランク  
は変わってくると思う。

スバル 「ホントに！？やった！！これで私も強くなれるし、何より氷臥と  
一緒に戦える。これからもよろしくね！！」

そう言ってスバルちゃんが手を取って来た。

氷臥 「うん、僕もよろしくスバルちゃ・・」もういい加減ちゃん  
付けは

やめてよー!」「あはは、ごめんね。それじゃよろしくスバル!」「

こうして僕たちは固い握手を結んだ。

氷臥 side out

（ side ）

スバルが墮人たちとの戦闘を終了させた頃、他のメンバーは

エリオ 「っくー！この相手・・・強い！！」

地下での戦闘はますます激化していく。

その中でもエリオは目が4つ付いた人型の虫と戦っていた。

エリオ 「ソニックムーブ!!!」

ストラーダ 『Sonic move!』

一瞬の隙を突き、自身の体の速度を上昇させ一気に虫にたたみかける。

対する虫も表情こそ変わってないが、どこか驚いているようだった。

そこで我先にと訓練で鍛えた槍の3連撃を素早く虫に放つ

手ごたえはあった。

一発目、右手の甲にヒット。

二発目、掠っただけだが、太もも付近に突き。

三発目、頭への鋭い一撃が命中。

この熟練されたエリオの動きに虫の方も侮っていたらしく、3歩も後ろに下がった。

すると、物陰から観戦していた召喚士らしき少女がエリオをキツと睨み付けながら現れた。

ルーテシア 「……………ガリユー大丈夫？」

ルーテシアはエリオの一撃でひるんだ自分の召喚獣を見つめる。

対するガリユーは心配ないと言わんばかりに構えをとる。

エリオ 「大人しく投降して！！そうすれば弁護の機会はある！！」

ルーテシアに呼び掛ける様にエリオはストラダーの切っ先を向ける。

対するルーテシアは感情を感じさせない瞳で見つめる。

エリオ 『キャロ、合図したら僕にブーストかけてくれない？うまくいけば

相手を捕まえられるかもしれない。』

相手に隙を見せない様にキャロと念話をし、補助魔法を要請する。  
ガリユー達は気付いていないようである。その準備は進んでいく。

キャラ 『わかったよ！でも無茶はしないでね？』

そのすぐ後に合図となるエリオの魔力で生み出された落雷がガリユ  
ーに  
向かった。

キャラ 「ケリュケイオン！！」

ケリュケイオン 『Boost！！』

補助魔法の力でソニックムーブのさらに倍の速度に上昇し、ガリユ  
ーに  
特攻する。

ガリユーは両腕をクロスしてガードの姿勢を取り構えカウンターを  
放つ

ストラーダ 『Protection!!』

しかしその一撃は惜しくもストラーダの障壁により防御される。

そこで不利と理解したガリユーは後退し、壁などを使った3次元攻撃をくりだす。

エリオもこの手の戦闘を予想しなかったわけではないが、なかなか  
順応  
できずに戸惑う。

エリオ 「今の僕、だいぶ心が乱れてるな………集中!!」  
┌

突如エリオはもっていたストラーダを地面に突きさして目をつぶった。

その間もガリユーの攻撃は続いているが、まるでそれが見えていないかの

如く綺麗にすべて避けていく。

エリオ 「（無理言って翔護さんに教えてもらった聖拳流。この技しか結局  
覚えられなかったけど……………当てて見せる！！）」

この技は唯一翔護に教えてもらった技。

覚えるために寝る間を惜しんで練習した。

今、その成果を発揮する。

そしてエリオはブーストとソニックムーブが合わさった速度のまま  
トリッキー  
な動きで右、左、と移動してガリユーに迫る。

エリオ 「行くよ!!! 聖拳流……………螺旋!!!!」

その言葉と同時に、手首を使い捻りを加えてストラダーダで突きを放つ。

それに気づいたルーテシアが魔法障壁を展開するが、

ガシャン!!

エリオ 「はあああああああ!!!!」

エリオの速度と回転が生み出す力によりそれは意味をなさなかった。

そして、エリオの放った螺旋は……………

ルーテシア 「ガリユー!!!」

ガリユー 「!!!??」

ドン!!!

ガリユーに命中した。

さすがのガリユーもこの一撃には堪えたらしくもつ動く気配が無い。  
ルーテシアがかささずガリユーに近寄る。

エリオ 「はあ、はあ、なんとか、勝った！」

とそこに自分の持ち場が終わったヴィータがやって来た。

するとすぐさまルーテシアのもとに行き、胸倉を掴んで怒鳴りつけた。

ヴィータ 「言え！！お前らの仲間は何処にいる！！」

しばしの間沈黙が流れた。

ルーテシアの性格上すぐ喋らないのはエリオとキャラは知っていた。

ようやく観念したのか重い口を少し開く。

だが、語られた言葉はヴィータを始め、エリオ達が望んだ言葉では無かった。

ルーテシア 「あなたは、また護れないかもね。」

ヴィータ 「ツな！それってどういう事だ!!」

するとおもむろにルーテシアはヴァイスの操縦するヘリがある方向を見る。

それだけでヴィータには分かってしまった。

今あのヘリには保護した少女と・・・・・・・・・・なのはが乗っている！

ヴィータ 「てめえ……………ぶっ飛ば」  
「いっただきい」  
「！」

ヴィータがルーテシアを殴ろうとすると、突如地面から水色髪の女が現れる。

そしてものの数秒でルーテシアを逃がしていった。

あまりの事態に啞然となる。

いち早く思考が回復したヴィータがへりに通信を繋ぐ。

ヴィータ 「なのは！なのは！気をつけろ、へりに向かって誰か狙ってる奴がいる！！」

しかし、そのすぐ後に通信が乱れる。

その事態に最悪の事態を想像してしまい、地面にへたり込んだ。

そして腹の底から声を振り絞り叫ぶ。

ヴィータ 「……………なのはあ  
あああああああああああ  
ああ!!!」

なのは 「ヴィータちゃん呼んだ？」

ヴィータ 「え？」

## 第26話 努力の証（後書き）

感想などできれば頂きたい幸いです。

## 第27話 守りたいもの（前書き）

ちよつと小説のストックが消えたので  
少しの間書きためするために更新遅くなります。

そしてちよつと話の順番が変わります。

## 第27話 守りたいもの

（side）

ヴィータ 「な、なのは！！無事だったのか！！？」

先程まで連絡が一切取ることのできなかった大切な自分の仲間の安否を  
確認できて大喜びでいるヴィータ。

なのは 「うん！なんて言ったってこのへりには翔護さんが一緒に乗って  
たからね。いきなりへりの外に飛び出して行った時はビックリしたよ」

回想・・・

翔護 「しっかしこんな小さな子が研究者共の実験材料にされてい  
たとは  
世も末ってやつだな・・・」

へりに乗せられ疲れたように眠っている少女を見ながら翔護が呟く。  
少女の顔には疲れもつかげえるが、少し安心した様子も見受けられる。

ヴァイス 「どうしますか旦那？このまま六課に戻りますか？」

へりの運転をしながら器用に後ろを向き聞いてくるヴァイス。  
そんなヴァイスに危ないですよ！と注意しているなのは

翔護 「ああ、取り合えず戻ってシャマルに見てもらおう。なのは  
連絡  
いれてくれるか？」

なのは 「分かりました。こちらスターズ応答して下さい。ザアザア

あれ？こちらスター・・・・・・・・・・ッザザザ！」

翔護 「どうした？」

なのは 「どうしてか分からないんですけど、通信が途絶えて連絡できないんですよ、なにかあったのかな？」

少女の頭を撫でながらなのはが原因をいうが、翔護は一人違う様子で考え込んでいた。

翔護 「（通信が出来ない？この事態でか？本部がへましているわけではないし、敵の策略だとすると・・・・・・・・・・狙いはこの入りにいる。だとすると・・・・・・・・・・この少女か！！

「！！」

すべての謎が解けて合点が行った翔護はすぐさま花鳥風月をケースから取り出して

へりのハッチを開ける。

途端にビウウ！！つよ強い風がへりの中に舞い込んでくる。

なのは 「ちょー！いきなりどうしたんですか翔護さん！？」

いきなりハッチを開けて臨戦態勢になった翔護を見て何事かと問う。

翔護 「なのは！これからなにがあってもその女の子を守れ！敵の狙いはその女の子だ！！」

それだけ言つと翔護はへりから飛び降りた。

「翔護 side」

翔護 「さあて、どう来る？」

敵の狙いがあの女の子だとしたなら、まず間違いなくこのへりを狙ってくる。  
俺ならそうする。

翔護 「落ち着け……」

風が靡く。

スウッと頬をやさしく撫でる。

目を閉じると分かる。あらゆる場所の風の状況が。

これが風の神である俺の力。

翔護 「……………！！離れた所の風が変わった……………」

756

ここからどれくらいだ？だいぶ離れているな。

とすると、遠距離からの砲撃か！？ツクソ！！へりごと落とすつもりか！

風が荒々しくなる。まるでこれから嫌な事が起きるかの様に。だが、俺はそれが起きないように今、この場所にいる。

ならばする事は分かっているはず。

翔護 「我は風の神、風切 翔護！！我が神器【花鳥風月】にて貴様の攻撃防いで見せよう！！！」

俺は大きい声で叫ぶ。これは一種の暗示だ。自分の気持ちを高ぶらせて  
体を戦闘態勢に変える。

そして俺は花鳥風月をぐるぐると両腕を使って回転させる。

何回も何回も。

ブンブン！！と鈍い音があたりに響き渡る。

すると、小さな竜巻が現れてくる。次第にそれは少しずつ大きくなり、

巨大な竜巻になった。

だが、不思議な事にその竜巻はどこかに向かうでもなく、まるで忠義の厚い部下の様に翔護のそばに有り続ける。

そしてタイミングの悪い事に地上から一筋の光の閃光がやって来た。そこらへんの乗用車なら飲み込んでしまう様な大きな砲撃。

すべてが計算されてできた結果。  
それが今。

翔護はその竜巻を砲撃に向かってそつと解き放つ。

ふわっと翔護から離れると、竜巻は一目散に砲撃に向かっていく。

砲撃と竜巻がぶつかり合う。

ドツツゴオオオオオオオオオオオン！！！！！！！！

轟音とともにまるで溶け合うかの如く両者は混ざり合い薄れていく。

しだいに視界は戻り、状況を確認すると

翔護の竜巻と見事相殺する事に成功した。

翔護 「ふむ、なんとかなったな！」

そんな事をボヤキまたへりに搭乗する。

（翔護 side out）

回想終了

翔護 「で、そのあとヴェーターの絶叫がへりにまで届いて……」

なのは 「私が答えたってことだよ」

と二人は通信越しに少女の頬をぷにぷにと指で押している。

ヴィータ 「（心配して損した……………）」

ヴィータのこの感想は至極当然の事である。

人が心配してみれば、とうの本人は翔護が防いでいる時も少女の頬をつついていた。

ぶつちやけ、緊張感がない。

それだけなのはにとってこの少女の存在は大きかった。

翔護 「それより、ヴィータ少女の容体が心配だから作戦は一時中断、  
いったん帰還するよ」

その提案に少し焦りの様子を見せるヴィータ

ヴィータ 「待ってくれ翔護!!まだレリックが……………」

講義をしようかと詰め寄ろうとしたとき、不意に第三者から声をかけられる。

その声は少し気まずそうに近寄ってきた。

ティア 「あの、ヴィータ副隊長実は……………」  
……………」  
レリック取られてないんです。」

またしてもヴィータは驚愕に染まった。

あの時確かに自分の目の前で召喚師の少女ごとレリックケースを敵に奪われ

逃がしてしまったはずだ。見間違えるわけがない。

ならば、今ティアナは何と言った?

盗まれていない?

ヴィータ 「どういふことだ?!説明しろ!」

自分でも恥ずかしいくらいに大きな声を出しているのは分かる。  
混乱しているのだ。どうしようもないくらいに。

ティア 「はい、実はあの時私の幻術魔法を使いましてこのように」

そう言ってキャロのかぶっていた帽子を取ると、一輪の花があった。

しかし、それはティアナが指をパチンと鳴らすとレリッククに変わった。

ティア 「一工夫した結果なんとか渡さずに済みました。」

それを聞き思わずガッツポーズをしてしまうヴィータ。  
その数秒あとに恥ずかしいのか頬を赤く染めていた。

ヴィータ 「だそつだ翔護!!あたしたちもこれから帰還する!!」

翔護から了解と返事を聞き通信を切った。

その後くるつとまわって後ろにいたFW陣の方を向く。

ヴィータ 「お前ら今日はよくやった!!早坂兄弟もわざわざ来てくれて

助かったぞ!!」

炎鬼 「まあティアナは俺が行くまではすごく嫌そうな顔してあの  
女達

相手にしてたよなあ」

ティア 「し、仕方ないでしょ!あの二人馬鹿なのか強いのかわかんなくて

めんどくさい相手だったんだから!!」

氷臥 「ほらほら、喧嘩はよして」

そんな二人の争いを疲れ切った様子で周りの皆は眺めている。

それでもそれはすこし暖かく見えた。

ヴィータ 「それじゃ帰還するぞ！！！」

## 第27話 守りたいもの（後書き）

先に完結を持ってきて、あとからティアアナVSウエンディ&ノーヴ  
工戦  
を書きたいと思います。

それと感想下さい。

もう何か月も来てないので寂しいです。

特別話 バレンタインは突然に？（前書き）

あぶねえぎりぎり14日だ。

なんとかセーフ

特別話 バレンタインは突然に？

Side

翔護 「.-」

ブリーフィングルームの中央にいるメンバーにいつもの挨拶を送る。グリフィスやヴァイスといった数少ない男面子達はすぐにおはようと返して

くれるが、女子の方はなにやらぶつぶつ言っていて返事が無い。

翔護 「フェイトおはよう」

ポンッ！

近くにいたフェイトの肩をそつと叩く。

それによりやつと翔護の存在に気付いたのか慌てて振り向く。

フェイト 「ひゃっ!?しよ、翔護さん!!もう、驚かさないでくださいよお!」

翔護 「いや、さっきから話しかけてただけど………」

その事に気が着くとフェイトは頬を赤く染めて恥ずかしそうにする。その表情がどこか面白くてついつい翔護も笑顔になる。

翔護 「それでフェイト、お前と言い皆何をそんなにぶつぶつ言ってるんだ?」

あたりを見渡すと確かに翔護のいった通り女子の職員達は皆、なにやら  
ブツブツと呟き、悩んでいる様子だ。

フェイト 「え！？わ、私はその、なんというか、ちょ、ちょっと  
考えごとを／＼／＼／＼」

一向に翔護の顔を見ようとせずに自分の手で顔を隠すフェイト。  
だが、その行動はあからさまに何か私隠しています！と言っているの  
と変わらない。

翔護 「フェイト、俺には言えない事か？相談には乗るよ？」

だが、翔護も何を勘違いしたのかすごく真剣にそして深刻な表情で  
フェイト  
に詰め寄る。

フェイト 「（しょ、翔護さん顔近いですって！！）だ、大丈夫で  
すよ！それに  
私はともかく、皆が悩んでいるのは今日があの日だからですよ。」

翔護 「あの日？」

あの日と言われてもピンとこないので思わず聞き返す。  
首を捻り真剣に考えるがやはり浮かんでこない。

フェイト 「翔護さん知らないんですか？今日はバレンタインですよ？」

翔護 「あっ！なるほどね。だから女性たちはこんなに悩んでるのか……」

すっかり自分には無縁の行事なので頭からすっぽりと抜けていた。  
過去に印象的な思い出があるわけでもないのに気にも留めていなかった。

フェイト 「なので翔護さんは気にせず仕事頑張ってください！！」

半ば強引な形で部屋を追い出される。  
後ろではそばにいたはやてが何やらニヤニヤとあやしい笑みを浮か

べていた。

翔護 「なんだあのはやての笑みは？」

ボタン！

そして翔護は追い出された。

Side out

「ギンガ side」

ギンガ 「フフーン フンフン」

ゲンヤ 「お！ギンガ今日はいつになく上機嫌じゃねえか」

お父さんが私に近づいてくる。

私がお父さんの部隊に来てから2年以上月日が流れている。  
けれども、あの日もしかしたら私は此処にいなかったかもしれない。

そう、4年前の空港火災。

あの日から私の運命は変わった気がする。

スバルを助けるために一人空港をさまよった。

怖かった。

寂しかった。

逃げ出したかった。

そんな感情が私の中で渦巻いていた。

でもそれはスバルも同じだったはず、だからあの時私は必死である子を

探し続けた。

けれども予想外の事態が発生した。

私が歩いていた通路が崩壊したのだ。

あの時は本当に何も考えられなかった。ただただ落ちていく景色、変わる事のない

赤い景色、そこの見えない暗闇。

怖くなったから目をつぶった。もう周りを見ないように覚悟した。きっとこのまま体がバラバラになってしまっただと思った。

でも、違った。

あの日あの時あの場所で貴方に会えたから今の私がある。そんな気がする。

もしあの時私を救ってくれたのがフェイトさんだったらフェイトさんに憧れていただろう。

でも、私を救ってくれたのはあの人。

長身で白いコートを着ていて、でもどこか優しさ溢れるその笑顔。

あの時思った。この人になりたい、この人のそばにあり続けたい……。

だから私はあの後必死であの人の事を調べた。

お父さんにも頼んで調べてもらった。

そして管理局に入って1年と少しでようやくあの人の事が分かった。風切 翔護さん、忘れることなんてできなかった。

そしてさらに数日後、翔護さんは戦技教導と言つ名目で108部隊に1週間やって来た。

心が躍った。あの人にやっとお礼が言える、この長い間胸にしまい続けた

感謝の言葉が。でも同時に心配なところもあった。自分の事を覚えているだろうか？

でもそれは杞憂だった。

彼は私を一目見ただけ、一目だ。それだけで私が誰だか分かっていた。

翔護 「あれ君は確か・・・・・・・・4年前の子、だよな？よかつた無事だったんだね！」

満面の笑みで本当にうれしそうに語りかけてくる翔護を見ると、お礼の言葉を考えていた頭が真っ白になった。

頬が赤く熱くなるのがよくわかる。

ああ、私この人の事、翔護さんのこと本当に好きなんだあ・・・・・・・・

たぶんそれからだろう、私が変わったのは常に周りを意識し、この時はこう対応しよう、どう取り組むか？すべて翔護さんが教えてくれた事を参考にした。

だから今日も自分の気持ちに素直になろうと思う。

私は手元から通信機を出すとボタンを押して繋いだ。

ギンガ 「あ、翔護さんですか？すみません今日お時間あります？」

私は自分の行動に後悔はしない。

翔護 『ああギンガか。うん別に今日は暇だけど、夕方5時くらいで良いかな？』

ギンガ 「はい！では5時に六課の方に行きますね！！」

ピッ！！

ふと自分の机の上に置かれた一つの箱を見る。

今日この日のために徹夜して作った思いの結晶。

絶対に渡して見せる！！

くギンガside outく

くフエイトsideく

ボタン！！

フェイト 「ふう、やっと翔護さん出て行ったよお。焦ったあ〜」

危ない危ない、机の上に置いておいたチョコの存在がばれるところ  
だったよ〜

まだ、翔護さんに渡すには早いからね！！

それにしても、部屋を出て行く時なんか翔護さんはやてを疑いの目  
で見っていた  
けどどうしてだろ？

はやて 「むふふう〜ん まあフェイトちゃん、がんばりや？」

そう言っつて肩をポンポンと叩いて私の横を通り過ぎていく。

何だろう？あれは何か面白い事がある前触れの時のはやての態度。  
なんか少し嫌な予感がするなあ……………

フェイト 「と、とりあえずいつ渡すかだよね！！」

せっかく頑張っつて作ったのに、渡さないのはもったいないし、なに

より

寂しい。なんとかこの思いを受け取って欲しい!!

フェイト 「幸い同じ課だからいつでも渡すチャンスはあるはず・・・」

しかし、事は私の思う通りにはいかなかった。

フェイト 「あ、翔護さんいま空いてます・・・」「え!?!?地上本部から呼び出し?」  
・・・あ忙しいみたいですネ・・・」

とか、

フェイト 「あの〜翔護さん」「炎鬼、氷臥お前ら今どこにいるんだ!?!?」  
出直してきます。」

とかでなんだかんだでもう夕方5時になってしまった。

さっきまであわただしかった翔護さんの様子が少し落ち着いたと思うと

なぜか席を立って部屋を出て行った。

フェイト 「（これはもしかしてチャンス？）」

制服のポケットにチョコを入れてゆっくりと翔護さんの後をつける。  
エレベーターの前で止まったかと思うと中に入っていく。

間に合うかな？

少し急いで私もエレベーターに乗り込む。

翔護 「おおどうしたフェイト？仕事は大丈夫？」

フェイト 「はい！大きな仕事はもう片付けましたから大丈夫です。」

しばらく他愛のない話で盛り上がると屋上にたどりつく。

私と翔護さんはエレベーターから降りるとフェイスの方に歩いて行く。

翔護 「へえーやっぱり此处も良い景色なんだね」

フェイト 「本当ですね。すごくきれい……」

屋上から見る景色は本当に鮮やかできれだった。

夕焼けの光が当たりの木々や建物をオレンジ色に包みこみ、どこか暖かさを覚える。

ガタツ！

するとエレベーターの方から一人の新たな人物が歩いてくる。正直少しイラッと来た。私と翔護さんのせつかくの二人っきりのこの空間を邪魔されたのが嫌だった。

でも、その人物の意外性に少し焦りを覚える。

翔護 「時間ぴったしかな？こうして会うのも久々だねギンガ」

そう、なのはの部隊スターズのスバル・ナカジマの姉であるギンガが目の前で手を後ろに組みながら歩いてきた。

向こうも私がいたのが意外だったのか驚いた表情を見せている。

でも此処で思い出した。何も私だけが翔護さんの事が好きなのわけではない。

今日の前にいるこの少女も翔護さんの事を大切に思う乙女なのだと・  
・  
・  
・

でも私は絶対に負けない。だって翔護さんが好きだから！！

（ side ）

突如翔護の隣にいたフェイトと、ギンガがお互い目を合わせると、固まる。  
そしてフェイトがギンガを手招きした後、二人して翔護から距離を取る。

「此処からは女性二人は小声です！」

フェイト 「も、もしかしてギンガもこれを渡そうと？」

そう言っつてフェイトは懐からリボンが着いたチョコレートの箱を取り出す。

ギンガ 「やっぱりフェイトさんですか……」

するとギンガも手に持っていたチョコの箱を取り出す。

幸い二人の背中が壁になっていて翔護には何をしているのかまったくもって分からない。

翔護 「二人とも何話してるの？」

自分を置き去りにしてこそこそ話す二人にどこか寂しさを感じた翔護が  
たまらずに話しかける。

フェイト 「だ、大丈夫ですから！！だから、もう少しだけ待って

下さい！」

ギンガ 「そ、そうです。すぐに終わりますから!！」

すごいオーラを出しながらの女性一人からの威圧に堪え切れる訳もなく

素直に翔護も折れて”……………そ、そうですか”としか答えられなかった。

フェイト 「この際、どっちがどんな事になっても……………」

ギンガ 「恨みっこなし、ですね？」

そして二人は同時に首を縦に振ると、翔護の元にゆっくりと歩いて行く。

〓 小声終了! ! 〓

翔護 「やっと終わったかあ、んでどうしたの二人とも？」



二人の、しかも両方とも美人の類に入る人物からのチョコの攻撃に  
さすが

の翔護もたじろぐ。

一応は二人のチョコを手元に収める。  
その間二人の心臓はバクバクだった。

どっちに返事を言い渡すか？フェイトか？それともギンガか？

フェイト 「（すっごい緊張する！！お願い神様！）」

ギンガ 「（これが成功すれば私本当に幸せ！！）」

目をつぶり返事を静かに待つ二人。そしてついに翔護が口を開いた。  
きちんと二人の顔を、ふざけた雰囲気を出さずに真剣に……………

翔護 「正直、どう反応したらいいか分かんないけど、これだけは  
言えるよ

……………義理でもすごくうれしいよ！！本当  
にありがとう！！」

フエイト・ギンガ 「「ふえ？」」

翔護 「いやあくまさか二人同時に義理が貰えるなんてちょっとびっくり

して思考回路が追いつかなかったけど、なんとかお礼の言葉が言えたよー!!」

勝手に独自の解釈を入れてどんどん話を進めていく翔護。

さすがの二人もこのままでは行けないと判断したのか、話に割り込もうとする。

だが

フエイト 「ちょ翔護さん、違いますこれは義理なんかじゃ……

「大丈夫ー!!」「え？」

ギンガ 「そうですねこれは真正銘の……」「平気だよー!!」  
「？」

翔護 「俺をチヨコの毒身にしたいなら平気だよ！！これでも体強いから！」

大丈夫、安心して！君達二人の本命を探すなんて行動はしないから！！」

それじゃ！！っと言って勝手にブリーフィングルームに戻る翔護。結局その場に残されたのは勝手に勘違いされた二人だけであった。

フェイト 「ギンガ………どう思う？」

あきれ顔でギンガに尋ねる。

ギンガ 「どうって、完璧義理と勘違いしてましたよね？」

その場で二人はガクッっとうなだれる。

そして

フェイト・ギンガ 「義理じゃないのにいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！」

二人の叫びが木霊した。

side out

「そのころはやて」

ちやっかりサーチャーをとばしてその一部始終を見ていた。

はやて 「やっぱり予想通りの展開や！！これだから翔護さんは面白いでえ」

などと笑いながらお茶をすすっていた。

～END～

**特別話 バレンタインは突然に？（後書き）**

何分急いで書いたので完成度がめちゃめちゃ低いです。

誤字脱字とつがありましたら指摘お願いします。

第28話 加速する戦い（前書き）

すいません。

これが今自分にできる最高速の速度です。

## 第28話 加速する戦い

（side）

ティア 「はあ、はあ！………ツ！そこ、シュート！  
」

クロスミラー ジュの先からオレンジ色に輝く弾丸が一斉に発射される。  
向かう先は迷うことなく物陰に隠れたナンバーズの二人にだった。

ウェンディ 「あいつ学習が早いですね」

ノーヴェ 「んな事いつてる暇があったら一撃当てる！！」

軽口を叩きながらギリギリのところまで避けていく。  
さすがは戦闘機人で行ったところである。

ティア 「(さすがにこのままじゃやばいわね……………なんとかして  
あいつらに攻撃できればいいんだけど。)」

現場の情報を頼りに自分なりの、自分だけの作戦を頭の中で展開させる

敵の数、攻撃タイプ、速さ、地形、あらゆる情報が無意識のうちに  
ティアナ  
の中で整理されていく。

ティア 「(この場合は……………多重幻覚による奇襲で行こう  
!!)」

そしてすぐさまに行動に移す。

まずクロスミラージュの演算処理をフルに使いできるだけ多くの幻

覚を

作成する。もちろん、ティアナの魔力量はそこまで多くないのでせいぜい

5〜6が限界だが。

ティア 「なんとか行けたわね。さあここから勝負よっ！！！！」

そこからのティアの反撃は、それはすごかった。

まずノーヴェとウエンディをバラバラにするために、作成しておいた魔力

スフィアを展開させる。

そしてスフィアをまずはウエンディに向けて集中的にあてに行く。

ウエンディ 「っく………面倒つすね、IS、エリアルレイブ！！！！」

盾のような物の上に飛び乗ると、銃弾の嵐を避ける様に移動する。

空間が限定されているため思う様な軌道を描けないが、この状況を打破

できるのであれば都合がよかった。

だが、

ティア 「掛ったわね!!」

バシィン!!!!

丁度ティアナの前にあった瓦礫をエリアルレイブで横切った所でウエンディの状況が一変した。

ウエンディ 「っ、バインド!?!、いつの間にツスカ!?!」

ティアナは忘れていなかった。

翔護との戦いの時に、勝利のために導けたのは レアスキル 稀少技能でもなく、魔力量でもない。自分の、自分だけの作戦プランだ。

その中でも決め手となったのがこの設置型バインドだ。

ウエンディや、ノーヴェの様にティア自信が視認してからバインドをかけるようでは遅い。

ならば、最初から相手が動くであろう軌道に仕掛けてしまえばいい。その発想のもとティアはこのわずかな時間の間に此処までを計算し

た。

これも一つの立派な稀少技能である。

ティア 「さて、一人はもう完璧に高速および無抵抗の状態ね。」

後ろを振り向くと、これでもか！！と言っくらいバインドに巻かれて  
頂垂れているウェンディがいた。

ティア 「さあ、残りの一人覚悟しなさい！！」

クロスミラージユを構えなおす。

1歩、2歩、 2ndモードにしたクロスミラージユを握りしめ  
歩く。

あたりに聞こえるのは自分の足音のみ  
けれども、ここに他の誰かがいる事には変わらない。

この間もいるんな所にバインドを仕掛ける。  
ちょうど、3つ目を仕掛けたときだった。

ノーヴェ 「これ以上好きにはさせねえーぞっ！！！！」

斜め後方より、スバルのローラーブーツと同型の駆動音が近づいてくる。

まず、避けるよりも受け止める事に専念した。

ノーヴェ 「おめえみたいな奴があたしの拳を簡単に止められるとでも

思ってたのか？」

言われた通り、正直なんとかクロスミラージユの刃で防いだが、まだ押されている。完全には勢いを殺しきれなかった。

ティア 「つく！カートリッジ！！！！」

『Load cartridge!』 ガシャン！！

咄嗟にロードしたカートリッジを出力にあて、なんとかふんばる。

その甲斐あってかなんとか姿勢を戻す事が出来た。

ティア 「あんたら二人の相手くらい凡人の………、  
いえ、努力を  
怠らなかつた人間なら誰だってできるのよ……!!」

その言葉は自分がもう凡人ではないと言う事を理解し受け入れられ  
たという  
証でもあつた。

その証拠にさつきまで劣勢だつた戦局は今大きく変わろうとしてい  
た。

ティア 「行くわよクロスミラージユ、シュートバレット バレッ  
トF!!」

クロスミラージユ 『Shoot Barrett Barrett -  
F』

この日ティアは初めて術式を使った大掛かりなバレットを作成した。  
きつと前回までの自分であれば、考えるあまりに此処まで気が回ら  
ずに

撃墜されていたであろう。

しかし、翔護との訓練が行われたあとからは次第に自分の役割、力量が  
図れるようになった。

ノーヴェ 「なんだこの弾？何処まで追いかけてくんだ！？」

シュートバレットFは術者の誘導無しで熱源を自動で追尾すると言っ  
利点に溢れた魔法。覚えるのは簡単ではなかったが、毎日毎日少し  
ばかり

無茶な事をしていった。今では自分の物にしている。

ノーヴェ 「このっ、しっけ んだよお！！！」

ローラーブーツを巧みに操り追尾弾から逃れていく。  
だが、

ティア 「はい残念！ここはもう私の領域よ！」  
テリトリー

逃げた先にはクロスミラージユをノーヴェの頭に突きつけるティアナの姿が

ノーヴェ 「残念なのはどっちだってんだよ！」

それを予想していたのは何とノーヴェの方だった。  
あからさまに誘導されていたのを理解していたのだ。

ノーヴェ 「いいかげん消えろよおおお!!」

ティアナが攻撃する前にノーヴェの強い蹴りが腹部を襲う。  
さらに、強打のラッシュをかける。

だが、ティアナの様子が少しおかしい。  
いくら殴られても蹴られても表情一つ変えないのだ。

まるでマネキンみたいに。

そしてノーヴェエは気付く。

ノーヴェエ 「つまさか！！？？」

ピカッ！！

突如その場にいたはずのティアナが光を放出して爆発した。突然の事態にノーヴェエの対応しきれずに壁まで吹き飛ばす。

事の詳細の説明するところだ。

まず、ティアナがノーヴェエを計画通りに瓦礫に誘導させる。

そして道中ノーヴェエが誘導されている事に気が着く。

そして、そこに幻術でティアナの形になった魔力スフィアを設置する。

後は簡単だ。それをサンドバックにさせて油断した所をドカン！

ここまですべてティアナの計算通りの結果となった。

ティア 「今度こそ終わりよ。」

本物のティアがノーヴェの頭に銃を突きつける。  
だが、先程の爆発で既に意識が飛んでいて意味がなかった。

ティア 「やった………やったあ!!!!!!」

これがティア個人としては初の勝利のページとなった。  
すぐさま捕縛した事を隊長達に知らせようとしたときだった。

??? 「クククククック!!! 困るよ、こんな事をされては。」

先程、というかたった今まで誰もいなかったこの場所にふと第三者  
の声  
が響いた。

その声はどこか人を小馬鹿にするような、見下した声色だった。

ティア 「何処にいるの！？出てきて！」

あらゆる方向にクロスミラーージュを構える  
だが、声だけが聞こえるだけで一向にその姿は見えない。

しかし、予期せぬ事に、しばらくたつと相手から現れた。

その顔を見たときの事は忘れない。

そう、その顔は本来この様な現場にはいる可能性が少ない人物。

だからこそ疑問に思った。なぜ？ 此処まで気配を消すのがうまいのか？

なぜ？戦いから遠いこの人物がこれほど達人の様な構えをできるのか？

ティア 「ど……どうして?! どうして貴方が此処にいるのよ!!!」

ジェイル・スカリエツティ！！！！！！」

此処に最も出くわしては行けない邪が現れてしまった。

第29話 科学者の力

〔炎鬼 side〕

炎鬼 「ツクソー！なんでこっちの世界に墮人がいるんだよー！や  
つぱり

邪神の野郎来てやがるな！」

地下の下水が飛び跳ねるのを気にせずにとだただ走り続けて、向か

うは  
ティアナのもと。

今現在ティアナは一对多という極めて過酷な状況下での戦闘を強い  
られていた。

加えて、援護に回るはずのスバルは墮人の相手を氷臥とともにして  
いる  
ため、向かう事は困難である。

そんな状況下一人向かうのが炎鬼であった。

持ち前の大火力を用いて次々とガジェットと墮人をなぎ倒していき、  
着々

とティアナに近づいている。

炎鬼 「オラア！！どけえ墮人も！！灰にすんぞお！！！！」

全速力で体に炎を纏いながら突き進んでいく

すると、目の前にうっすらと光が見えてきた  
予想するにティアナが戦っている場所だ。

そしてどんどん近付いて行くと、そこには……………

炎鬼 「ン！！？なんだあの科学者見たいな奴……？」

目を見開いてまるでありえないものを見ているティアナと、それを嘲笑う

かの様に見つめているジェイルスカリエツティがいた。

炎鬼 「ティアナ！！無事か！？」

フランベルジュを下段に構えて臨戦態勢に入り、ジェイルをじっと見つめる。

だが、ここで妙な事に気が着く。まずあり得ないのだ。

見たままの筋肉と、それに不釣り合いな熟練者の構え方。

ひよろひよろの体なのにどうして達人の様な秀囲気が出せるのか？  
全体のバランスが崩れている。

あれだとこちらがではなく、向こうがいつ自滅してもおかしくない。

炎鬼 「（それに、何だあいつ？”負”をありえねえくらい纏ってやがる……！）」

この点でもありえなかった。

たかが人間であっても負の量は少ない。せいぜい空気を悪くする程度だ。

だが、目の前のこの男は目にもしっかりと認識できるくらいの負の感情

を抱き、それは自分の物のようにコントロールしている。

まるで、その男自体が”負”で形成された何かのように……

炎鬼 「まさかっ!??いや、そうとしか考えられねえ!!!」

炎鬼は最悪の事態が現実になったことにいち早く気がつく。  
その顔はあせりの表情でいっぱいになっていた。

ティア 「ちょっと炎鬼!!何がどうなってんのよ!!」

いまだにジェイルのすぐそばでクロスミラージュを向けながら警戒している

ティア。ちらちらと目を向けて来るが迎撃体制は万全だ。

しかしだ。それが返って炎鬼の気をそらしていた。

炎鬼は目の前の男の中身が何なのかを知っている。さらにはその危険性も十分に理解している。だから、そんな化け物の近くにティアナがいることが心配と恐怖でしかなかった。

炎鬼 「ティアナ！！すぐにこっちに来い！！全速力だ！！！」  
ティアナ 「はあ？あんたいきなりどう？」説明は後だ！！いいから来いっ！！！」  
「……ああもう！分かったわよ！！！」

敵に背中を見せないようになるべくすばやく移動を開始する。  
先ほど倒した二人はまだ眠っているみたいなので戦力に数えなくてもかまわない  
であろう。

だが、一番の問題は目の前のジェルだ。  
あれはこいつら墮人とは桁が違う。

炎鬼 「よお………始めまして、逝かれた科学者さん？」

チャキ・・・・・・・・

ティアナを背にしてフランベルジュを構える。  
既に周りには炎の槍を創り出して戦闘態勢だ。

ジエイル 「ククククツク！！始めまして、六課の援軍の少年？  
それで、  
挨拶をしに来たわけではないのだろうか？」

両手を広げて何かを抱きしめるかのような形で自分たちを見つめてくる。  
その間も体中から負を噴出させて、まるでお前ごときに何が出来る？  
と言う様な視線を送ってくる。

炎鬼 「てめえに聞きたい事がある。・・・・・・・・その力、何  
処で手に  
入れた？」

剣を握る手が自然と強くなる。  
それに反応するかのように炎の槍の温度も急激に上昇していく。

ジェイル 「この力が、フッフッフ！！この力は実にすばらしいよ！！！！」の  
世の何処にでもある負！！それを自在に操れるこの力はまさしく神に等しい  
力だよ！！！！」

こちらの質問には一切答える気が無いのがうかがえる。  
それどころか、炎鬼と一戦交える気配さえ見てとれる。

炎鬼 「口で言ってもわかんねえみたいだな。ティアー！！お前は翔護を呼んでくれ！  
たぶんこいつ、そう簡単にはやられてくれねえ！！！」

そして炎の槍は放たれた。5本制作したが、そのすべてを出し惜しみ無く、  
放つ。

縦横無尽に放たれた槍は正確にスカリエツティに向かう。

だが、

ジェイル 「こんなちんけな炎で私に当たるとでも？実に……  
不愉快だよ！！！！」

ジェイルが片手を前に伸ばすと、黒く、それでいて空気がドツツと重くなる

様な重圧の霧が現れ壁となり、すべての槍を飲み込んだ。

壁の中で槍は不完全燃焼でもしたのか、煙を放ち勢いは収まってい

く。  
炎鬼 「お前、半端じゃねえ使い手だな。知ってるか？今の攻撃は墮人Lv2も余裕で倒せる一撃なんだぞ？」

若干呆れ気味ではあるがジェイルを睨みつけて威嚇する。  
対するジェイルも薄笑いを浮かべて炎鬼を見ていた。

ジェイル 「Lv？がどうしたと言うのだい？その程度と一緒にされては困るよ。  
まったく……………潰したくなる！！！！」

突如豹変したような顔になったジェイルは、何も持っていない唯の拳で

炎鬼に突撃した。けれども、その拳に変化が現れる。

炎鬼の炎の様に揺らめく黒い何かがジェイルの拳に纏った。

炎鬼 「それは……負の籠手!? なんてそんなことまで出来るんだ

……よッ!!!」

ジェイルの拳をフランベルジュの面の部分で受け止める。

オレンジの炎と、漆黒の負がギリギリとお互いに燃やす様に接する。

勝負を競り勝ったのは炎鬼の方だった。

炎鬼 「羽ばたけ!!! 紅葉蝶【もみじちょう】!!!」

炎鬼の周りが突如オレンジに光る。そして光が薄くなっていくと、  
中から

10羽の蝶が一斉に飛び出してきた。

炎鬼 「こいつは火加減が難しいけど、加減する必要はねえ!!!  
行け!!!」

全部の蝶が飛びかかってくる。

実はこの技、こっちの世界に来てなのは達が使うアクセルシューター  
Iを

参考に新しく作った技だ。

最初の頃は加減がむずかしくて何度も失敗したが、威力は一流であ

る。

現に、模擬戦で翔護に試したところ、なんとアタツシユケースだけじゃ

防げないと判断して無理やり回避行動をとると言う行動までさせるほどだ。

炎鬼 「今だ！！飛び跳ねろ！！」

合図とともに、一羽一羽がまばゆく光を放つ。

その数をさることながら、その威力はやはり目を見張るものがあった。

たった一羽、たった一羽の攻撃でジェイルの分厚い負の壁に輝を入れた。

それだけではない。残りの九羽がその輝を超えてジェイル本体の元に突撃

していき、爆散した。

その姿はまるで夏の夜に咲く大きな花火のように淡い光。

けれども力強く放たれる閃光は目に焼きついた。

炎鬼 「どうだ見たか！！これが炎鬼様の火炎舞踏会だ！！！！」

煙で見えぬ相手に勝利を確信したのか腕を振り上げる。  
周りの熱気も段々と落ち着いて行った。

だが炎鬼は気付いて無かった。

自分が相手をしている者の正体が、奴で有るとは……………

### 第30話 加減した者（前書き）

俺がこんな言葉を書いたところで何もできはしないけど、震災にあつた皆さま、本当に頑張つて下さい。

自分には募金とかしかできないけれども、精一杯やらせていただきます。節電もさせていただきます。

第30話 加減した者

Side

ガラガラガラッ！！

炎鬼とジェイルの戦闘により現場は瓦礫の山となっていた。

近くにあった鉄は炎鬼の熱により溶けていて、さながらマグマ様になっており、

戦いの余韻を残している。

それを創り出した炎鬼自信は既にこの場にはいなく、ティアナや翔護達が

待つ所に戻ったようである。

ガラ・・・ガラ・・・

だが、話は何も終わってはいなかった。

ジェイル 「ふう………なんとかバレなかったが、炎の餓鬼  
ちったあ  
成長した見てえだな。ガアツハハハハハ！！！！！！」

両手を大の字に広げて大笑いをするジェルモとい、邪神。  
今回の戦いは相当手加減をしていた様である。

その証拠に炎鬼のあの攻撃をもろに食らってもこのようにピンピンして

いるくらいだ。なにより殆ど肉体行使だけで炎鬼と渡り合っていたのだから

その様子が窺えるであろう。

ジェル 「っち！今回は仕方がねえ、とつとこの小娘たちを連れて帰るか。

あゝ、あゝ、うん！！・・・ウーノ、これから戻るよナンバーズはちゃんと

回収したから安心したまえ。」

数回ほど喉をうならせて声色をいつものジェルスカリエッティに戻し

自信の秘書的立場のウーノに通信で呼び掛ける。

ウーノ 『分かりましたドクター。クアット口達も無事に生還したよ  
うです。』

ジェル 「分かったよ。それでは失礼するよ」 ピッ！！

いまだに気絶しているノーヴェとウェンディを両肩に抱えてジェイルは

怪しい笑みを浮かべながら隠れ家の研究所に足を勧めていく。

ジェイル 「ククツク!! さあ、餓鬼共、俺を封印できるならしてみろお!!!」

この邪神様はてめえらの様な餓鬼にやられるほど柔じゃねえぞ!!」

狂喜のように笑いながら語るその素顔はまさしく子供。

おもちゃを見つけて喜ぶ子供の様に炎鬼が過ぎ去った方向を眺めていた。

ジェイル 「転移!!! 行き先は研究所だ!!!」

そうして二人を担いだジェイルは黒い渦の中に向かって行った。その背中からは黒いオーラが充満し、淀んでいた。

### 第30話 加減した者（後書き）

今回でティアナ&炎鬼バトルの方は終了です。  
次回からはあの金髪幼女登場を考えています。

少ないですが読んでください。

第31話 金色の少女(前書き)

大変遅れてしまいました。が更新です。  
もう原作が殆ど思いだせない。

第31話 金色の少女

Side



なのは 「にやはは・・・翔護さん運転が荒いよー!!」

シグナム 「た、確かに。頭をぶつける所だったぞ!!」

ブロオオオオンブロオオオオン!!!!!!

翔護 「ごめんごめん!!、久々の運転だから少し感覚を取り戻したかったんだ。

自分でも此処まで荒れるとは思わなかったけど・・・」

先程六課の方に聖王教会から、保護した女の子の意識が回復したとの連絡が入り、保護したなのは、並びに翔護。そして護衛として

シグナムが車で聖王教会に向かっていた。

その際に翔護が久々に自分で運転したいと言い出したので管理局の車庫に

止めてあった車に乗り出かけて行った。

【翔護はマクラーレンのSLRの黒に乗っています。】

翔護 「これでも昔は豆腐を運ぶバイトをしていたから、運転には自信があつたけど、

やっぱりちゃんと毎回乗らないとダメみたいだ。」

なのは 「それ、何処の走り屋ですか？」

そんなこんなで3人仲良く聖王教会に向かつて行った。

〜数分後〜

翔護 「お待たせ！二人とも、早く保護した女の子を迎えに行こうか。」

うう〜ん！と車から出て伸びをする翔護の跡を追うように二人も座席からでてくる。  
領地内を散策するために3人で並んで向かって行くなか、不意に前の方から人が走って近づいてきた。

なのは 「翔護さん誰か近づいてきますよ？・・・教会の人かな？」

翔護 「いや違う。あれは・・・・・・シャルハじゃないか！！」

みると修道服に身を包んだ女性が3人の前で綺麗にお辞儀をしていた。

シャルハ 「翔護さんご無沙汰しております。それと、始めまして私は  
聖王教会で騎士カリムの護衛をしておりますシャルハ・ヌエラと申します。」

その動作につられて翔護を除く二人も挨拶を交わす。  
何処となく緊張の様子がうかがえてくる。

翔護 「さて！挨拶はここまでにして、シャツハ、保護した女の子は何処かな？」

すると、なぜかバツが悪そうに顔をしかめて表情が強張る。

その様子にも3人も気になり始める。

シャツハ 「実はですね……………検査の途中でいなくなつて……………しまつたんです。」

シグナム 「居なくなつたとは？この敷地内から消えたのか？」

シャツハ 「おそらくはまだこの中でしょうけど、今だ行方が分からないのです。本当にすみません！！」

そのまま深く頭を下げる。

だが、こうしていても事態が解決するわけでない事は確かだ。

翔護 「仕方ない。なのは、シグナム。その女の子を探すから別れよう。」

俺はこっちの芝生の方に行くから二人は建物の中と裏に回って。」

なのは・シグナム 「「分かった（りました！！）」」

翔護 「それじゃ隠れんぼと行こうか！！！！」

（5分後）

なのは 「何処に行ったのかなあ」

シグナム 「こう広くは見つからないぞ。」

（10分後）

翔護 「出ておいで――別に怖くないぞー！！！！」

なのは 「私たちと遊ぼうー!!」

結局時間だけが過ぎて行った。

side

翔護side

翔護 「何処に行ったんだ？…ってこれは……人形？」

つま先の所には無造作に置かれたうさぎのぬいぐるみが横たわっている。

誰かの落し物だろうか？と思い拾い上げる。

翔護 「まさか……迷子の子の奴じゃ……ひゃうん！！！」  
うん？」

自分の足の付近に何かが衝突してきた。

一瞬黄色い弾丸か？などと考えたが、人間であった。

???? 「あ……お人形さん！！！」

見ると少女が俺のもっている人形を涙目で見ている。  
とすると……この子の持ち物か

翔護 「はいどうぞ」キヤあ！！！！……って隠れちゃ渡せ

ないでしょ」

どうやら少女は俺の事を警戒しているらしくなかなか受け取ってくれない。

むしろ第三者が見たら俺が脅している様に見える。

翔護 「どうすれば……そうだ!!」

俺は昔小学校の臨時講師をしていた時の事を思い出した。  
昔はよく泣いた女の子を慰める時こうしたっけ……

翔護 「ごめんね驚かせちゃって。実はさ俺このウサギさんの友達なんだ。」

ピクツ!

おおっ!食いついてきた。

翔護 「ウサギさんと話していると、ウサギさんも此処で迷子になっちゃったらしいんだ。

良かったらなんだけど、俺と一緒にウサギさんの持ち主を探してくれない?」

「大丈夫……ウサギさんは私のだから。」

翔護 「そつかそれは悪い事しちゃったね。良かったら名前教えてくれないかな？」

俺は翔護って言うんだ。」

「……ヴィヴィオ……」

翔護 「そつかヴィヴィオって言うのか！！それじゃはいっ！ウサギさん返すね。」

ウサギを渡すとそれまで暗かったヴィヴィ男の表情が一気に明るくなった。

どうやら相当大切なものだったようだ。

俺がそのまま屋敷の方に歩いて行こうとすると、不意に服の袖が引っ張られた。

翔護 「ん？どうしたのかな？」

ヴィヴィオ 「ヴィヴィオ……ママ居ないの。」

どうやら落ち込んでいたのはこの事も原因の一つのようだ。

さつき戻った元気がまた沈み始める。

翔護 「そっかぁ・・・じゃあ俺と一緒に母さん探そうか!!」

すると、にはぁぁ!!と明るく眩しい笑顔を見せて力強くうん!!と頷いて

くれた。だいぶ警戒心は取れて、むしろ少し懐いてくれたみたいだ。

今度はヴィヴィオの手を握って一緒に歩く。

鼻歌交じりでご機嫌だ。それから数歩歩いた所で急に立ち止まってしまった。

翔護 「どうしたんだいヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ 「抱っこして欲しいの・・・」

指をくわえて見てくる。身長差があるために必然的に上目使いになるわけだが

まあここは言う事を聞くか。

翔護 「はいっ、おいで」

両手を広げて、来いやっ!!の様な感じで構えていると

しばらくしてそれを察したのかうん!!と頷いて俺に抱きついて来る。

微笑むヴィヴィオの頭を撫でながら俺は歩いてシャツ八達の元え向かう。

ヴィヴィオ 「パパくすぐったいよ」

翔護 「パパって、俺の事がヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ 「うん!!ヴィヴィオのパパじゃだ？」

翔護 「いや、むしろうれしいよ。こんなパパだけどこれからよろしくね!!」

すると俺に抱きつく力が一層強くなり元気よく頷いてくれた。

翔護 「さて!!なのは達と合流するか。」

ヴィヴィオ 「レッツゴー!!」

〈翔護 side〉

その頃なのは達は……

ガサツガサツ！！

なのは 「ねえシグナムさん……」

シグナム 「なんだ？」

なのは 「翔護さんまるで……親子みたいだね」

シグナム 「そうだな。年齢的にも似たようなものだからな。」

なのは 「なんかうらやましいな／＼」

シグナム 「（ユーノ！！今なら・・・今のお前ならいけるぞ！）  
「そうだな」

第31話 金色の少女（後書き）

誤字間違いなどの指摘お願いします。

第32話 少しの嫉妬（前書き）

あれ〜？

いつから僕はツキイチコウシンニナッタんだ？

ボクハドウカシテシマイマシタ

グロロロロロロ！！！

モジッテムズカシイ

第32話 少しの嫉妬

そっだ。

たぶん私は憧れていたのかもしれない。

じつじつ、違う。ずっとそうであってほしいと望んでいたんだ。

だからかな？私じゃない誰かがあの人と一緒にいるのを見るとすく  
く……  
胸が痛んだ。

この気持ちは4年前から変わらない。

きつとそう、一目ぼれだったんだ。

だから分かる。ああ、これが恋なんだあ……

これが人を好きになるって事なんだ……って。

だからこの時私は……

なのは 「こらっ！ ヴィヴィオだめでしょ走ったら。」

翔護 「そっだよ。 転んだりしたら大変だからね。」

トテトテトテ・・・ぴたっ。

ヴィヴィオ 「ごめんなさい。 なのはママ、 翔護パパ」

わわわわ・・・

スバル 「ねえティア、気のせいじゃなければ今あの子翔兄となのはさんの

事、パパとママって呼んでなかった？」

ティア 「あんただけじゃないわよ。私にもそう聞こえたから・・・

・・・

・・・って、フェイトさんどうしたんですか？」

フェイト 「・・・・・・・・・・・・・・・・ツ!?? あ、ああぐめんぐめん!!ちよつと

驚いちゃって。なんで二人の事をそう呼ぶのかなあ〜って。」

ちがう・・・・・・・・

私はきつと、嫉妬していたんだ。

パパと呼ばれる翔護さんにじゃない。

パパと呼ぶ少女にじゃない。

ママと呼ばれるのはに……嫉妬していたんだ。

だから、ティアナに名前を呼ばれるまでは、手に力が入っている事に気が  
つかなかったんだ。

なのははユーノの事が好き。

ならどうして？なのは……私から翔護さんを奪うの？

私の大好きな人を……

・・・・・・・・い・・・・・・・・おい・・・・・・・・!!

こんなにも大切に思っている人を連れていっちゃうの？

・・・・・・・・ト!!・・・・・・・・ふえ・・・・・・・・ト!!

ジュジュッ

・・・・・・・・フェイト!!

フェイト 「!!!!?!! どうしたんですか翔護さん大声出して!」?

見ると私の顔の前に翔護さんの顔が迫っていた。

翔護 「どうしたもこうしたもないだろ？いきなりぼおっとしてて、少し

心配したぞ？具合が悪いなら少し休んでいいよ。」

フェイト 「い、いえそういうわけでは……。」

翔護さんの顔がこんなに近くにある／／／／／  
私の息遣いとか分かつちゃうかな？

翔護 「うん、でも顔赤いし……それにほら、少し熱いよ？」

ピタッ！！

閉じていたまぶたを開けると、私の額に翔護さんの掌が覆いかぶさっていた。

なんか恥ずかしい／／／

フエイト 「し、失礼します!!」

あまりに恥ずかしくて私は六課の執務室に逃げてしまった。

ボタン!!

フエイト 「はあ………最低だな。私。」

思えば、なのはは何も悪くない。

ただ私が一方的になのはを悪者にしただけ。自分が弱いばかりに。

あの女の子が翔護さん達をパパとママと言う風に呼ぶのはきつと、あの二人が暖かいから、安心できるからなんだと思う。

フェイト 「私、かつこ悪いなあ……変な意地張って」

それから少しの間、私は部屋で一人うずくまっていた。

コンコンッ!!

フェイト 「……………もうこんな時間かあ。はい？誰ですか？」

気付いたら既に夕刻の時になっていた。  
どうやら知らない間に寝ていたらしい。

翔護 「フェイト俺だけど、入っていいか？」

えっ！翔護さん？！

フェイト 「ちょ、ちょっと待って下さい……！」  
ガチャ

扉を開けたその先にいたのは、制服の上に白いコートを着た翔護さん。  
いつも見たいに大きな花鳥風月の入ったケースは背負っていない。

翔護 「体の様子はどう？もう落ち着いた？」

フェイト 「は、はい！もうすっかり元気いっぱいです！」

力こぶを作るようにして元気をアピールする。  
その様子をみて微笑みながらよかった。と呟く翔護さん

フェイト 「それで翔護さんどうしたんですか？こんな時間に？」

そう思っただけで良く見て見ると、翔護さんの後ろあたりに私と同じ髪色が見え隠れする。  
ちょうど翔護さんのズボンにしがみついて隠れている感じだ。

翔護 「ああそうだった。あの時フェイトは途中から居なくなつたから

紹介してなかったけど、ほらヴィヴィオ自己紹介して。」

すると、恐る恐るといった感じではあるが自分から私の前にモジモジしながら渦中の少女は現れた。

私もなるべく怖がらせない様に視線を低くして微笑んで見せる。

フェイト 「お名前言えるかな？」

一瞬少女は翔護さんをちらっと見るが翔護さんはただ微笑みながら頷くだけ

ヴィヴィオ 「ヴィヴィオって言います。よ、よろしくお願いしますー!」

そういつとそそくさとまた後ろに隠れてしまった。

その様子がかわいくて、私と翔護さんは二人して笑ってしまった。

ヴィヴィオ 「パパ、この人ヴィヴィオのママ？」

その言葉に一瞬目を見開いて驚いた様子の翔護さんだが、それは小さい子

の思い込みだと理解したうえで答えた。

翔護 「ううん、まあ言うならばママ見たいに優しくくて綺麗なお姉さんだつて

事は確かだね。その点ではママでもいい……のかな？」

私に同意を求める様な視線で語りかけてくる。

ええええええっ!？

わ、私もお母さんでいいの!？

翔護さんも嫌そうじゃなさそうだし……………

というか、翔護さんもちゃんと私をそう言った目で見ていてくれたんだ

うれしいかも／＼／＼

ヴィヴィオ 「ヴィヴィオのママじゃ……………やだ？」

涙目で見上げてくる仕草に胸が痛む

フェイト 「うん、ヴィヴィオさえ良ければ私の事をお母さんだと思って

甘えていいよ。」

するとまるで向日葵の様な笑顔で大きく頷いて嬉しそうに笑うヴィヴィオ

の顔がそこにはあった。

ヴィヴィオ 「うんっ！フェイトママ〜」

そこからはもう大変だった。

私の事をそう呼ぶと、翔護さんから離れて私に飛び込んできた。

最初はちよつと戸惑ったけど、この純粹無垢な顔を見たらこの子の保護者になつて良かったと思える。

髪色も同じだからパツと見は親子に見えるだろう。

その様子を翔護さんは目を細めながら微笑んでみる。

それが少し恥ずかしかったけど。

その後は結局遊び疲れて寝てしまったヴィヴィオを翔護さんがおんぶして  
家に帰って行った。

ヴィヴィオはなのはと私たちで面倒を見ることにした。

（トルムは子供の面倒をみた事が無いので難しく、雅の場合は、今後の  
成長に大きく影響を与えかねないので翔護さんが引き取るのを辞退  
した。）

そして、

ヴィヴィオ 「おはよう！なのはママ、フェイトママ……！」

なの・フェイ「おはようヴィヴィオ!」「」

こうして私たちの新しい一日が始まった。

第32話 少しの嫉妬（後書き）

今年の夏も絶対に熱くなりますな。

皆さん熱中症等気をつけて下さい

感想、指摘、誤字お待ちしております

### 第33話 忍びよる影

はやて 「それでは本日から捜査協力をしてくれる方をご紹介します。」

そう言うってはやてはその人物に前に出るように促した。

その人物は背筋を伸ばし、キリッ！とした姿勢で敬礼をした。

ギンガ 「陸士108部隊から来ましたギンガ・ナカジマです。皆さん協力して頑張りましょう！」

「ギンガさんが六課にやって来た！！」

「side ギンガ」

私は自己紹介が終わると真っ先にある人の所に向かった。

それは………

翔護 「久しぶりだねギンガ。こうして一緒に仕事をするのはいつ以来だっけ？」

ギンガ 「あれは………まだ翔護さんが少将研修だった時ですね！！」

そう、翔護さんに会ったためだ。

私の大好きな人。

あの4年前の空港火災の時に助けられてからはもう翔護さん以外の男性には興味が無くなった。

たぶん、助けてもらったからってという面もあるかもしれないが、そ

れ以上

に彼の内面の優しさと、頼りがいのある背中に惹かれて行った。

私が翔護さんの事について調べていたある時、たまたまであるが、研修で私のいる108部隊に短い間ではあるがやって来た。

翔護 「今日から2週間ほどお世話になります。風切 翔護です。  
階級は……言うならば見習い少将です。よろしく願いします  
！！」

日ごろの疲れが一気に吹き飛んだ。

ギンガ 「（この人って………あ、空港の時の！！！！？）」

そう思った私はいてもたっても居られずすぐに話しかけた。

ギンガ 「すいません、少しお時間よろしいですか？」

翔護 「ん？大丈夫ですよ。どうかしましたか？」

ギンガ 「あの、空港火災事件の事覚えてます？二人の女の子が最後に救出された事件なんですけど……」

すると翔護さんは目を細めながら少し考えると、急に私の方をみて頭を撫でてきた。

その手はすごく暖かくて、大きくて、安心できたのを今でも覚えている。

翔護 「そうかぁ君はあの時の子だったんだ。ごめんね、今まで何も連絡できなくて。でもよかった。こうして無事に生きていてくれて。」

そこからは他愛もない世間話などをして各々の仕事に戻った。

思えばあの2週間は私の中ではかけがえのない時間だった。

まあ、結局私の思いを伝える事は出来なかったけど……

ギンガ 「はい、これで午前の分は終わりました!!」

翔護 「お、ありがとう。いやあくギンガのおかげで仕事はかどるよ。」

ギンガ 「いえいえ！（褒めてもらっちゃった／＼／＼）」

いい忘れてましたが、私なんと六課での配属先が、翔護さんのウイング隊になりました！！

これでフェイトさんよりも翔護さんに近付けたと思います。

翔護 「さてつと……もうこんな時間かぁ。ギンガ、ご飯行かない？」

ギンガ 「はい！行きます！！」

翔護 「それじゃ、食堂に行こうか。」

（食草）

もぐもぐ

翔護 「……………」

もぐもぐもぐ

翔護 「……………」

もぐもぐもぐもぐ!!

翔護 「もう無理………」

ギンガ 「あれ？もう食べないんですか？もぐもぐ」

翔護 「うん。見てるだけで満足だよ………」

そう言って翔護さんは私の注文したパスタを凝視していた。

たったの6人前なのに？

わ、私変なことしたかな？

翔護 「ちよつと俺は休むから先に執務室戻って………」

そう言って翔護さんは扉から出て行った。

ギンガ 「きつと具合が悪かったんだ。うん、きつとそつだ!」

.....

コンコン!!

ギンガ 「失礼します!!翔護さん……って、あれ？」

誰も居ない……？

おかしいな、執務室に戻ってて言ったからてっきりいると思っ  
たん  
だけど。

すると、後ろの扉がいきなり開き、翔護さんが入って来た。

翔護 「もうご飯は大丈夫？」

ギンガ 「はいっ!すぐにでも仕事に取り掛かれます!」

翔護 「了解、それじゃ、早速行きますか!!」

そう言って午前の続きをしつつ考える。

私が執務室に入って10秒も経ってない。

その後に扉から翔護さんが入って来た。

でも、来る時廊下には誰もいなかったはずだけど………

翔護さん何処から来たの？

謎です。

くギンガside outく

くとある部隊の子狸く

??? 「ぐふふふふ、せいぜい油断してるがいい翔護さん！あんなの家は  
もうすぐこちらに制圧されるんやー！」

謎の人物がそうつぶやくと、目の前には目じりに涙を浮かべるエリオと

キャラの姿が映っていた。

??? 「普段少将権限を使ってるからや!!こっちは部隊長権限を使わして

貰うで!!.....さあエリオ、キャラ。翔護さんの家、教えてな?」

エリオ・キャラ 「ひいつ!!!!!!!!」

フェイト 「はやて」少し壊れてるよ.....キャラが。」

はやて 「うるさいでフェイトちゃん!!せやかてフェイトちゃんも知りたい

やる?翔護さんの家が何処にあるか?」

すると途端に頬を朱にそめてもじもじし始める。

フェイト 「そ、それは知りたいけど……で、でもっ！これは横暴だよ」

その言葉を聞くと意地の悪そうな笑みを浮かべてはやては話す

はやて 「それじゃ、フェイトちゃんはここから出て行ってもええで。  
ただし！！、ただしやっ！この二人が翔護さんの家の場所を教えてくださいても  
フェイトちゃんには教えへんからな！！それでもええんなら行ってええで」

フェイト 「ッ！！！！はやて……それは卑怯だよ」

はやて 「なんも卑怯なことあらへんでえ？。さあどうするっ」

結局首を縦に振るフエイトであった。

第33話 忍びよる影（後書き）

すでにこの暑さ……

皆さまは熱中症とか大丈夫ですか？

まだまだ夏はこれからですのでお気をつけ下さい

第34話 隠せない真実

～side～

～ポーン

周辺がちょうど夕焼けになった頃、とある少将の家のチャイムが鳴った。

翔護 「あれ？こんな時間にお客さん？炎鬼！！ちょっと出てくれ！今てが

離せない。」

炎鬼 「りょくかいつと、はいはいどちらさん……で……」

台所で今晚の夕飯を作っていた翔護はてっきり宅配か何かだと思ってそのまま作業に没頭していた。

だが、先程から玄関に向かったはずの炎鬼が帰ってこない。

それどころか、聞いた限りだと少し様子がおかしいようにも感じられる。

なんとなく戸惑っている感じだ……

結局すぐさま手を洗い、翔護も玄関に向かう事にした。

翔護 「おい炎鬼一体どうしたん・・・・・・・・・・だ？」

固まる。

ただただ固まる。

翔護と炎鬼は二人して玄関で5秒ほどフリーズした。別に好き好んでフリーズした訳ではないのだが。

突然だが、皆さんはストーカーをご存じだろうか？

ある特定の人物の近辺情報や、下着、食べ物、趣味の好みなどを教えて  
もいないのに把握していて、在住している住所さらには家の鍵なども  
持っていると思われる人物だ。

この点を踏まえて目の前の出来事を整理してみる。

はやて 「こんばんわ〜翔護さん。どやあ？驚いたやる!!」

そこで、してやったりと言った顔でもの申すはやて。

ヴィヴィオ 「パパ、こんばんわあー!!ヴィヴィオ遊びに来たよ  
お!!」

無邪気な笑顔で翔護に抱きつくヴィヴィオ

フェイト 「ここが翔護さんの家かあ〜 いいなあ〜／／／／／」

頬を薄紅色にしてじいっとあたりを眺めるフェイト

ギンガ 「座標は特定した。」

なぜかすごく冷静な眼をしてもものすごい速さで地図を作り上げるギ  
ンガ

このカオスな隊長達の後ろから申し訳がなさそうにFW達が出てくる。

エリオ 「すみません翔護さん……………」

キャロ 「部隊長に脅されて……………」

翔護 「なるほど。つまり、教えてしまったのか……………」

エリ・キャロ 「……………」

その時翔護の瞳から一粒の雫がこぼれ落ちたのは言うまでもない。

ティア 「え、炎鬼、あんたどうにかしなさいよ!!」

炎鬼 「馬鹿じゃねえの?!このカオスな状況をどうしろって言っ  
んだよ!!」

スバル 「氷臥もどうにかできないの？」

氷臥 「いくら現人神であろうとも不可能は存在するんだよ……」

〈10分後〉

翔護 「……………なるほど。部隊長権限で俺の家を脅したと言  
う事か。」

はやて、これは立派な職権乱用だぞ？」

はやて 「普段から乱用してる人に言われたないわ！！」

そんな事で口論している二人を置いて、初めてきた隊長達とギンガは各自、翔護の自宅を見て回っていた。

なのは 「うわー 芝生の大きな庭なんだあ。憧れるなあー！」

フェイト 「なんか落ち着くなあこのリビング」

ギンガ 「シグナムさん、さっき見てきましたが、地下に道場がありましたよ！」

シグナム 「なにっ！？それは本当か！？」

翔護 「あ、そうだ。丁度試作段階のプリンがあるけどヴィータ食べる?」

ヴィータ 「本当か!? 食べる食べる!」

リン 「ああ! ヴィータちゃんだけじゃないですう! リンも食べるです!」

アイス争奪戦を始める二人

エリオ 「フェンリルおいで! 外で遊ぼうよ!」

キャロ 「フリードも一緒に行こ!」

フエン・フリ 「わん！（キュル！）」

そして月明かりが照らす庭に駆けだす二人と二匹。

スバル 「ねえねえティア、トルムさんに稽古付けてもらおうよ！」

ティア 「そうね……お願いしてもいいですか？トルムさん」

トルム 「ふむ、まあいいだろう。おい雅！お前も手伝え！」

雅 「ええ……？頼まれたのトルムじゃん」

そんな事を言いながらしぶしぶついて行く雅。

シャマル 「でも翔護さん、本当にいい所に住んでるわね。」

ザフィーラ 「道場まで有るのだから日ごろの鍛錬を怠ってもないよ。ようだ。」

そしてまた時は過ぎていく。

翔護 「はあ、仕方ない。もうこんな時間だし今さら帰ってくれって言う

のもなんだからなあ。はやて！ご飯作るの手伝え！！」

その言葉にはやてを始め、なのは、フェイト、さらには早坂兄弟も

全 「……………承知！！！！」

と、なぜか息のピッタリな返事を返した。

でも、その顔は皆楽しそうだった。

トントントントン！！

リズムカルな包丁の音がリビングに響き渡る。

フェイト「（幸せだな） 翔護さんところやって一緒に料理が出来るの」

先程から終始笑顔で野菜などを切り刻んでいくフェイトは周りから見れば  
もはや女神の様な顔であった。

はやて「フェイトちゃんはそんなに翔護さんと一緒なのがうれし  
いんかあ」

その突拍子もない言葉に、手にした包丁をブンブン！と振りながら顔を赤らめてあわわわ言っているフェイト。

ティア 「とりあえずフェイトさん、包丁を置いてください!！」

言われて初めて自分の行動に気づき、また顔を赤らめる。

ギンガ 「それにしても翔護さん、料理お上手ですね。」

翔護 「まあね、気が着いた時にはもう自分で作ってたし。」

そんな事を話しているとあっという間に料理は完成した。  
軽く10人以上はいる中での食事の準備だけあって、料理の数もだ  
いぶ多い。

翔護 「とりあえず、テーブルに並べてしまおうか。」

アギト 「奥から追加のテーブル持ってくる!！」

アギトはそういって、ふわふわ浮きながら隣の部屋に行ってしまった

た。  
当然の事ながら、アウトフレームのアギトでもテーブルを持ってくるのは結構むずかしい。

それを察したのが、意外と優しい炎鬼と、氷臥がそのあとをついて行った。

翔護 「それじゃあ!—!」

全 「……………」いただきます!—!(わん!)(……………)

エリオ 「おいしいです!!」

スバル 「うん!なんか食欲を促進させる感じ!!」

フェイト 「翔護さんの料理って本当においしいですね!!」

ギンガ 「すごい……って、私の女としての心が……」

どうやら各自思い思いの食を楽しんでいるようだ。

けれども、ギンガとシャマルは、翔護の料理の腕前に結構ショックを受けている。

ヴィータは目を輝かせながら、肉系の料理をかぶりついている。

トルム 「もぐもぐ………つぐう!雅!!、お前梅干を混ぜたな!?!」

雅がさりげなくトルムの取ったサラダに梅干を入れていて、  
それに食べてから気付いたトルムが鬼の形相で雅を睨む。

トルムは……梅干が苦手だ。

雅 「しいゝらなゝい 好き嫌いするから罰が当たったんじゃない  
のおゝ」

そんな争いが繰り返されている中、翔護は一人テラスの方で風に  
当たっていた。

翔護 「いいかげん、俺も動かないとな。邪神の奴は必ず俺に接触してくる

だろうし。俺がなんとかしなきゃ……………」

唯一人、神童組合で『転移』のスキルを持つ翔護。

これはいわば翔護が現世での最後の砦となっている事を意味している。

仮に、邪神にオリジナルの『転移』を奪われたとしたら、今度こそ神界は墮ちるだろう。

翔護 「そんな事はさせない……………あの人たちが命をかけて守った

んだ。そんな事させてたまるか!!!!!!!!!!!!」

自然と手に持ったグラスに力が入る。

自分の独白につい熱が入ってしまい、冷静になる。

翔護 「いや、俺一人じゃない。皆で守るんだ!!」

火照った体には、少し心地よい温度の風が吹き抜けた……

第35話 師匠と弟子？（前書き）

ぐはあ！！

な、なんて執筆の遅さなんだ……

恥ずかしい限りです。申し訳ございません。

第35話 師匠と弟子？

）訓練場

）……

ズザァー・・・

スバル 「つく！はあああああああ！！」

トルム 「甘い！！そんな攻撃でこの神龍拳を体得しようなど50  
0年早い！！」

スバル 「うわあああああああ！？？」

なのは 「すごいスバル・・・トルムさんに教えてもらってから  
気に強く

なってる。はあー……なんだか教導官として自信無くすなあ・・・」

翔護 「いや、なのはの教導あつての今だからな。たまたまトルム  
とスバル

の戦闘スタイルが同じだから、学ぶものも多いんだろう。」

なのは 「でもなんか、寂しいですね」

翔護 「教え子つてものは知らないうちに巣立っていくものだよ。  
それじゃ、俺も炎鬼と氷臥を鍛えに行くよ」

そう言って持っていた缶コーヒーをゴミ箱に捨て訓練場に向かう。

なのは 「私も、頑張らなくっちゃ」

その呟きは誰にも聞こえない。

なのはの覚悟の独白だった。

〈ギンガ side〉

ギンガ 「あっ！翔護さん、ここにいたんですか！」

六課に来てからの事で頭がいっぱいな私は、ちょっと息抜きをしに行くついでに翔護さんを探していた。

翔護 「ん？どうしたんだいギンガ？」

ギンガ 「あの〜一つ聞きたいんですけど、翔護さんってなんか武術とかやっています？」

そう、前々から気になっていた事。

それは翔護さんの歩き方とか、息遣いである。

翔護さんが普段何気なくしている事が、私たち戦う者にとっては正に武人の姿である。

炎鬼と氷臥も見た感じ翔護さんほどの完成度ではないが、それでもかなり  
の強さをつかがわせる仕草をしている。

翔護 「そうか、まだギンガには教えてなかったんだっけ。そうだねえ、  
教えるついでにちょっと組み手しようか。」

ギンガ 「あ、はいっ！」

そんな軽い気持ちでやるものじゃなかった事を後で思い知った。

ギンガ 「はあ・・・はあ・・・どうして一撃も当たらないの！  
？」

翔護 「駄目だな。頭では分かっているみたいだけど、まだ力任せな  
ところが  
あるよ。」

私の攻撃は全部打っては流され、そしていなされ、最後には背後を  
取られるか、  
決定打を入れられる。先程からその繰り返しである。

ギンガ 「この感じ、合気道？でもなんか違うようなあ・・・」

翔護 「おっ！いい線いつてるね。まあ一応合格点の丸はあげるよ」

後から教えてもらったけど、翔護さんの使うこの流派？は聖拳流って言う

らしく、単なる武の部分だけ見ても強かった。

どうやら前にスバルが教えてほしいと言ったらしいが、翔護さん曰くスバル

にはこの流派事態が向いてないらしく違うものを教えるそうだ。

それが、先程トルムさんに教えてもらったた神龍拳だそうだ。

スバルが無理か・・・・・・・・・・なら！！

ギンガ 「翔護さん！！私に・・・・・・・・私に聖拳流を教えてください！！」

結果はあっさりOKだった。

なんでも

翔護 「さっきの組み手をしてて、どうやらギンガはスバルと違い、  
冷静

に分析尚且つ、相手のどこをどう攻撃すればいいかが見極められて  
いる。

ならこの技がきつと合つはずだよ」

と言つことらしい。

ギンガ 「（これで・・・これでフェイトさんより少しはリードで  
きた・・・

・・・かな？）」

そんな感じで終わりのストレッチをしていると、ちよつとだけ意地  
悪な

考えが思いついた。

ギンガ 「翔護さん、聖拳流って覚えるのはそんな簡単じゃないで  
すよね？」

翔護 「まあ、そんなに早くは覚えられないけどギンガならすぐ実戦レベル

まではもっていけると思うよ」

ギンガ 「それでも、暇なときは常に教えてもらっていた方がいいですよ？

それこそ、普段から一緒にいるとか……」

翔護 「まあ……その方が吸収率も高いかな？」

つ  
ふ  
つ  
ふ  
つ  
ふ  
!!!!

ギンガ 「それなら・・・・・・・・・・今日から翔護さんの家に私お世話になり  
ます!!お願いします!!」

だめかな・・・・・・・・？

言ってから後悔する私。

なぜこの結果に陥ったのかが理解できないけど

でもでもでも、こうでもしないと本当にフェイトさんには勝てない。

私はこれでもハンデがあるのだ。

今このタイミングで埋めないと

翔護 「うーん、合宿見たいなものかぁ・・・・・・・・まあ空き部屋  
も丁度  
あるし、大丈夫かな？」

ギンガ 「そうですね……だめですよ……つつつて！  
！！  
ほ、ほほんとうに良いんですか！？？」

翔護 「えっ？嫌だった？だったら別に暇な時六課でやるk 「い  
えいえいえ  
いえいえいえ！！まったく大丈夫です！むしろありがとございま  
す！！」「う、  
うん？まあそういう事でいいなら大丈夫だよ」

ギンガ 「(やったあ~~~~) 今日の私すごくついてる！！！」

翔護は知らない。

後にこれがあの悲惨な戦いにまで発展するなんて事は……

その頃スバルは・・・

トルム 「そうだった！！今の感じを忘れるな！！その姿勢を常に意識しろ！！！」

スバル 「はっはい！！ 二ノ型 龍弾撃！！！」

ドドオン！！

トルム 「よしっ！！どんどん来い！！！」

地面に結構な数のクレータを作っていた・・・

第35話 師匠と弟子？（後書き）

ネタほしい〜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3088m/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikers～神聖なる風～

2011年9月2日03時09分発行